

---

# NOT DEAD LUNA

haya

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

NOT DEAD LUNA

### 【コード】

N6019Z

### 【作者名】

haya

### 【あらすじ】

浅戸慧はやる気も理想もなくただ何となく無難に毎日を過ごしている高校教師。  
だがある日、学校主催の夜回りに参加してしまったことから波乱の事態に・・・

## 解放

1

この世の中は悪意に満ち溢れている、と慧けいは思う。

人情や思いやりなどが流行ったのは一昔前の話。今の時代、人間は皆他人を出し抜き、陥れることしか考えていない。少しでも隙を見せれば、そこにつけ込まれてひどい目に遭わされてしまうだろう。

慧は人間が嫌いだった。滅んでしまえばいいと何度考えたか知れない。

自分も含めた全ての人間が、である。そうすれば少なくとも世界をとりまく悪意はなくなる。人間ごとき存在は百害あつて一理なしだ。一体何の役に立つたろうか。確かにこれまで文化や経済、科学が発達した偉業は認めよう。しかし、高度な科学や文明がなくても地球は存在したに違いない。それも環境破壊という被害を受けない最高の状態で。人間が出現してから地球は変わった。食物連鎖の輪が断ち切られた所為で、生態系は乱れ、絶滅する種もかなりの数に及んでいる。自分以外の生き物のことはお構いなしだ。他人の迷惑を省みない習性の為せる業ではないか。それが将来、自らにとつても悪影響を及ぼそうとは気付きもしない。無駄に知恵をつけ、知能が発達していくにつれ、奸知にも長けてくる。その結果、私利私欲のために奪い合いや殺し合いを始める。なんと憐れで醜い種族なのだ。人間は悪意の象徴だ。

2

慧は黒板にチョークを走らせながら、事務的に授業を進めていく。生徒が理解していようがしてしまいが関係ない。わかっていれば、テストで結果として出るはずだ。だが生徒の成績など、慧にとつてはどうでもよいことだった。

教師になつてもう三年が経とうとしている。夢や理想なんてもの

は、最初から微塵もなかった。こんな仕事に望んで就いたわけではないから。

大学四年の年、周りの同級生は皆、採用試験だの企業面接だので多忙な日々を送っていた。しかし慧は就職活動を一切行わなかった。自分が働いている姿など想像もつかなかったし、働こうとさえ思わなかった。将来どうなりたいかまるであらさず、そのまま気楽な学生でいたかった。社会へ出るのが嫌だったのだ。大学院に進学したのはそんな理由からだった。

大学院生活はあつという間だった。卒業までにやりたいことが何か見つかり、就職も人並みに出来ると思っていた。しかし、そううまくはいかないものだ。二年生になって、同級生が次々と内定を決めていく中、慧は受ける会社にことごとく落ちた。どの企業でも『御社では是非働きたい』という願望があまりなかったので、おそらく試験官も、慧に仕事への熱意が欠けていると感じ取ったのかもしれない。結局、卒業する頃になっても就職先は見つからず、一応念のために取った教員資格を生かし、この私立高校で教鞭を執る道を選んだのである。

教師は聖職だとよく言われるが、慧はそう思わない。夢も目標もない大学生が、お遊びで取れる程度の教職課程で、生徒に何を教えられるというのか。せいぜいテストでの点数の取り方だけだ。道徳や心を豊かにする授業が出来るわけない。しかし教師に求められるのは、そんなメンタル的な指導よりも、点数の取り方を教えることなのである。生徒の人間性はどうなつたていい。偏差値こそが全てなのだ。この三年間の教師生活で慧はそれを悟った。しかしその方が慧にしてみれば都合が良かった。ただ機械的に授業を進めてゆけばよいのだから。変に感情移入するのはタブーだ。最低限の授業をしていけば、給料も貰えるし、その給料は生徒の授業料で賄える。ギブアンドテイクが成り立っているではないか。現に学校とって、生徒は『お客さん』である。慧もその点にはまったく同意だった。

チヨークを置いて、教壇に向き直った。顔を上げると教室全体が見渡せる。生徒はクラス全体の約半数位しか出席していない。しかもちゃんと聞いているのは、さらにその三分の一程度である。学年末テストも終わり、来週半ばからは春休みに入る。生徒たちが浮かれるのも当然だ。卒業生も一週間前に送り出し、その時期の授業は野球の消化試合のようなものだった。聞いていない生徒はといえば、漫画を読む者、弁当を食べる者、寝る者、携帯メールに夢中になる者、集団で会話に熱中する者と様々だった。

慧はそんな生徒に特に注意したことはない。それでも淡々と英語の授業を進めて行くのが今までの、そしておそらくこれからのやり方であった。

慧の勤務する私立S高校は、総生徒数約五百五十人、学校のレベルとしては中程度の、ありふれたものである。出来る生徒もそれなりにはいしたが、素行不良の連中も少なからずいた。

そんな生徒たちを見ていると慧は思う。こんな自立心も向上心もない子供たちに、将来何を期待できるのだろうか。教師という職業は、最も子供と接する職業であるだけに、そういった不安材料をまざまざと見せつけられる。教職に就いた自分に嫌気すら覚えてくる。

チヨークで汚れていない方の手で、短い髪をかき上げた。授業の残り時間を確認するため腕時計に目をやろうとしたとき、ちょうど終業のベルが鳴った。もちろん延長はしない。

「それでは今日はここまでにします」

いつもの締めめの文句を言うと、教科書を閉じ、教室を後にした。その日六時限目の授業が終わった。金曜日だったので、放課後の校舎内は心なし空気が軽い。テストの採点も済ませているし、すぐ帰ろう。職員室に戻った慧は、そう思いながら鞆に荷物を詰め始めた。

「浅戸先生」

誰かが慧の後ろから声をかけてきた。国語科の岡崎宏直だ。彼は

三年の学年主任であり、生活指導係も務めている。

「急で申し訳ないんですが、今週の巡回、浅戸先生にも一緒に行って頂けないかと思って」

「私ですか」

「ええ。このまえN高の先生があんなことになったでしょう。それで人手をもつと増やそうと決まったんです。飯田先生と竹山先生にも御同行してもらうことになりました。あと黒川先生も行く予定でしたが、インフルエンザでは到底無理ですし。もし明日、他に予定がなければ一緒にどうですか？」

ここ 県T市はこの数年の間、未成年による犯罪が多発している。市の中心部に繁華街があり、毎夜ごとに若者で賑わっているのだ。しかも週末になると、その数も半端ではなくなる。中には中高生がいる場合も決して珍しくはない。未成年の犯罪が増加傾向にあるのも、ここが主たる原因だというのだ。これでは治安上良くないと、地元の警察と市内にある六つの高校が集まり協議をした結果、犯罪防止と未成年の指導を目的とした巡回を、毎週末行くと決定したのである。各校の指導係が順番で繁華街を回り、中高生らしき者がいれば、学校名と氏名を訊き家に帰らせ、また喧嘩をする者がいれば、仲裁に入る。必要があれば、警察への通報も辞さない構えであった。

慧が頼まれたのは、病気で療養中の黒川という教師の代理だ。恐らく一度きりの奉公になるだろう。幸運にも と言うより生憎だが、翌日の予定は何にもなかった。慧には恋人がいるわけでもなく、これといった趣味もない。

「それは構いませんが、私が行っても足手まといにしかならないのでは」

「いえいえ、いいんですよ。人数さえいけば向こうもヘタに手は出せません」

「そんなものですかね」

約半年前から実施されたこの試みは、始める前と比べて犯罪が減

少するなど意外に効果はあった。巡回を提案した学校や警察関係者はほくそ笑んでいだ。しかしそれも束の間、指導係にとつては恐れていた事件が起きてしまった。

巡回を行っていた他校の教諭が、ある少年に学校名を問い質そうとして、その少年と仲間数名に袋叩きにされたのだ。教諭はその時運悪く一人で行動していたので発見が遅れたのである。見つかった時には全身打撲、肋骨四本と、鎖骨と腕の骨を一本ずつ折る重傷を負っていた。全治三ヶ月で現在入院中である。危害を加えた少年たちは翌日逮捕された。いずれも一五、六歳の未成年だった。ついで一ヶ月前の出来事であった。

少年に襲撃されるかもしれないという懸念は予想されていたことではあった。それに対する予防策が充分にとれていなかったため、実際に起きてしまったのだが。この事件は大きな波紋を呼んだ。それまで巡回を行っていた教師たちに不安と恐怖を与えるには充分過ぎた。無理もない話だ。だがこれで止めるわけにはいかない。そこで、増員して巡回を行うという善後策が臨時の集会で提案されたのだ。

「何とかお願い出来ませんか」

岡崎は生徒には厳しいが、教師同士ならなかなか気さくな人物である。慧は普通、生活指導の教師というものは誰に対しても高圧的なものだと思っていたが彼は違った。五十代半ばにして教師生活三十余年の彼が、慧のような若輩者の新米教師にもきちんと敬意を持って話してくれる。

日頃世話になってる岡崎の頼みだ。断れるはずもない。少し間を置いてから、慧は言った。

「わかりました。それでいいなら一緒に行きます」

「そうですか。ありがとございます。では明日の午後十時に学校に集合なので、宜しく願います」

正直気が進まなかったが、たった一晚限りだ。何も心配はいらないと思っていた。しかし、それが自らの人生における転機の第一歩

とは、そのときの慧には知る由もなかった。

2

明くる土曜日、慧は午後十時十分前に職員室に到着した。

もう巡回に行くメンバーは全員揃っている。

「遅くなってすみません」

時間に間に合ったとはいえ、自分が最後に到着したのだから一応断りを入れておいた。

「や、来ましたね。ご苦労様です」

岡崎が座った椅子ごとこちらに振り返り、のびをしながら話しかけてくる。

「始めは戸惑うかもしれませんが、他の先生方のやっていることをちゃんと見ておいてください。まあそうあまり堅くならず」

「はい、宜しくお願いします」

慧は軽く頭を下げた。

「岡崎先生。全員揃いましたし、そろそろ行きましようか」

そう言ったのは、体育科の内藤である。体育大学出身で、スポーツ万能といった感じだ。身長は低い方であったが、日タトレーニングを欠かしていないらしく、四十歳という年齢には相応しくない筋骨隆々の体をしている。彼はそのスポーツマンたる容姿に違わぬ陽気な性格で、生徒たちへの受けもよかった。

「それでは皆さん、これから腕章を配ります。左腕に付けておいてください」

集まった教師に腕章を配っているのが、数学科の大倉であった。生徒指導も兼ねている彼女は四十代前半なのだが、もっと老けて見えた。地味な服装で化粧つ気もなく、お洒落とは全く無縁の女性だ。どこことなくぎすぎすした雰囲気は漂っていて、その歳でまだ結婚していないのも頷ける。私生活にも潤いがないのであると容易に憶測出来た。



緑の地に白で『指導係』と書かれた腕章。受け取った者から左腕に通し、安全ピンで服に繋ぎ止めている。

(服に穴が空くのは嫌だけど……)

この場でそんな我が儘は言っていられない。慧は仕方なく、皆と同じく腕章を付けた。

リーダーである岡崎が、注意点と心得を確認すべく、口を開いた。「えー、皆さん。先月N高校の先生が大けがを負われたのは既に存じかと思えます。これは決して他人事ではなく、我々も充分な対策を取る必要があります。そこで今回、いつもの巡回のメンバーである私と内藤先生と大倉先生の他に、飯田先生と竹山先生と浅戸先生にも御同行して頂けることになりました。最初は六人一緒に行動しますが、より広範囲を見回るために、二人ずつペアになって三手に別れて行動します。組み合わせについては後ほど決めるとして。

未成年らしき者を発見したら、速やかに指導して家に帰す。必要ならば親御さんや警察に連絡をするといった形をとる場合もあるかもしれません。咎めるのではなく諫めるように接し、刺激したりしないよう冷静な対応を心懸けてください」

学校を出ると、すでにタクシーが二台待ち構えていた。

岡崎と大倉と飯田が前のタクシーに乗車するのが見える。慧は内藤に促され、最初に乗せられた。次に竹山、最後に内藤自身が乗り込むと自動ドアが閉まる。後部座席は三人掛けでもまだ余裕があるはずだ。しかしとても窮屈に感じるのは、巨漢の竹山が約二人分の席を陣取っているからである。当の竹山本人は涼しい顔で座っていた。

社会科の竹山は慧より二、三歳年上なだけである。しかしそんな彼を実年齢よりももっと高く見せるのは、若くして既に薄くなりかけた頭と肥えた体、眼鏡の奥の睨めつける目の所為であろう。その外見に違わずねちねちとした嫌味な性格で、もちろん生徒にもすこぶる評判が悪い。どうやら無抵抗な生徒を頭ごなしに押さえつける

ことに快感を感じているようだ。実のところ、慧もこの男が苦手だった。常に真黄色のジャンパーにスラックスという出で立ちは、違った意味での貫禄があるとも言える。その日も当然のように黄色のジャンパーを羽織っていた。

内藤は行き先の繁華街を運転手に告げると、一つ大きな深呼吸をし、腕組みをして背もたれに寄りかかった。問題の繁華街はそこから車でおよそ十分といったところだ。

「内藤先生、今までの巡回ってどんな感じだったんですか？」

竹山が興味深そうに尋ねた。腕組みをしたまま内藤が答える。

「そうだなあ。反抗する子もいるが、腹を割って話せば大体は素直に聞き入れてくれるよ。まあ殆どは面倒臭くてしぶしぶ言うことを訊くといったところだな」

「でも中には突っかかってくる輩もいますよね」

「あいつらはピーピー喚くだけさ。ちよつと大声出せば誰でもビビると思ってる。俺にはそんなの通用しないが」

大声で生徒を威圧するのが得意な竹山にとっては、さぞかし耳が痛い話だろう。しかし当の本人は我関せずといった様子で訊いている。

「何か気を付けなきゃいけないことってありますか？」

「自分の姿勢を崩さない、だな。少しでも弱みを見せればあいつらつけ上がって来るぞ。特に浅戸先生みたいな人は注意しないと」

慧は見た目ガゼルのような、スマートでしなやかな体付きをしている。スーツも自分の体にぴったり合ったものをよく着用するので、ボディラインがはつきり判るのだ。もし何も知らない他人が見ると、華奢だと思われるかもしれない。

「それは言えますね。浅戸先生、ナメられないですよ」

竹山が下卑た笑い声を漏らす。

「私は皆さんの陰にいますよ」

不愉快な気分になったが、慧は軽くあしらった。

「N高の先生の場合、一人で突っ走ったからあんな目に遭ったんだ。

今回は人数も集めだし、単独行動しない限りは、いるだけでも大丈夫だろ。あいつらが集団ならばこっちも集団で相手するのさ。『目には目を』だ」

余裕の表情で語る内藤に慧は、そんな浅はかな考えでいいのかと内心思っていた。多くの人数で制圧されるからこそ、逆に彼らは反発してより凶暴になるのではないか。しかしその考えは敢えて口にしなかった。

もう夜の十時を回っているのだが、車内に外の光が差し始めた。窓に顔を近付ける。車の流れはスムーズなのだが、その数は大量に増えている。目的地はもう目と鼻の先だ。

沢山の人間が行き交っており、その殆どが若者であるとタクシーの中から判る。中には会社帰りのサラリーマンやOLもいた。

どこを見ても人、人、人……一体どこからこんなに湧いて出て来るのだろうか。人が大勢集まる所にはよりたくさんの悪意が生まれる。巡回なんか引き受けるんじゃないかという後悔の念が重く押し掛かってくる。人間嫌いの慧は当然、人混みも嫌いだ。嫌いという言葉ではとても言い足りない。狭い部屋の中に大量の蛇を放ち、その中に閉じこめられるくらいの嫌悪感を抱いていた。自然に動悸が早くなり、息が詰まりそうになる。これからのことを考えると、思わず溜息が漏れた。

「あれ、どうかした？ さすがの浅戸先生でも緊張してきましたか」竹山が茶化して言ったが、

「いえ、車に弱いんです」とだけ応えておいた。

それからしばらくして、タクシーはハザードランプを点けて停車した。内藤が運転手に料金を払う。もちろん領収書を貰うのを忘れなかった。

タクシーを降りた瞬間、一陣の風が吹き抜けた。慧の短髪がサツとなびく。冷たい風だった。この時期夜はまだ寒い。

空を見上げると、大きな満月がぼっかりと浮かんでいた。グレーの雲が流れる様まで手に取るようにわかる。街の明かりを差し引い

たとしてもまだまだ明るい。

前のタクシーに乗っていた岡崎たちはもう既に降りて待っていた。慧たちが合流すると、

「まずここの大通りをいきます。途中若者が大勢集まると思われる場所にも立ち寄りながら、裏通りの方も覗いていきます。主な場所を回ったら、最後に三組に分かれて行き届かなかった箇所を見回ると。時間はそれで多分二、三時間程だと思います。くれぐれも軽率な行動は控えるように」

と先頭に立って歩き出した。

慧は物珍しげに辺りを見回した。この近辺は前に一度だけ通ったことがある。しかもそれは昼間だった。昼と夜とではこんなに変わってしまうものなのかと驚いた。夜なのに真昼の明るさ、だがその表現は、日中と同じ光景を意味するものでは断じてない。青とオレンジの街灯、そして様々な色のネオンが混じり合い、歩道や建物は毒々しい程の色に染め上げられていた。奇妙な異国の世界へ迷い込んだ気分になる。

まさにゴミ溜めと呼ぶに相応しい中に、悠然と存在していられる人間が嫌でも目に入る。肩で風を切りながら仲間と練り歩く者、集団で道路端に座り馬鹿笑いしている者、必死で女をナンパしている者。そのどれも全てに『表情』がなかった。喜怒哀楽ではなく、言わば心の『表情』だ。外見こそ違えど、中身は一緒である。個性の欠片も見当たらない。彼らは本当にここでこうしていることが望みなのだろうか。しかしそんなものは解りたくもないと慧は思った。「たくさんいますね。中高生かどうか、これじゃ見分けがつかませんよ」

「未成年とはいえ、体だけは大人と変わらないからな。こういった非行を防ぐのに必要なのは観察力と洞察力、あと教師の勘だ」

『指導係』の腕章をした教師集団は、明らかにこの場の雰囲気とは場違いな空気を一帯に漂わせていた。周囲からは好奇の視線が容赦なく浴びせられる。吐き気がする思いだった。

唐突に、岡崎があるグループに目を付け、歩み寄って行く。六、七人はいた。コンクリートのポーチに腰掛け、タバコを吸いながら大声で話していた。岡崎が近寄って行くと、まず一人がそれに気付き、顎をしゃくって皆に伝える。全員が一斉にこちら方を向いた。今までへらへら笑っていた顔も瞬く間に強張った。

「君たち、高校生だろう」

柔らかいが、有無を言わせぬ口調で岡崎が尋ねた。

「ああ？ なんだよ、あんた」

岡崎は左腕の腕章を指し示す。

「こついう者でね。君らのような学生が、こんな時間で遊んでいるのは良くないと思って、声をかけさせてもらったんだが」

彼らの目にみる敵意の色が浮かぶ。

「そんなのあんたにや関係ねえだろ」

「関係なくはないんだ。私はこれでも教師をやっている。日本の将来を担う君らが、もし何らかの犯罪に遭遇して、取り返しのつかないことになってしまったら、私は教師として申し訳が立たんのだよ。教職に就いたからには私にもそれなりの義務はあると思ってるんだ。一度きりしかない人生を、そんなことでフイにしたいくはないんじゃないのか」

端から聞けば、その少年たちが被害者の立場になったらと聞こえたかもしれない。しかしこの場合、彼らが加害者である可能性も有り得るとの意味も含んでいた。つまり「君らは被害者にも加害者にもなれる」と言いたかったのだ。

岡崎は諭しながら語りかけていた。しかし、その中には揺るぎない信念が感じられた。嫌々聞いていた少年たちにも、少しは気持ちいが伝わったかに見える。絶妙のタイミングで内藤が畳みかけた。

「名前と学校、家の電話番号を訊いておこつか。このまま大人しく帰るんだつたら、今日のところは大目に見よう。もし言うことを聞

いてくれないなら、学校なり家になり連絡せざるを得ないが。どうするかね？」

少年たちは渋々といった感じで次々に名前と学校名を伝える。それを大倉と飯田が手分けして書き留めていった。岡崎の勘は当たっていた。彼らは全員高校一年であった。

「みんなそのタバコを寄せ。箱ごとだ。よし、それじゃ早く帰れよ」

メモが終わるのをきっかけに内藤がそう言うと、先程の元気はどこへやら、彼らは持っていたタバコを渡し、聞き取れないくらい小さな声でぶつぶつ言いながら歩いて行った。時々こちらを振り返っては不満そうな顔を顕わにしている。やがてその姿も人混みの中に消えていった。

「まずは楽勝つてとこですかね。あれでもなかなか聞き分けのいいもんですよ」

「毎回この調子で済むとは限らないですから」

「いつもこんな感じなら苦労はしないんですけどね」

それから表通りから裏通り、ゲームセンターや若者の立ち寄りそうな箇所をいくつか回った。何人かの未成年を指導したが、さしたる問題もなく、指導係の仕事は順調に進んでいった。時刻はもう午前十二時を過ぎている。

「私、こういう場所にたむろしてる子供つてもっと喧嘩腰で、苦労するものだと思っていました」

そう言ったのは、教師としてのキャリアは慧と同じだが、年齢は二歳下の飯田佳奈であった。なかなかの美人で、一見クールな印象を受ける。それなのに熱血先生を地で行く教育熱心な一面もあり、担当教科である古典もわかりやすいと評判だ。当然のごとく生徒にも教師にも人気があった。

「今日はまだましな方だよ。ナイフちらつかせられたりするのに比べたらね」

内藤が言った。

「えっ、そんなことがあつたんですか？」

「向こうは単なる脅しのつもりだろうが。でもナイフ見せられたこつちはちよつとゾツとするな」

「それはそうですね。命の危険に晒されてるっていうのに」

「まあ実際に使う程、度胸のある奴なんかいないさ」

「今はわからないですよ。平気で人を刺したり、傷つけたりする子供も増えてるじゃないですか。私何だか恐くなって来ちゃった」

話を聞いていた竹山が、急に割って入った。

「大丈夫ですよ。今日は男もたくさん一緒だし。もしヤバそうになったら内藤先生が助けくれますって」

竹山は締めりのない薄ら笑いを浮かべながら「ねえ、内藤先生」とビールを一杯引つ掛けてきたサラリーマンさながら、気安く話しかけている。

「竹山先生！」

突然、大倉が静かに叫んだ。街中なのでなるべく声を潜めているが、その剣幕は凄まじかった。

「私たちは遊びに来ているんじゃないありません！ 指導係がそんなだつたら、少年たちに対して威厳を保てないでしょう。もう少し自覚を持って貰わないと困ります！」

大倉の怒りももつともである。本来取り締まる立場である指導員が、少年と同じような振る舞いをしていたのでは全くお話にならない。

「すみません」注意を受けた竹山はともかく、話の発端となった飯田と内藤もしよげ返っていた。

その雰囲気を見るに見兼ねたのか、岡崎がたしなめながら大倉に切り出した。

「さて。最後に三手に分かれて見回って、今夜はお終いにしますか」  
これまでは、最後に三人がそれぞれ単独で巡回を行い、仕事を終えていた。しかし、一人になってしまったがために、集団リンチを受けたという事件が起こってしまった。

そこで、普段なら一人で見回るのを、二人のペアに増やすことになった。一人増えただけでも大きな違いだ。巡回経験者と未経験者が一緒になった方が良いとの考えで、内藤と飯田、竹山と大倉、そして岡崎と慧の組み合わせが出来た。竹山は先程きつく注意を受けた大倉と一緒にあってとても不満そうだ。何だかそわそわして落ち着かない様子が判る。逆に内藤は、若く美しい飯田とペアになれてご満悦だった。

三組は落ち合う時間と場所を決め、それぞれの方向に別れた。内藤たちは駅方面に向かった。大倉は竹山を従え、彼女の思う方へと歩き出す。岡崎は「我々は街の外れまで」と告げて進み始めた。途中までは大倉たちと同じ方向に向かい、更に向こうへ行く予定だった。

繁華街も外れまで来るとやはり人の数も激減する。逆にその人気のなさをいいことに悪事を働く輩もいるようだが、幸い今夜は何事もなかった。

「異常なし、と」

岡崎は誰ともなしに呟くと、満足気に頷いた。腕時計を見やり

「ここまででもう三十分過ぎましたね。そろそろ戻りますか」

慧と岡崎は足を止めると振り返り、今来た道を引き返した。もうすぐ巡回も終わりで。余裕が出たらしく、彼は慧に話し掛けてきた。

「どうですか？ なかなか地道で大変でしょう」

「ええ。私だったら先生みたいに上手く説得できるかどうか」

「はは。出る前にも言った通り、堅くならないことです。それから焦らずにゆっくりと。これは私くらい長く教師をやっているとわかってくるものですがね」

いつもに比べて饒舌だ。たいして問題が起こらなくてホッとしているのだ。彼はなおも続ける。

「道を踏み外しかけた少年にどう接するかで、教育に携わる者としての手腕が試されますからな。いかに彼らの心を開けるか？ これは教師にとって永遠のテーマですよ」



得意げに力説する。だが後半の方は、芝居がかった大げさな口調であった。

「岡崎先生ならもうその点に関しては、手に取るようにわかるんじゃないですか？」

慧は思い切った質問をぶつけてみる。

「まさか。そんなことはないですよ。もう長いこと教師をやってますがね、子供の頭の中はてんで解らないもんです」

「そうですね。でも意外ですね」正直に感想を言う。

「やはり子供は一人一人が違うだけに、考え方も千差万別ですよ。この子はどう行動するとか、あの子はこう考えているとか、三十年以上の経験で分析したとしても、絶対に思った通りにはなりません。必ずどこかで食い違いが出て来ます。だから我々は、子供の心を開かせる努力を怠ってはならないんです」

岡崎がそんな考えを持っているとは意外だった。いつも生徒には厳しく指導し、恐れられている彼だが、そういった信念があるからこそ、自分の方針を貫き通せることが出来るのかもしれないと慧は思った。

再びあの喧騒が近づく。慧は胸の動悸が徐々に早くなったが、もう少しの我慢だ。気分を紛らわそうと、話を継いだ。

「私は若者が……若者だけじゃなく全ての人間が何を考えているのか解りません。きつと心の中では……」

その時だった。

「先生！ 先生！」

誰かが慧たちの前方から走ってきた。大倉だ。片手に携帯電話、もう一方は腰の辺りを押さえながら一目散にこちらを目指している。岡崎たちを見付けて心底安心したらしかった。顔を見ると左目の周りに大きな痣が出来ているのがわかった。

「どうしたんですか！」

「大変なんです！ 竹山先生が……」

岡崎たちと別れてからずっと、大倉と竹山は一言も口を利かないまま人混みの中を歩いていった。大倉はまだ先程のことに腹を立てているように見える。とはいっても彼女は常に不機嫌な顔をしているので、そのあたりは定かではない。

(それにしても大倉先生もあれくらいのことでも目くじら立てなくてもいいのに。あんなだから嫁の貰い手もないんだな)竹山は心の中で悪態をついた。しかし大倉もつんけんしているとはいえ一応は女性である。威厳や腕力にかけては男に敵わないはずだ。こちらで名誉挽回して鼻を明かしてやろう、竹山は俄然意気込んだ。少々動機は不純だが、彼はその日一番の熱心さで、未成年の指導に当たろうとしていた。

賑わう表通りを歩きながら、あちこちに目をやっていたのだが、立ち並ぶビルとビルの間を通り過ぎる瞬間、奥の方から「パン」という音が聞こえた。痾癩玉を破裂させたような軽い音だった。雑踏に紛れて他の誰も気付いていない。

竹山は不審に思い、単身でその通りへ一歩踏み出した。大倉はそれに気付かず、どンドン先を歩いている。

普段だと真っ暗なはずだが、月明かりのおかげで歩くのに苦はなかった。奥へ進んで行くと、女性の声で何かを言っているのが聞こえてきた。まだ若いものだと感じ取れた。声のする方へ更に進み、見渡せる場所まで来た。見付からないようにこっそりと覗く。

それは異様な光景だった。

少女らしき二つの人影がある。顔はよくわからないが、まだ若いことには違いない。一人はジーンズのブルゾンを羽織り、スカートから素足が剥き出しになっている。肉付きもよく、見るからに健康そうだ。その後ろに匿われるようにもう一人、頭ひとつ小さな陰がある。こちらは黒っぽいワンピースに身を包んだ、幼げな少女だった。

それだけならば、特筆すべきことではない。注意を引いた理由は、二人の周りを数人の男が取り囲んでいたからだ。よく見るとこちらもまだ若い。少年のようだ。数えてみると四人いた。これを見る限りでは、少女たちが悪い輩に絡まれているに違いない。しかし双方ともピクリとも動こうとしなかった。言い得て妙だ。まるでビデオの一時停止ボタンを押したようだった。

よく見ると前方に立っている少女は、何かを握り両腕を前に伸ばしていた。竹山は目を凝らしてそれが何か見極めようとした。その形がわかったとき彼は「まさか」と思った。ピストルだった。

しかしそれは到底本物とは思えない稚拙な造りだった。女の子の小さい掌にもすっぽり隠れるくらいのサイズで、銃身は一点の曇りもない白だ。誰もが玩具だと思うだろう。しかし少年たちはピストルを目の前に、身が竦んでいるように見えた。もしかすると彼らは遊びでふざけているだけなのかもしれない。

先程聞いた音はあのピストルかと思ったが、まさかあんなおもちゃがそんな音を出せるはずがないと決め込み、頭の中でその考えを却下した。

竹山は少し様子を見ることにした。

ピストルを構えた少女が口を開いた。

「次は殺すわよ。コレの扱いは得意なんだから」

あまり大きな声ではなかったのだが、その場にいた全員に轟く迫力があつた。彼女は本気だと誰もが信じて疑わなかった。

カチリ。少女はゆっくりと撃鉄を起こした。先頭に立つ少年に銃口を定めている。

「……何でそんなもの持ってんだよ」

少年の一人が恐る恐る訊ねたが、少女はそれを完全に無視し、

「わたしたちに関わるな」

とだけ言った。そして彼女は後ろに隠れるもう一人の少女に何かを囁いた。後ろの少女は一つ頷くと身を翻し、ときどき心配そうに

振り返りながら駆け出していった。少年たちの視線が彼女を追っている。

「動いたら死ぬよ」

ピストルの少女は静かに言った。そしてそのままの姿勢で、狙いを外さないように後ずさを始めた。彼女と少年たちとの間が徐々に大きく開いていく。

ある程度距離が出来る、彼女もくると反転し、闇の中に駆け出していった。途中でどこかの角を曲がったのだろう。跡形もなく消えた。

取り残された少年たちは身の危険が通り過ぎた瞬間、少女を追おうとしたが、それはもはや叶わなかった。すでに二人の姿はどこにもない。追いかけるにもどこに向かうべきかわからず、取り残された悔しさと苛立たしさに地団駄を踏んだ。

辺りには少年たちの他に、置き忘れられたゴミバケツがあるだけだ。

三つある大きな青のポリバケツは、辺りに異様な臭いを漂わせていた。どれも溢れるまで詰め込まれている。入りきらないゴミはその周囲に積み上げられていた。

「クソッ！」

手前の少年は手前にあつた一つを思い切り蹴った。中のゴミが周囲に散乱する。彼はなおもバケツを踏み躪る。やかましい音を立てて原型がなくなっていく。相当頭にきているようだ。

「竹山先生。何をしてるんですか」

竹山の後ろから大倉が駆けつけた。彼の姿がないことに気付き、しばらく探していたようだ。彼女は突然いなくなった彼を非難すべく口を開きかけた。しかし竹山は身振り手振りでそれを制する。このいけ好かない女を見返すチャンスだと思った。

彼は、今だとはかり意気込んでその場に躍り出た。

「お前ら！ 何やってるんだ！」

目一杯ドスを利かせて叫んだ。ゴミ箱を蹴っていた少年が声に振

り向いた。身を潜めていたときにはわからなかった彼らの容姿がはつきりと見て取れた。だぼだぼの服を着て、髪の毛を金色に染め、野球帽を斜めに被っている。この上なく虫の居所が悪そうな彼は、その様子を隠そうともせず「あ？」と敵意を剥き出しにしていた。「ちよつとこつちへ来い！」

竹山が更に凄んだ。言われるまでもなく少年たちは彼の方へだるそうに歩み寄って来る。

「何だテメエは」

先頭にいた野球帽の少年がポケットに両手を突っ込んだまま竹山の目の前までやってきた。少年は竹山の頭から爪先までの間を、高速で何往復も睨み回していた。まるで赤べこだ。他の少年たちもじりじりと竹山を取り囲み始めた。

大倉も状況を呑み込み、後から続いて出てきた。厳しい眼差しで少年たちをかわるがわる見比べている。

仲間の一人が『指導係』の腕章に気付いた。こちらも似た服を着て、ニット帽を目深に被っている。

「ヒロキ。こいつら巡回してる先公だぞ」

「ああ？ こいつらか。この辺見回ってるクソ野郎は」ヒロキと呼ばれた少年の顔は更に険しくなっていた。

「おい！ おめえらが余計なことしてっから、お陰でタクオがパクられたんだぞ」

タクオというのは恐らく、N高の教師をランチした一人だろう。そして竹山の目の前にいるのはその仲間たちらしい。ヒロキという帽子斜め被りの少年が、リーダー格のようだ。

「何だその言い方は！ お前ら高校生か。こんな所で何をやっている！ 学校はどこだ！」

彼らの無礼さに腹を立て、竹山は大声でどやしつけた。

「うるせえよこの野郎」「なんだこのデブ」「テメエ殺すぞ」「やんのかコラ」

四人の少年が、在り来たりの脅し文句を口々に、彼に詰め寄って

きた。

「あなたたち！ どの学校なの。名前を言いなさい！」

大倉が我も負けじと声を張り上げる。

「ババアはすっこんでろ！」

オレンジの襟足を長く伸ばした一人がすかさず怒鳴る。彼女の剣幕にも動じていない。

「そんなことを言っただけ許されると思っただけなの？ 学校に連絡するわよ！」

「してみるよ。そんな時やオメェン家突き止めて火い点けてやんぞ」

「まあ！ 何て子供なの！」

大倉は顔を真っ赤にして怒っている。何より『ババア』と言われたことが、怒りを増長させた一番の原因だろう。彼女くらいの歳の女性は、その一言に非常に敏感だ。

少年たちは、つい今しがたの出来事が痕を引いているようだった。小娘にコケにされ、拳げ句の果てには逃げられる。彼らにとっては拭い難い屈辱だろう。彼ら全員が頭にきており、不満の吐け口を求めているかのように始めから喧嘩腰で接してきた。

売り言葉に買い言葉が続いているうち、次第に緊張感が高まっていく。一触即発であった。双方の睨み合いが続く。竹山もむやみに手をあげることには出来なかった。

緊迫した空気を打ち破ったのは竹山の一言だった。細い目を見開き、俺に任せると言わんばかりに言い放った。

「お前ら逮捕された奴と知り合いか。やっぱクズの仲間もクズばかりだな！ クズ共が偉そうに！ 大人をナメるな！」

普段弱い生徒たちを压制している彼は、子供なんぞ自分が本気をいせれば、簡単に畏縮させられるものと錯覚に陥っていた。全くの錯覚だった。学校の生徒は竹山を畏れているのではない、抵抗すれば、内申点等にも影響するから嫌々ながら従っているだけなのだ。教え

子ではなく、内申も何も関係ない少年たちにとっては、竹山の威嚇など全く通じるわけがなかった。逆に怒りを煽っただけだ。

「んだとオ！」

ガツッ！

言葉と同時にヒロキの拳が竹山の顔に入った。不意の出来事に竹山は身動きがとれない。鼻の奥からジーンと痛みが湧き出る。思わず顔を押しさえた。間髪入れず、蹴りが脂肪だらけの腹に飛んでくる。

ドスッ。

「ぐっ……」

竹山は我慢出来ず膝を付いた。胃の中の酸っぱい液体が喉元まで込み上げてくる。ここで吐いてはならないと思い、ぐっとそれを飲み込んだ。

最悪の状況に発展してしまった。

大倉は真っ赤な顔から一転、顔面蒼白になっていた。身に起こった予想外の出来事に戸惑い、啞然と立ち竦んでいる。

竹山は喘ぎながら言った。

「お前ら……こんなこ……」

しかし言葉は途中で打ち切られた。膝立ちになっている彼の顔面に、もう一発パンチが炸裂したのだ。鼻骨の折れる音がわかった。そこから生暖かい血が蛇口から出る水のように溢れ、真黄色のジャンパーにほとばしる。竹山は慌てて鼻を両手で覆った。涙が無意識に流れ出してきた。眼鏡はどこかへ飛んでいってしまった。今度は首の後ろから蹴りが入った。延髄だ。目の前がくらくらとして堪らず地面にうずくまる。

「コイツやっちまおうぜ！」

ヒロキの冷酷な声が竹山の頭上に浴びせられた。彼らは理性のコ

ントロールがうまく出来ないのだ。一度キレてしまえば簡単に止められるはずがなかった。

亀の格好をした竹山に次々と暴行が加えられる。三人が蹴りを繰り出し、その丸い体を踏みつけていた。丸坊主で、もみあげからあごまで髭が繋がっている一人が、ゴミ捨て場のスチール製の立て札を取り、背中をめつた打ちにしていた。少年たちは暴徒と化した。

「やめなさい、あなたたち！ やめなさい！」

気を取り戻した大倉が必死で一人にしがみつき、その馬鹿げた行為を止めさせようとした。しかし骨と皮ばかりの中年女性がいたところどころでどうにか出来る相手ではなかった。

「るっせんだよ、ババア！」

ニット帽の少年が振り向きざまに顔を殴りつけた。痩せ細った大倉は文字通り吹っ飛ばされた。固いアスファルトに尻餅をつき、そのまま身動きがとれなくなっていた。

竹山に対するリンチは止まろうとしない。寧ろエスカレーターしている。誰かの放ったトーキックが脇腹に命中した。彼は堪らず吐いた。口と鼻を押さえた指の隙間から苦味と酸味のある胃液が流れ出す。中身をぶちまけた胃袋は、その名残でまだヒクヒクと痙攣していた。

「このデブ吐いてんぞ」

「うわっ。きつたねえ」

笑い声が辺りに響く。それでも少年たちは攻撃の手を休めなかった。

「や……、やめて……」

情けなく口を突いて出た言葉はか細く、誰の耳にも届かない。服の襟首を捕まれ強引に体を引き起こされる。

「重いな、コイツ。手貸してくれよ」

竹山は二人がかりで仰向けにされた。彼の眼鏡は何度も踏みつけられてアスファルトにめり込みそうなほどだった。周りにはポリバケツから散らかされたゴミが散乱している。



「誰がクズだつて？ クズはテメエだろ。こんなゴミだらけの中でよ」

ヒロキが中腰になって竹山の顔を覗き込みながら言い、もう一度顔を殴った、血飛沫が飛んだ。歯も何本か折れていた。口の中は切り傷と嘔吐物の残骸で滅茶苦茶だった。もはや人間サンドバツク状態だ。長時間に渡って繰り返し返される暴行に、やがて痛みは感じなくなり、次第に気が遠のいていく。

（いい加減にやめてくれ……。俺が何をした？ 少し注意しただけじゃないか。それなのに何故こんな非道いことを……。そういえば大倉先生は……。逃げたのか。畜生、あの年増女め。自分だけ逃げやがって……）

そんな状況に於いても他人への文句は忘れない。いつしか彼は、重たい泥の中にいる気分になっていた。体の感覚が麻痺し、五感全てが遮られそうだった。

このままでは竹山は殺されかねない。大倉は顔をしかめながらゆっくり立ち上がり、腰を押さえながら表通りに向かって駆け出す。幸いなことに少年たちは竹山へのリンチに余念がないようだ。誰も大倉に気付く様子はない。服のポケットを探り携帯電話を確認した。何とか無事だ。早く警察に通報して助けを求めなければ。彼女は必死で表の通りまで出てきた。辺りにはたくさんの方がいたが、誰もが無関心で、大倉のことなど見て見ぬ振りをしている。下手に首を突っ込んで、とばっちりを受けたくないのだろう。全くあてにはならなかった。携帯電話で一一〇番をダイヤルする。しかし手が震えてなかなかうまくボタンが押せない。殴られた頬が痛む。自分を落ち着かせるべく、顔を上げて深呼吸を試みた。その時、遠くで見覚えのある姿が目に入った。岡崎と浅戸だ。ああ！ 良かった。彼女は大声で叫ぶ。

「先生！ 先生！」

痛む腰を押さえ、形振り構わず駆け出していた。

4

慧と岡崎の元まで辿り着いた大倉はそのまま崩れ落ちそうになった。慧が思わず手を貸す。

「どうしたんですか！」岡崎が驚いて訊ねる。

「竹山先生が、注意した少年たちに囲まれて……その、私も殴られて、もうぐったりしてて、とにかくあのままだと殺されます！」

慌てて状況を説明しようとしているが、言葉がちぐはぐに並べられただけである。しかし、竹山が危険な状態にあるらしいというのはわかった。岡崎は大倉の両肩を掴み、大きく揺さぶった。

「落ち着いて。どこです！」

「あ……向こうです。路地裏にいます」携帯電話を持つ手で、震えながら指差した。

まだ訊き終わらないうちに、岡崎は駆け出していた。振り向きざまに慧に叫ぶ。

「浅戸先生、一一〇番！それから大倉先生を頼みます」

慧は返事する間もなく、気が緩んで倒れかかる大倉を抱き留めた。岡崎は五十メートルほど全力疾走すると、竹山がいると思われる路地に曲がっていった。大倉はがたがたと震えている。大丈夫かと言っても曖昧な返事をするだけだった。

「相手は何人なんですか」強く訊いたが応答はない。ダメだ、かなり参っている。その慌てぶりからかなりの惨劇が予想された。言葉で説得出来るのかと慧は思った。人数はわからないが、いくら貫禄がある岡崎とて、数人の興奮した若者相手に太刀打ちするには無理がある。

慧はすばやく大倉の手から携帯を奪い取ると、一一〇にダイヤルした。呼び出し音が鳴る間、周りを見渡し、番地表示を探す。あった。手前のビルの一角に緑色のプレートが貼られている。相手が出るなり、喧嘩が起こっていること、そしてその場所を告げた。

電話を切ると再び大倉に持たせる。

「先生、一人でも大丈夫ですか？ ちょっと見に行つて来るので待つていてください……大倉先生！ わかりましたか」

焦点の合っていないなかつた目が慧と重なり、大倉はかすかに頷いた。伝わつたかどうか自信はないが、とにかく信じるしかないようだ。

座つた彼女をゆっくりと壁にもたせ掛ける。自由になつた慧は、岡崎が消えた場所を目指した。

路地に入り奥に進んで行くと、地面に何かが散らばっているのが見えた。ゴミが散乱しているのだ。そちらに向かつて駆け出す。ジャンプしてゴミをかわし、人の気配がする方へ走つた。

路地裏でも一際広くなつた場所に出てきた。数人が一人を取り囲んでいるのがわかる。岡崎が野球帽を斜めに被つた少年に胸ぐらを捕まれていた。その周りにはニット帽少年に襟足少年、丸刈り少年がいる。地面には、ゴミに埋もれ真つ赤に染まつた竹山が横たわつていた。トレードマークの黄色のジャンパーは赤や黒の汚れが目立ち、何ヶ所か破けているようだ。

岡崎の通つた声が辺りに響く。

「お前は何をしているかわかっているのか！」

岡崎はその状況に全く怯むこともなく、あくまでも話し合いで解決させるつもりだ。

「うるせえよ。オメーもやられてえのか」野球帽斜め被りがさらに凄んでいる。

「やつてやろうぜ。ヒロキ」丸坊主の少年が野球帽に向かつてそう言った。

「こんなことをしても何にもならんぞ！ 自分の人生棒に振るつもりか！」

岡崎は自分の身よりまだ少年たちを案じているようだ。

「そんなの知るかよ。人生がどうか言ってるけど、俺らはまだ未成年なんだ。もし人を殺したつて必死コイて反省してるフリすりゃ、簡単に許してもらえんだよ。今のうちに暴れたいだけ暴れとかなき

「やなあ」

ヒロキと呼ばれた少年が片頬でにやけながら言った。他の少年たちも笑っている。狂った笑いだった。彼らは成人にならない限り、こんなことを繰り返すつもりなのか。つまらないごまかしで自分を正当化して。救いようがない連中だ。

それに劣らず腹に据えかねるのが、我関せずと平然としていられるこの人間たちだ。大倉を匿い、ここに来るまでの間、誰も見向きもしなかった。自分とは関係ない者が死のうが知ったことではないのか？ そんなお前たちこそ、死ねばいいんだ。

人の真意を垣間見た気がした。やはり慧の最も嫌う悪意そのものだった。

虫唾が走った。

「甘えるな」

地の底から搾り出すような声が口を突いて出た。その場にいた全員が一瞬凍りついた。少年たちをはじめ、あの岡崎さえも圧倒していた。岡崎は「なぜここにいいのか」と言いたげな目を慧に向けてきた。

「お前たちは甘えているだけだ。親に学校に世間に、それから自身に。無駄な人生を過ごして、甘えることしか覚えなかった欠陥品ども。集団じゃないと大きな口も叩けないのか。一人じゃ何も出来ない腰抜けが、笑わせるな」

言うつもりはなかった。しかし今までにない激情が湧き上がり、何かに駆り立てられて、半ば独り言で呟いていたのだ。だが驚くほど冷静だった。

もちろん少年たちがそれを聞き逃すはずがなかった。ヒロキは気色ばみ、岡崎を力任せに突き放す。ニット帽が新たな標的となった慧に迫る。

「誰だ。おめえは」

ニット帽を被った少年が、眉間に皺を寄せて凄みながら慧に詰め寄る。しかし慧は答えない。

「テメー今何て言った。俺らが腰抜けだと？」

「そうだ。仲間が後ろにいてくれないと恐いんだろっ」

ニット帽の顔がみるみる強張った。

「オメエもぶつとばされてえのか！」

「腰抜けに出来るならな」

「やってやるよ！」

瞬間、慧の腹部に衝撃が走った。少年の拳が鳩尾に入ったのだ。しかし慧にとつては少し疼いただけだ。ほとんど効いていないに等しい。渾身のパンチを喰らわせてもビクともしない慧を見て、少年の目に動揺の色が目に見え浮かぶ。

「くそっ」

今度は顔にパンチが飛んできたが、慧は素早く体を反らしてかわした。勢い余った彼はたたらを踏んでいる。その隙だらけの右こめかみに慧は重い一発を叩き込んだ。

ミシミシミシ。

慧の左拳に心地よい痛みが走る。この感触は久しぶりだ。ニット帽はそのままの体勢でアスファルトに叩きつけられた。殴られたところを押さえながら、もがき苦しんでいる。激痛と恐怖に顔をしかめ、彼は慧を見上げた。慧は更に近付いていくが、ニット帽は座ったまま体を引きずり後ずさりしている。慧は大きく一步を踏み出し、サッカーボールを蹴るように、彼の側頭部を足の甲で思い切り捕らえた。弾みでトレードマークの帽子が宙を舞い、ゴミで一杯のポリバケツにホールインワンした。その一撃で気を失ったらしく、彼の体は猛スピードでクラッシュしたF1カーのごとく、派手に地面を転がっていった。ヒロキの足元まで辿り着き、俯せになってやっと止まった。白目を剥き、所々にどす黒い痣が浮かんだ顔は、いびつに歪んでいる。

変わり果てた仲間を見下ろす彼の表情は、憎しみに満ち溢れてい

た。坊主頭と襟足も容赦ない視線を向ける。

坊主頭は慧を見据えると、奇声を上げ襲いかかってきた。肩をむんずと掴み、がむしゃらに殴りつけてくる。しかしどれも威力はなく、場所外的外れだ。ダメージはほとんどない。慧は殴る手を強引に取り、ねじ上げた。坊主頭の口から苦痛の声が漏れる。構わず、腕を本来曲がらない方へ無理やり折り曲げてやった。乾いた音が響き、骨の碎ける振動が伝わる。しかしそれは彼自身の絶叫によって掻き消された。放してやると、坊主頭は片膝を付いて、ぶらんと垂れ下がった腕を押さえている。間接は逆に曲がり、折れて尖った骨が皮膚を突き破っていた。うめき声を発し、彼の戦意は完全に喪失していた。しかし、慧はさらにその顎に下から膝蹴りを命中させた。顔だけが天を仰ぐ格好となり、血液混じりの歯が真上に飛び出す。放射状に血を蒔き散らしながら、後ろに勢いよく倒れた。坊主頭はそのまま動く気配はない。

慧は残り二人の方に向き直る。

「て……てめえ、こんなことしてタダで済むと思ってるのか！」

ヒロキと襟足は、声を震わせながら凄む。だがそれは空威張りであることは明白だった。腰も引けている。ここで逃げ出せば、仲間内での面子が立たないといったところか。

「ついさっきまでお前たちがやっていたことだろう。今度はやられる立場になると、こつも怖じ気づくとは、都合がいいな。数がいたところで有利になるとでも思ったか。だが所詮お前たちのような存在がいくら群れたところで何の意味もない。ゼロはいくら足しても掛けてもゼロだ」

慧は静かに言ったが、その言葉には、彼らのような人間を全否定する重みがあった。

襟足はすっかり足がすくみ、今にも逃げ出しそうだ。しかしヒロキの方はより眼光を増し、右手を後ろに回すとごそごと動かし始めた。ズボンのポケットをまさぐっている。再び姿を現したその手には　　バタフライナイフが握られていた。

「ぶつ殺してやる」

ヒロキは目をギラギラと血走らせている。

しかし慧は落ち着いたものだった。ナイフを見て怖じ気付くどころか、より気分が高揚したと言ってもよい。この状況を楽しんでいた。

弱者がナイフを持ったからといって、それが何なのだ。『鬼に金棒』とはまるで違う。弱みを隠す為の武器が、さらに弱さを引き立てている。滑稽なものだと慧は思った。

ともかく、人の命を容易く奪えるものを軽々しくひけらかす人間は、死ぬほど後悔させてやるに限る。二度とそんなことが出来ないくらい徹底的に。

ヒロキは腰を落とし、身構えている。今にも襲いかかってきそうだ。慧はまるでナイフなど眼中になく、一歩一歩近付いて行った。

「近寄るな！ 本当にぶつ殺すぞ！」

やっぱり、と慧は思う。脅しに出してみたものの、それを使う度胸がない。内藤の言った通りだった。いや、その場合「度胸」とは言わないだろう。

慧とヒロキの距離が更に縮まる。

「わあああああつ！」

二人の距離があと二、三メートルくらいにまでなつたとき、腹を据えたのか、ヒロキはナイフを振りかぶり慧に切りかかった。しかしそれよりも素早く慧はヒロキの懐に入り、ナイフを振り上げた手を掴む。そのままがら空きになつた脇腹にボディブローを打ち込んだ。肋骨が折れた手応えがあつた。そして全く同じ場所に拳をもう一撃。ヒロキの体は力を失い、その忌まわしい凶器をこぼした。かちやり、人を殺す道具とはとても思えない。まるで玩具を落とした音だ。慧が掴んだ手を放しても、ヒロキは痛みを堪えているのか、依然中腰で固まっている。慧は後ろに一歩下がった。充分な間合いを取ると、足を思い切り振り上げる。足は縦にほぼ百八十度の角度、慧自身の顔に当たりそうなまでに開いた。ヒロキはその動きを目で

追っていた、慧が何をするつもりかもわからずに。慧の足は遙か頭上まで高々と伸び、一瞬ピタリと止まった。ヒロキは顔をしかめて見上げている。

ほんの一瞬だが、周りの全てが停止していた。次の瞬間、慧は息を一気に吐き出し、反動と併せてヒロキの顔に踵を振り落とした。無防備な彼の顔面に踵がめり込む。スポンジのように顔面がひしゃげた。まるで一つのオブジェのように、慧がしなやかに伸びた足と踵をヒロキの顔面に乗せたまま、一秒、また一秒と時が流れる。皺状になった顔の窪みに血が溜まり始めた。やっと踵をどけると、隆起している鼻が完全に窪んでしまっていた。前歯は全部折れ、目も中央に引つ張られたままで、二本の線となっている。もう彼の親ですら見分けがつかないかもしれない。ヒロキは立ったまま意識を失っていた。

慧は足元のナイフを拾い上げた。そして残りの一人に向かって投げつける。完全に自失した襟足は避ける素振りもしなかった。剥き出しの刃がくるくると回り肩に当たる。だが柄の部分が当たったので傷はどこにも出来ていない。彼にぶつかったナイフは飛ぶ方向を変え、気を失っているニット帽と呼ばれた少年の尻に、今度は見事突き刺さった。彼はビクリと体を跳ね上げる。しかし意識は戻らない。最初から狙っていたわけではないのだが、不幸とは重なるものだ。

遠くからパトカーのサイレンが聞こえてきた。

それがきつかけとなり、襟足は正気を取り戻すと、すかさず回れ右をして慌てて猛ダッシュで逃げていった。後ろも振り返らず、長い後ろ髪を振り乱して全力疾走していく。誰も彼を追いかけようとはしなかった。

岡崎は啞然とした表情で慧を見つめていた。そんな彼の視線も気付かず、慧は服を整えている。息は少しも乱れていない。

「浅戸先生……なぜこんなことを。あいつらの言った通り、タダじゃ済みませんよ」



無惨にも地面で横たわる三人を見ながら、岡崎は澀んだ声を漏らす。慧はかぶりを振った。表情はその場に似合わず清々しかった。

サイレンの音は最も大きくなったところで止まり、続けてドアを開閉する音が聞こえた。遅すぎる到着が苛立たしかった。

岡崎は何か決意を堅めたように言葉を発する。

「警察には私から話をします。浅戸先生は辻褃を合わせてください」  
慧は諦めた表情をしている。岡崎は更に「大丈夫、必ず上手くいきます。何も心配はいりません」と付け加えた。

二名の警察官が走り寄ってくる。警官はもう一人いたが、表でへたりこんでいる大倉を連れに行った。

「岡崎先生、一体どうしました！ 大丈夫ですか？」

岡崎と同年代くらいの警官が血相を変えて叫んだ。彼は岡崎と知り合いのようだった。指導係のリーダーも務め、少年課にもよく出入りしている岡崎は、警察にも顔が広く人望も厚い。巡回を行っていることも当然知られている。

「富沢さん、あなたでしたか。……いえね、少年同士が喧嘩をしていたんです。数は十人くらいだったか、とにかく大乱闘でした。竹山先生は勇敢にもそれを止めようとして、巻きこまれてしまったんです。パトカーが来たら皆逃げてしまいましたよ。動けない仲間を見捨てて」

と、倒れた少年たちを指す。「薄情な奴らです。それより早く救急車を呼んでください」それ以上訊かれまいとするかのごとく捲し立てた。

人格者として知られる彼が「白」と言えば、警察はたとえカラスでも白と信じるに違いない。それほど岡崎の信頼は絶対的なものだった。もちろん誰も疑う者はいなかった。

富沢と呼ばれたその巡査は、パトカー付近で大倉を介抱している警官に向かって「おい、救急車！」と叫び、もう一人には怪我人の様子を見に行かせた。

「それは災難でしたね。こいつらも馬鹿をやったもんだ」

少年たちに一瞥をくれ、吐き捨てた。富沢は慧の方に向かって「そちらも見回りの先生ですか？」と訊いてきたので「ええ。今夜が初めてなんです」とだけ答えた。彼は「ほう」と感心したが、それが何を意味するものだったのか定かでない。

簡単な事情聴取を受けていると、走る足音が乱雑に聞こえてきた。内藤と飯田だ。彼らが言うには、時間を過ぎても戻らない岡崎たちを待っている、パトカーのサイレンが聞こえてきた。嫌な予感がしたので来てみたら、こんなことになっていたそうだ。双方とも驚愕の表情を浮かべている。

岡崎は経緯を警察に言ったのと同じ内容で説明した。内藤は倒れた少年を睨みつけ、一方で若い飯田は泣き出している。彼女の体はショックでふるふる震えていた。慧は肩を叩いて慰めた。

そんな思いをさせているのは自分の所為だと、飯田の涙が慧の罪悪感を一層かき立てる。慧は無意識に彼女の頭を胸に優しく包みこんでいた。外の汚れた空気に侵されもせず、飯田の髪はフルーティな香りを放っていた。慧の胸に頭をもたれ、飯田の泣き声は少し激しくなった。

やがて救急車が二台到着し、野次馬を掻き分けながら救急隊員がやってきた。だらんとした少年たちを手際よく担架に乗せる。しかしさすがの救助のプロも、竹山の巨体には手を焼いたようだ。

次々と救急車に運ばれ、最後に坊主頭が残っていた。

「こりやひどいな。立ったまま気絶<sup>オチ</sup>ちやってるよ」

若い救急士が言った。こんな状態の怪我人は初めてなのだろう。

「顔も潰れてやがる。ハンマーか何かで殴ったのかな？ 餅つきみたいに」

もう一人も不思議そうに呟く。こちらもまだ経験が浅そうだ。

「バカ。それなら杵<sup>オチ</sup>だろ」

「最近のガキは無茶やるからなあ」

喋りながらもてきぱきとした行動で、現場はものの数分ですっかり片付いた。顔を殴られた大倉も、隊員に肩を貸してもらいながら

救急車に乗っていた。

「私が付き添います」

岡崎は救急士に言っていると、竹山のいる方に乗り込んだ。残った教師たちに早口で

「病院まで行ってきます。容態については明日にでも知らせますから。今日はここで解散にします。お疲れさまでした」

緊迫した表情は変わっていない。最後に慧と目が合った。岡崎は何かを言いたそうな眼差しだったが、そのまま何も言わず中からドアを閉めた。怪我人と岡崎を乗せた救急車はサイレンを鳴らし、穢れた場所から遠ざかっていく。

取り残された三人の指導係は、しばらく無言だった。警察はまだ現場検証をしている。手持ち無沙汰な彼らは静かにそれを見守るしかなかった。

「さてと」部下にあれこれ指示をしていた富沢巡査が、一息ついて切り出した。「今夜はもう帰ってもらって結構ですよ。岡崎先生に大体の話も訊きましたから」

「犯人は捕まるんですか？」

内藤が訊ねた。

「相手は大勢ですからね。今はまだ何とも言えません。竹山先生や少年たちにも事情を訊いて、然るべき処置をとることになります」

「そうですか。もし俺がいればこんなことにならずに済んだのに……」

体力に自信がある内藤にとっては当然の思いだろう。もし竹山の代わりにいたならば、もっと違った状況になったかもしれない。彼のやり場のない怒りが辺りに伝わる。気を紛らすためか、どこかで帰りのタクシーを拾ってくると言い、走っていった。

飯田は泣きやんだものの、まだ少し嗚咽を漏らしていた。目の部分の化粧がすっかり落ち、涙を拭いたハンカチは絞れるほどぐっしよりだった。慧は自分の綺麗なハンカチを飯田に差し出した。彼女は礼を言っ受ける。

慧は再び何気なく空を見上げた。相変わらず月が闇夜を照らしている。満月は人を凶暴にさせる魔力があるらしい。あの少年たちのように、……そして私のように。慧はそう思いながらじっと月を見ていた。

富沢がふと思い出したように話し掛けてきた。

「それから、浅戸先生……でしたよね。事件の目撃者として、もしかしたら後日、署の方に来て頂くかもしれませんが。よろしいですか」

「はい。大丈夫です」

慧はゆっくり顔を戻して答えた。

「岡崎先生だけでもいいんですけどね。彼一人より二人の記憶の方がより確かだし、調書も手っ取り早く作れますから。そのときはどうかご協力お願いします」

「私でお役に立てるならいつでもどうぞ」

もしも慧の行為が露見したなら、それはそれでいいと思っていた。有罪になるか無罪かはわからないが、懲戒免職はまず間違いなからう。しかし全く学校に未練はないし、見切りをつけるいい機会だと思った。何より、悪い奴に制裁を与えたという満足感があつた。しかし、出来損ないを二、三人再起不能にしたところで、世の中が変わると思えない。悪意の大きさはこんなものではない。

富沢は少し離れた飯田に目をやった。慧のハンカチを目元に当てながら、時折体を震わせている。彼は目を細めながらこう言った。

「彼女のような若い女性には、やはりこんな生々しい現場は耐えられないんでしょうな。その点、あなたは違う。取り乱すどころか、冷静に彼女を思いやり慰めている。強い精神と優しい心をお持ちなんですよ。岡崎先生が一目置いているのも解る気がします。今夜初めてお会いしたのに、こんなこと言うのは自分でも変だと思っんですがね。」

……あなたは立派な女性のようですな。しかも美人だ」

## 回想？

1

浅戸慧あさたけの母親、浅戸葉月あはづきは外資系大手貿易会社の女社長であり、その業界ではやり手として知られている。

元々は慧の父親が興した企業であったのだが、彼は慧が生まれる直前に不慮の事故で亡くなった。会社は当初小さなもので、社長の急逝によりその存続が危ぶまれたが、当時社員であり妻でもあった葉月がその運営を引き継ぐことになった。

慧の父親は、様々な国を行き来するビジネスマンだった。まだ小規模な会社であったため、社長の彼が自ら赴く場合が多かったのだ。何度目かの海外出張に出発する当日、彼は愛する妻に束の間の別れを告げ、その頬と大きくなったお腹に、軽くキスをした。

向こうでの仕事は順調に終わった。帰りの空港ロビーで彼は、妻に国際電話でこれから発つと伝えた。僅かな時間であったが、二人は電話で束の間の幸せを共有した。

しかし、帰りの飛行機は離陸した数時間後、計器の不良により操縦不能に陥った。機体は墜落、大破炎上し、彼は二度と帰らぬ人となったのだ。慧が生まれるほんの二日前だった。

予期せぬ夫の訃報を耳にした妻は、ショックと動揺で陣痛が始まった。予定日はまだ先である。救急病院に運ばれる頃にはもう破水しており、それから約十数時間に及ぶ分娩の末、未熟児ながら立派な女の子が誕生した。世の中の道理を見抜き、賢く生きて欲しいとの願いから、その女の子は「慧」と名付けられた。

慧は体重千五百グラムと、まだ未発育であったが命に別状はなく、しばらくの間は保育器で過ごした。母に初めて抱かれたのは生まれて二週間後である。

母の精神は、慧でもっているといっても過言ではなかった。夫の

仕事は波に乗り、自分はもうじき出産を控え、順風満帆な家庭だった。しかしその幸せは夫の死により脆くも崩れ去ったのだ。本来なら神経が衰弱し、生きる気力もなくしてしまうところだが、慧という子宝に恵まれた。それだけが彼女の唯一の支えだったのだ。慧の一挙手一投足に喜び、母は次第に以前の元氣を取り戻していった。夫を失った傷は深かったが、新たな生命がその痛手を和らげていたのだ。

葉月は亡き夫の遺志を継ぎ、慧を生んだ数ヶ月後に社長に就任した。単なる一社員に過ぎない彼女は、ビジネスのことはもちろん、会社経営についてもほぼ素人に近かったのだが、夫の会社をみすみす手放すわけにはいかなかったのだ。折しもその時代は男尊女卑の真っ只中であった。女社長というだけで軽視され、彼女は生半可ではない苦勞を強いられてきた。しかし日本を一步出ると、男女平等の精神を重んずる国が非常に多い。語学を得意とし、仕事柄海外に出入りする機会が多かった彼女は、世界を股にかけ次々と華々しい実績を作り上げた。その結果、会社は短期間で著しく成長を遂げ、今では日本屈指の企業と発展したのだ。

当然、将来は慧にその会社を全て任せようと心に決めていた。夫が亡くなった直後に生まれた娘を母は、彼の生まれ変わりだと信じて疑わなかった。しかし、そこで母の愛情はあらぬ方向へと進んでいく。女であるというだけで様々な苦痛を強いられ、過酷な仕打ちを受け続けてきた彼女は、我が子にそんな思いは絶対にさせまいと誓ったのだ。世の荒波に揉まれ、男社会にも充分通用出来るようにと、慧に女であることを極力禁じたのである。

慧は幼少の頃からスカートや女の子らしい服を着させてもらえなかった。髪の毛も長く伸ばすことは許されておらず、いつも男性専門の理髪店で散髪をしてもらっていた。彼女の髪は耳よりも長かったことがない。ときどき女言葉が出るのはそこまで厳しく注意を受けなかったが、あまりいい顔はされなかった。慧はおのずと言葉遣いもぶっきらぼうになっていた。

それからもう一つ。精神と肉体を鍛えるために、慧は空手を習っていた。元々体を動かしたり、格闘技など好きだった慧は、自己との闘いである空手は性に合っていた。途中で飽きたり嫌になったりもせず、熱心に練習を楽しんでいた。幼稚園の年少から始めたのが、めきめきと頭角を現し、小学二年に上がる頃には全国大会で準優勝も果たした。試合相手にはもちろん男の子もいた。そんな彼らを次々倒していく慧を見て、葉月はとても喜んだ。

空手だけでなく、学校の成績や運動会でも、男子に負けるのは言語道断だった。母は男に負けるのが一番嫌いだったのだ。

「男になんか負けちゃダメよ」、「あなたも早くお父さんみたいな人になりなさい」

それが母の口癖であった。男に負けるなというのは納得出来るとして、自分は女なのにお父さんのようになれとはどういう意味なのか、幼心に慧は思った。

小学校四年生のとき、クラスの男子四人と大喧嘩をした。いつも男の格好をした慧を男子たちがからかい、言い合いから喧嘩へと発展したのだ。普段から『男に負けるな』と言われ続けていた彼女は、椅子を振り回し教室を大暴れした。男子の内々の二名は軽傷で済んだが、一人には骨折、一人には額を五針も縫う大怪我を負わせてしまった。慧は担任にこっぴどく叱られた。母親も学校に呼び出され二人揃って咎めを受けた。家に帰った慧は、さらに母の長い説教が待っているとうんざりしていた。しかし母はあっさりと小言を済ませ、さらに「でも、よくやったわね」と一言付け加えたので慧は拍子抜けしたほどだ。

だが怪我をさせられた子の親がそのまま黙っているはずもない。頭を包帯でぐるぐる巻きにした我が子を脇に従え、玄関先で怒鳴り散らす父母に、慧の母はこう言った。

「それでは慧を殴るなり蹴るなり、同じ傷を付けるなりしてください。あの子は十歳ですが、自分の責任は自分で取れるように育てています。こんな所で喚いていないで、どうぞ直接慧の部屋をお訪ね

になったらどうです。そもそも子供同士の喧嘩に親がしゃしゃり出るのもナンセンスではありませんか」そして腰を屈め、男児と同じ目線になると「ねえ僕。女の子に負けて親に言いつけて、パパやママに仕返しさせてそれで満足？ 情けないわよ。もっと男らしくなりなさい」と言った。

男児は母親の陰に隠れてもじもじしている。父親が額から血管を浮き出して怒った。

「あんなそれでも親か！」

「親だからこそ我が子に厳しくありたいんです。私はあの子を愛しています。愛があるから厳しくできるではありませんか。お宅のお子さんだって慧をからかうようなマネをしたからそうなったのですよ。悪い行いをすればペナルティが与えられるのは当然です。その当たり前の社会の仕組みを、その子にちゃんと教えてらっしゃるのですか？ 怪我を負わせた罰なら、慧はもう充分受けたはずですよ。それを後から来て再びあの子に屈辱を与えるおつもりですか？ それで気が済むなら、慧にお会いになってください。二階の手前の部屋にいますから。ただし万が一あの子の身に何かあれば、私は全力であなた方と戦いますわ」

その迫力に圧倒され、男児と両親はすごすごと帰っていった。自分の部屋からその様子を聞いていた慧は、不安ながらも嬉しかった。彼女を一人の人間として見てくれていた母が誇らしく、格好よかった。お父さんのように、ではなくお母さんのようになりたいと思った。

その足で母は階段を登ってくると、慧の部屋をノックする。

「慧、心配しなくていいの。あなたはもう罪を償ったのだから。何も気兼ねする必要はないのよ。……そう、まだ不安がっているのね。今はお母さんが守ってあげられるわ。だけどいつまでも頼ってばかりじゃいけない。最後には自分だけが頼りになるのよ。強くなりなさい。お母さんよりもっと強く」

ドア越しに話しかける母の声は、呪文のように慧の心に染み入っ



た。

2

小学校を卒業し、中学に入学した慧には、密かに楽しみにしていたことがあった。中学校には規定の制服がある。女子はブレザーにスカートだ。

慧はその未知の衣装に憧れたものだ。友達にはスカートを何着も持っている子がいて、毎日違うものを着てきていた。

小学校の頃は私服で、学校でも家でも慧はずっとズボンを履いていた。だが中学生になれば、堂々とスカートを履ける。母もそれには仕方がないと、しぶしぶ承諾してくれた。

やがて入学式の日、慧は生まれて初めて身に着けるスカートに、嬉しいような恥ずかしいような気がした。母は慧の初めてのスカート姿に、特に何も言わなかった。しかしそんなことにもお構いなしに、慧の心は浮かれ放しだった。外を歩いていても足が何だかスルスルして落ち着かない。あまりの風通しのよさに、何も履いていないと思うくらいだった。

また、中学生ぐらいになると、思春期を迎えた女子はお洒落に目覚め始める。可愛い洋服を着たり、髪を長く伸ばしたり、教師の目を盗んで上手でない化粧をしたり、見た目に気を遣うようになってくる。誰もが大人への階段を急いで駆け登りたくなる時期だろう。慧ももちろん例外ではない。いくら昔から男のように育てられたとはいえ、心はれつきとした女の子である。

「浅戸さんも髪の毛を伸ばしたらいいのに。絶対綺麗になるよ」と、新しく出来た友達に言われたが、母に許してもらえないなんて言えない。

実際、慧は中学生に見られぬ程整った顔立ちをしていた。やや面長で、シャープな顎のラインをしている。髪を短くしていたので、さしずめ中性的な美少年といったところだ。

「私にはこれが合ってるから」と心にもない返事をして、いつもその場をやり過ごしていた。

スカートを履く野望は達成したが、新たな夢が次から次へと慧の胸に飛来した。思春期という、子供を多感にさせる魔法が彼女を刺激する。小学生の頃には、考えもしなかった夢を起こさせた。

中学へ上がったから、もう一つ変化が起こった。その年頃の女性の身体は、将来子供を産む為の準備を始める。大人の女性の体になるのだ。一年生の秋に、慧に初潮が来た。

友達は何が起きたことを母親に伝え、これから長い長い付き合いになる儀式の手ほどきを受けたりしたようだ。それを教えるのは、女の子を持つ母親の、一つの役目なのである。赤飯を炊いてもらった者もいた。どうして赤飯なのか慧にはわからなかった。その友達は「お祝い」だと言っていたが、なぜ祝ってもらえるのか不思議だった。『女の体になったから喜ばしい』という定義は、頭の中のどの引き出しにもなかった。

慧のそれまでの経験から、葉月に初潮のことを言っても喜ばれないだろうし、何の得にもならないとわかっている。寧ろ嫌がられるかもしれない。時々、女であることを毛嫌いするのだから。慧の月経の知識は、友達や保健の先生、本の情報から得たものだ。母親から女としての心得を教えてもらい、喜びを分かち合えるのが楽しく思う。

普通の家庭に生まれた子が羨ましかった。周りの女子たちは、だんだん大人っぽくなっていき、異性と付き合う者も何人かいた。お喋りの中に、男の話が頻繁に出てくるようになり、慧は取り残された気分だった。母はスカートを妥協してくれたけれども、お洒落をすることにいては断固として首を縦に振らない。

（このままずっと恋も結婚も出来ず、何の楽しみもない一生を送れと言っの？）

繊細な慧の心は深く落ち込んでいた。先が全く見えなかった。しかしその約三年後、慧の願いはあっけなく叶うことになる。

中学一年の終わり頃から、ある男性が家によく訪ねてくるようになった。小宮という男だった。歳は四十後半で。その歳にしては黒々とした髪が大方残っている。柔和な顔付きで、いかにも紳士といった感じだ。

小宮は葉月の恋人だった。仕事は輸入車を専門に扱うディーラーで、いくつかの店舗を掛け持ちで経営する敏腕さである。その収入は葉月をも上回るほどだった。彼女が新しく外車を購入する際に知り合ったらしい。小宮を初めて紹介されたとき、母は「お友達」と言っていたが、それだけの関係ではないと慧は勘づいていた。小宮が家に来る日は、母は綺麗にめかし込んで、いそいそと部屋の掃除を始める。慧が少しでも散らかさうものなら、大声で怒鳴られる始末であった。

案の定彼は週に二、三度訪れては、母と二人で出掛けて行ったり、また家で一緒に食事をしたりした。慧は男性と食卓を囲むのは初めてだった。普通の家族なら当たり前の光景だが、彼女にとっては全く未知の世界だったのだ。当初、緊張してろくに口もきけなかったが、幾度か食事をするうちに次第に打ち解け、仲良くなっていった。彼はとても気さくで、豊富な知識から出てくる話も面白い。小宮も慧を我が子のように可愛がった。彼には離婚歴があり、前妻が引き取った二人の男の子がいるらしい。それで男のような慧とも話が合ったのだ。彼女に息子の姿を重ねていたのかもしれない。慧は大勢で食事というものがこんなにも楽しかったのかと感動を覚えた。もちろん本当の家族ではないが、真似事をしている時間が一番の幸せであった。小宮が来るとき、母は腕によりをかけて豪華な料理を作っていた。美味しい料理を食べられること、小宮に会えることの両方の気持ちによって、彼女の気分はスーパーボールのごとく弾んだものだった。

そして慧が中学を卒業し、高校に進学してすぐ、母と小宮は結婚した。慧の高校受験が終わってから、結婚の準備を進めると決めていたらしい。いずれそうなるだろうと予想していたことではあった。

しかし、いざ本当に家族となつてしまうと、何となく改まつてしまふ。小宮は住んでいたマンションを売却し、慧と葉月の暮らす家に越してきた。引越した手伝いをしているときでも、新しい生活への期待と不安が入り交じつた複雑な気分だった。彼にたくさん会いたいとは思っていたけど、一緒の家で暮らせるとなると勝手も違つてくる。結婚とはそういうものなのだ。

これまで何の気兼ねなく接してきたのだが、「小宮さん」から「お父さん」と呼び名を変えるのはためらわれた。母も小宮も「今まで通りでいいよ」と言ってくれるが、本当は「お父さん」と呼んで欲しいに違いない。だが慧が呼び名を変えることはなかった。慧にとつての父とは、十五年前に飛行機事故で死んだ彼一人なのだ。母から「お父さんのような人になれ」と言われ続け、父を人生の目標として生きてきた慧は、父をもはや偶像化している。それほど崇高な存在なのだ。それを昨日今日知り合つたばかりの小宮が、容易く取つて代わるなど出来るはずがない。

それまでの生活で違つたことと言えばそれだけだ。あとは万事順調だった。父と認めることは出来ないが、小宮のことは好きであつたし、仲良くもしてきた。博学な彼に勉強を教えてもらつたりもした。昔、塾講師のアルバイトをしていたらしく、教え方も上手で慧にもよく理解出来た。本人の努力もあり、学力はみるみる上がり、慧は学年でもトップクラスの好成績を収めるまでになった。

相変わらず男のような慧だったが、その美貌には更に磨きがかかり、モデルとしても通用するほどになった。耳を出した短い髪型が、より端正な顔を強調させている。同級生たちは、彼女の女らしからぬ格好と仕草を心底残念がつていた。女性らしくなりたいと夢を持ち続けていた慧だが、それもあまり深く考えないようになった。諦めたわけではないが、思うだけでも仕方がないと悟つていたので。

高校一年の秋が終わる頃、更なる転機が訪れる。母が妊娠したのだ。

それを告げられたとき、別段驚きはしなかった。熟年同士とはい

え、新婚夫婦には違いない。子供が出来ることもいつかは有り得るだろうと思っていた。『いつか』がその時だっただけの話だ。幼い頃には弟か妹が欲しいという気持ちはあった。いつも一人で遊ぶことが多かった慧には、兄弟や姉妹が仲良く駆け回り、お飯事などをしてる姿は、全く別世界の光景に見えた。十六歳になって、そんな思いはもう微塵もなかったが、自分もお姉さんになるのだと考えると、やはり嬉しくもあった。

葉月は妻であり母であり、会社の社長である。その多忙さは目を回す程だ。慧と小宮は協力して、彼女の負担が少しでも軽くなるように務めた。ただでさえ自分の限界を度外視しがちな彼女なのだが、そんな性格を知り尽くしている二人が、出来るだけ無理をさせないようにしていた。慧は家事全般を殆ど一人でこなし、小宮は社長不在の間の経営方針について、いろいろとアドバイスしたりした。そのお陰もあつてか、定期検診でも母子共に異常は見当たらず、葉月にとっては快適なマタニティライフであった。

慧が二年に進級した頃、母は何事もなく臨月を迎えた。予定日目で順調に進んでいる。葉月は生まれる直前まで働きたいと主張したが、小宮は断固反対した。慧もそれに賛成だった。仕事柄どこにいるかわからない状態で、いつ陣痛が始まるかと思うと、気が気ではない。彼は半ば強引に妻を産婦人科に入れさせた。会社の経営も丁度安定している。葉月が数日空けたところで、さしたる問題はない。忙しい彼女にとって、病院で出産を控えるのは名案だ。

慧は口やかましい母がいなくなつて、少しホツとした。しばらく思い切り羽を伸ばせる、短い間だけでも母のいない日々を満喫しようと思った。小宮も彼女の付き添いで殆ど家にはいない。母が入院したら試してみようと、かねてから計画していたことがあった。

以前、友達と街へ遊びに行ったとき、初めて口紅を買った。その色とデザインにいたく惹かれたのだ。口紅の色はピンクに近い赤で、少しオレンジがかつている。引くとそこだけラメを散りばめたようにきらきらする。ケースは薄いラベンダー色で、うねるようなコー

ルドのラインがアクセントになっている。やや丸みを帯びているのにクールなデザインだ。いつもなら友達の付き添いだけするのだが、そのときはあまりに心が打たれ、つい買ってしまっていた。

「慧。なかなかいい趣味してんじゃん。この際だから全部揃えちゃえば？ あんた綺麗な顔しているんだし勿体ないよ」

お洒落で知られる親友が褒めてくれた。高梨飛鳥たかなしあすかといつて、慧とは小学校からの付き合いである。幼い頃は二人とも男っぽく、何かと気が合った。だが慧と違って彼女は非常にまかせていた。実際より幾分か大人びて見える。化粧もいち早く覚えた。慧に生理のことをいろいろ教えたのも彼女である。

化粧品を揃えたい気持ちはあったが、使う機会はまずないだろう。「口紅だけでいい」と断ると、何を思ったか飛鳥は自分の使いかけの化粧品を慧に譲ったのだ。ファンデーション、アイシャドウ、マスカラ、チークなど、どこに出してもおかしくない立派な一式だった。慧の家の事情を知っている彼女は「バレないようにしなよ」と付け加えた。

計画というのは化粧なのだ。無論、母がいる間は到底出来ない。自分の部屋でこっそり試すことも出来たのだが、それだと空しくなるに違いない。どうせ化粧するなら、やはりそのままの姿で外に出てみたかった。

その次の土曜日、小宮は昼前から病院に出掛けていった。学校から帰って、家には慧一人きりだ。この絶好の好機を逃す手はない。慧は急いで自分の部屋に戻ると、下着を入れる引き出しの奥に隠してあった化粧ポーチを取り出した。いよいよこのときが来た。上手く出来るかな、私に似合うかしら、など様々な思いが押し寄せる。

ポーチのジッパーを開けると、あの女性的な耽美な香りがした。元の持ち主だった飛鳥は、化粧の仕方慧に教えてくれていた。やはりたくさん持っているだけに、その技術も確かなのだ。まずは下地となるファンデーションを手取る。

しかし、そこで家の電話が鳴り響いた。

(何でこんなときに……)

慧は心の中で舌打ちした。出鼻を挫かれ、気を削いだ慧は、面倒臭そうに一階へ下りていった。クリームを手に出したばかりなのだ。ティッシュでそれを拭き取ると、受話器を上げ、不機嫌に言った。

「もしもし」

「慧ちゃんか。陣痛が始まった。もうすぐ産まれそうだ」

小宮だった。声がうわずっているのが電話でも判る。

「えっ。来週じゃなかったの？」

出産予定日まではあと三、四日あった。しかし小宮が到着して間もなく陣痛が始まり、すぐ分娩室に運ばれたらしいのだ。

「わかった。今からそっち行く」

慧は一旦電話を切り、再び受話器を上げてタクシーを呼んだ。慧の家まで恐らく五分位で到着するだろう。洗面所へ行き、念入りに手を洗う。しかし水を弾くファンデーションはなかなか洗い流せない。何度も石鹸を付けて洗い、ようやく匂いが手から消えると急いで部屋に戻った。

途中で投げしてきた化粧品を、再び引き出しに乱暴にしまい、出掛ける身支度を始めた。どうもタイミングが悪い。だがもし化粧が終わって電話がかかってきていたら、もっとやっつかいなことになっていたはずである。そのときは顔全体を洗わなければならないのだ。不幸中の幸いと諦めるしかなかった。

出掛ける準備は整った。あとは迎えが来るのを待つだけだ。

表に出てすぐ、白の個人タクシーが角をこちらに曲がるのが見えた。ハザードランプを点灯させてゆっくりと停車し、自動ドアが開く。慧は乗り込み病院名を告げた。

車に揺られているうち、段々と気分が高まってくる。あと数分後、数時間後には姉になるのだ。男の子か女の子か。どちらにせよしっかりしなければならぬ。当然生活もこれまでとは変わり、自由な時間が制限されるだろう。

国道から少し脇道に入り、病院に到着した。葉月の入院している

所は、大病院ではなく産婦人科の専門病院だ。規模は小さいが立派な設備が整っている。

慧は受付で母の名前を伝えると、まだ若い看護婦に分娩室の手前まで案内された。小宮は中にいるようだ。室内の様子はわからない。しかし何か慌ただしい様子なのは感じ取れた。時折、誰かが大声で言っているのが耳に入る。医師があれこれ指示しているのだ。仕方なく備え付けのソファに座った。

夫の立ち会いは愛情があればこそ出来るものだ。お産の苦勞を乗り越え、希望が生まれる瞬間を共有出来れば、感動もひとしお大きいに違いない。子供は産まれたと同時に両親と出会える。もちろん赤ん坊は覚えていないだろうが、幸せなものだ。立ち会いを希望する夫婦が多いのも頷ける。

慧は生まれて二週間母親に会えなかった、父親については産まれて一度も会えないのだ。慧は少し羨ましく思った。だが仕方ない。立ち会いされなかったからといって、それが愛情の多少に関係あるなどとは思えなかった。

どれくらい時間が経っただろうか。もう外は薄暗くなっている。看護婦が分娩室を出入りするとき、体を傾け中を覗こうとしたが、大勢の白衣に阻まれよく見えなかった。

さらに時間は過ぎる。診察時間が終わり、外来の患者も全くなかった。いるのは三人の看護婦と、ソファで待っている慧のみだった。看護婦は昼間にいた人と違う。夜勤組と交替したのだ。午後三時のティータイムには、慧もコーヒーとお菓子をもらった。飲み残された褐色の液体がカップの底で冷え切っている。いい加減待ちくたびれてしまった。こんなことなら、急いで来ることなかったと思いつつ、それでも根気よく待ち続ける。

午後九時をも回り、少しうとうとし始めた頃、分娩室から勢いよく赤ん坊の産声が聞こえてきた。同時に歓声とまばらな拍手も聞こえてきた。やっと産まれたかと思って安心していた慧だが、誰も分娩室から出てくる気配がない。普通ならばここで、医者なり看護婦



が出てくるはずだが。

戸惑いながらそのまま待っていると、数十分後再びざわめきと歓声が届いた。その後初めて医者らしき男が分娩室から出てくる。

慧の姿を確認し「娘さんですか」と訪ねた。男か女かの判別が難しかったのだろう。慧が無言で一つ頷くと、

「おめでとうございます。難産でしたが、元気な双子の男の子ですよ」

と笑みを浮かべて言った。

そうか、双子だったのか。それで一人目が産まれた後も、すぐには出てこられなかったのだ。それにしても双子だったとは。驚きながらも、やはり二倍の嬉しさがあった。

「ありがとうございます」

慧は深々と頭を下げた。

双子の姉となった慧は感無量だった。新たな家族が増えるのだ。

それも二人。早く二人の弟に会いたいと思った。

しかしその日は、母にも赤ん坊にも会うことは出来なかった。翌週、慧はガラス越しに初めて二人の弟を見た。生まれたばかりなので他の子たちとあまり見分けはつかなかったが、よく見れば目元が葉月に似ていたような気がした。

その後、数回の定期検診でも異常はなんら見受けられず、葉月と赤ん坊たちは数日後に揃って退院した。双子の子供は、兄は祥吾、弟は佑馬と名付けられた。彼らにとって生まれて初めての帰宅だ。

慧はその日、朝から落ち着かなかった。学校へ行ってもおぼつかなかったし、そわそわして何も手につかずにいた。授業など完全に上の空で、もう午前中には到着したであろう新たな家族のことを考えていた。家の中はちゃんと掃除したかとか、今頃何をしているのだろうか、考え始めたらキリがなかった。

授業が全て終わると一目散に家路についた。自転車を漕ぐ足にも力が入り、途中で危うく人にぶつかりそうになったりもしたが、なんとか無事に帰宅出来た。

息を切らしながら玄関のドアを開ける。母の靴があった。予定通り帰っているのだ。靴を脱ぎ散らかし、足早に大広間へと向かう。しかしそこで思い直し、玄関に戻ってたった今脱いだ靴をきちんと揃えた。弟たちの手本となるため、もうこれまでと同じ振る舞いは慎まなければならぬ。気を取り直してゆっくりと歩いていく。

大広間へ続く扉を開けると、大きなソファで母と小宮が一人ずつ赤ん坊を抱いていた。

赤ん坊の目はパツチリ開いている。大きな目はやはり母親似だ。

口元は小宮に似ている。鼻はどちらだろうか。髪の毛はまだ薄い。少し茶がかっている。二人とも愛らしい顔をしていた。

「ただいま」

声を掛けると、四人の目が一齐に慧に集まった。双子にとって初めての姉との対面だ。彼らにはどう映ったであろう。つぶらな瞳が慧を見つめる。

「祥ちゃん、佑ちゃん。お姉ちゃんですよ」

葉月が聞き慣れない優しい口調で話し掛けた。彼女が抱いている方が弟の佑馬だ。白い服の胸に赤いYの字のワッペンが縫い付けてある。そして小宮が抱いているのが兄の祥吾だ。こちらは淡いブルーの服に黄色でSと縫い付けてある。慧は母に近付き、産まれて間もない弟にゆっくりと手を伸ばしてみる。恐がりもせず、佑馬の小さな手が慧の小指を掴んだ。子猫の肉球のように柔らかく、暖かかった。この手にも、自分と同じ血が半分流れているのだと思うと感動した。とても愛おしく思えてくる。もっとその温もりを感じたい気分を駆られた。

「抱いてもいい?」

慧が訪ねると

「落とさないように気を付けてよ」

と、母は小さな体を慧に預けた。兄の祥吾は小宮の腕の中でその様子をじっと見守っている。

赤ん坊を抱くのはもちろん初めてだった。慧にも母性本能はある。

ただそれが日の目を見ることは全くなかったのだ。子供の扱いは苦手極まりない。そんな自分なんか抱いていいのかという気持ちもありません。嬉しさと、落としてはしないかという不安で胸は高鳴っていた。少し乳臭いのと、服から漂う洗剤の匂いが心地よかった。そのときの感動は一生忘れられないだろう。

右の手でしっかりと下半身を支え、左手で背中を優しく抱いた。弟は慧の胸にかぶさる格好になっている。だがしばらくすると、何故か赤ん坊はぐずり始めた。何かいけなかったのかわからない。泣き声はどんどん大きくなっていく。慧は慌てて、すぐるように葉月を見た。彼女は立ち上がり、慧から我が子を受け取る。

「あらあら。どうしたの、佑ちゃん？ ほらもう泣かないの。ママと一緒にだからね。お姉ちゃんはまだ慣れなかったのかな？ こんなことで泣いていたら将来立派な人になれませんよ」

相変わらずだ。自分も産まれたときからそう言われ続けていたのだろう。慧は思った。

3

母は退院してしばらく静養していたが、どうにも会社が気になるらしく、医者をしぶしぶ納得させて仕事に復帰した。小宮はもう少し休むよう勧めたが、彼女はそれを聞き入れなかった。仕方なく、小宮はあまり無理しないようにとだけ念を押した。

彼女はそれまでと同じくらいの仕事をこなした。しかし、子育てにも手を抜くことは全くなかった。それどころか息子たちへの時間を重視している。葉月にとっての仕事は、これまでは前夫が遺した会社を守るためだった。しかし祥吾と佑馬が生まれてからは、彼らに会社を託すべく尽力した。

その頃から、慧はあまり自分に関心が持たれていないと感じていた。それまでは何をすることも口やかましく、身だしなみや服装はさることながら、自分の在り方までをも母親に諭され続けていたのだ。

それがどうだろう、このときは双子の弟たちに愛情の全てを注ぎ込んでいたようだった。慧のことなど忘れてしまったかのように見受けられる。

変化が起こったのは葉月だけではなかった。慧はその頃から少しずつ女らしくなっていた。一度に二人の弟に恵まれ、姉として、女としての本能が直感的に働いたのかも知れない。髪の毛も耳が隠れる程伸びていたし、以前と違い男に間違われることは殆どなくなった。ところが葉月は慧を咎めようとしなかったのだ。

そもそも慧を男同然に育てたのは、将来会社を継がせるためだった。なぜ男でなければならなかったのか？ それは葉月が会社を譲り受けたばかりの頃、女だという理由だけで軽く見られ、あらゆる辛酸を嘗め尽くした。夫を亡くした時点で、もう女は捨てたつもりでいた彼女には、それが何より耐え難かった。最愛の夫が創った会社を潰すわけにはいかず、ただひたすら我慢するしかなかったのだ。それをバネに一心不乱に働いた彼女は、世間に認められ、会社も大成功を収めた。出来れば息子がいて、葉月の跡を継いで欲しいと思っていたのだが、夫との間に生まれたのは慧という娘ただ一人だ。いずれ彼女に会社を任せるだろう。だが自分と同じ思いはさせたくない。性別が変えられないのならば、男性と言っても通用する女性に育てようと決意した。差別を苦にしない強い精神を女の慧に持たせるしかなかったのだ。もし男の子が生まれていれば何も問題はなかった。而して慧は幼い頃から男同然に育てられたのだ。

夫は早くに事故で死に、もう葉月に出産は望めなかった。しかし、思いもよらず葉月は二人の男児を授かる。子供は生涯慧一人だけだと思っていたのが、そうではなかったのだ。葉月にとっては待望の男の子が誕生した。しかも二人。彼らが成人するまでかなりの間があるが、時間は惜しまなかった。それまで現役を続けられる自信があったのだろう。まだ葉月は女盛りだ。愛情が慧から彼らに移りかわるのも当然かもしれない。双子の父親はもちろん別人である。だが葉月の血を受け継いでいるのは間違いない。会社は彼女のもので、

自ら大きくのし上げた。もしあのまま夫が会社を続けていたら、ここまで大きくなったかどうかわからない。子供が出来るとすれば、葉月の血だけで充分だったのだ。

慧は忘れ去られた人形のようなだった。しかし、そのことで弟たちを恨んだり嫉んだりなどしなかった。寧ろ感謝したくらいだ。これで母の束縛からも解放される、そう思ったのだ。

慧の色気は日に日に増してきた。しかし母はそれを黙認しているようだった。

ある日、慧は思いきって母に尋ねた。

「お母さん。私、髪の毛伸ばしたいんだけど……」  
すると葉月から意外な返答が返ってきた。

「あなたもう伸ばしているじゃないの」

「髪の毛だけじゃなくて。もっと女っぽくしたいなって。私も十六だし。周りの友達だってみんなお洒落してる」

もう何度もお願ひしたことだが、それまではいつも無下に断られていた。しかし今の母なら聞き入れてくれるかもしれないと慧は直感した。そしてその勘は当たっていた。

「そうね。今まではお母さんの都合で、慧には辛い思いもさせたかもしれないわ。私もこの歳になって、まさか子供が出来るなんて思わなかったから。あなたにいろいろ強いてきたこと、許してちょうだい」

そう語る母の口調は、穏やかではあったが、どこか冷めたものがあった。心待ちにした男児が生まれたので、今度はそちらにはかり気が回っていたのだ。

さらに数ヶ月が経ち、祥吾と佑馬はみるみる成長していった。赤ん坊の発育は早い、慧もそれと同じくらい著しく生まれ変わった。髪の毛は肩に掛かるストレートヘア、顔と眉を整え、化粧も覚えた。以前に買った口紅も愛用品となっている。予想通りの綺麗な色だ。初めてひいたとき、その変わりように戸惑い、鏡すらまともに見られなかった。唇を舐めると、花びらを食べたような香りが口の中に

広がる。何とも言えない恍惚感だった。友達は皆「綺麗な色ね」とか「とても似合ってるじゃない」と慧を口々に褒め称えた。

慧の女らしさは完全に開花し、それまで彼女を見向きもしなかった男子生徒や、教師さえもが気に留めるようになった。

慧の見た目は立派な女性だが、幼い頃より培われた性格はそう簡単に変わるものではない。相変わらず、男のような仕事と口調だった。しかしそれが外見とのギャップで、より魅力的な雰囲気醸し出していた。

葉月は入院と出産のブランクを感じさせることもなく、以前と変わらずバリバリ働いている。彼女は忙しいながらその合間を縫って、出来るだけ子供たちの面倒をみた。小宮についても多忙さは妻とほとんど変わらない。だが彼も仕事を第一に考えず、我が子との時間を過ごすようにした。子供のためを思っただけでなく頼らないようにしていたが、やはり二人とも仕事を持つ身なので、面倒の見切れないときはベビーシッターをつけた。慧も授業が終わると脇目もふらず帰宅し、進んで弟たちの世話をした。しかしずっと付きつきりとはいかない。

慧が学校から帰るまで、井川さんというベビーシッターに双子の世話を頼んでいた。彼女は長いキャリアを持っているだけあって、さすがに子供を扱うのが上手だった。また、よく気が利く人だったので、子供の面倒以外にも、家事や買い物など何でもこなした。そんな彼女を慧の家族全員が気に入っていた。

慧と井川さんはとても親しくなった。およそ三十ほど歳の離れた二人であったが、気が合う友達のような感じだった。もし知らない人から見れば、仲のいい親子だ。慧は以前、楽しく会話している母娘ときどき見掛けたが、自分には縁のないものだと思っていた。よく考えると、それまで母と他愛のない話をしたり、笑い合ったりした覚えがない。葉月はいつもピリピリしていた印象しかなかったのだ。初潮が訪れたときもそうだったが、慧は何でも話し合える母娘の間柄に憧れていた。それをこんな形で経験するとは思ってもいなかった。

ただ。慧にとって井川さんは、母親と経験出来なかったことを取り戻せるほどの存在だった。

家に帰ると、井川さんは大抵いる。

「おかえり、慧ちゃん」

そう言われたことはほとんどなかった。無理もない、母娘二人きりの生活で、その母も仕事でいつも遅くなっていたからだ。井川さんが笑顔で迎えてくれることが慧には新鮮で嬉しかった。そしてしばらくの間、お茶を飲みながらいろいろな話を楽しむのが日課になっていた。

「えっ。慧ちゃんってこんなだったの？ 今と全然違うじゃない」

昔のアルバムを見せたとき、彼女は言った。井川さんは、祥吾と佑馬が生まれてからの慧しか知らない。

「そう？ たぶん髪型が変わっただけよ」

「ううん、髪型だけじゃなくって、全身が違うのよ。何て言うか、色気が滲み出てる感じ。まあそれも当然か。もうすぐ十七だもんね」  
彼女は大きく口を開けて笑った。当然、慧が男のように育てられたことも知らないのだ。そのことを教えると、驚いていた。

「まあ、奥さんも残酷なことをしたもんだ。女には女なりの人生があるだろうに。それを男に無理やり仕立てようとしてどうなるもんかね。せつかく可愛く生まれたのに勿体ないよ」

やはり彼女は思った通りの人だ。慧の気持ちを代弁するように捲し立てる。

「だから昔の写真は全部男の格好してたんだ。それにたまに言葉遣いが男っぽいから、違和感あったのよ。まるで『ベルばら』じゃないの。知ってる？ オスカルとか」

「名前くらいはね。どんなのは知らないけど。あんまりテレビ見てなかったし」

『ベルサイユのばら』通称『ベルばら』とは、十八世紀フランスを舞台に、数奇な運命に翻弄される女性たちを中心に繰り広げられる壮大な物語だ。主人公オスカルは、由緒正しき家柄の末娘として

生まれたが、將軍でもある父は一家の将来を案じ、彼女を跡取りとすべく男として育て上げたのだ。オスカルという男性の名前を付け、遊び相手も男を選び、将来軍人にさせようというほどの徹底ぶりであった。

原作は同名の少女漫画であり、宝塚でも有名だが、一九七〇年後半に放送されたアニメも人気だった。当時まだ二十代後半だった井川さんは、テレビアニメを好んでよく見ていたそうだ。『ベルばら』について、熱心な口調で詳しく話してくれた。

慧はオスカルほど過酷な運命を強いられていた訳でもなかったが、やはりどこか相通ずるものを感じた。共感した部分もあり、考え方もよく似ている。だがもし、自分がオスカルの立場ならば、あれほど立派に成長出来ただろうか。自己嫌悪になり、いじめて毎日を送っていたのではないか。どちらにしても、やはり強くなければならないと思っただ。葉月の言う「強くなりなさい」という言葉が頭にフラッシュバックする。

(私は強くなかない……)

必死に心の中で抵抗する。だが、双子の弟のお陰で慧はもう自由だ。そう思うとフツと気持ち軽くなった。女として再出発した彼女は、これからの人生を楽しく過ごそうと心に決めていた。

4

季節は移り変わってゆき、双子の弟たちもすくすくと育っていた。頭は真つ黒な髪の毛が覆いつくし、頬はリンゴのように真つ赤だ。まるまると肥えていて、見ているだけで思わず笑みがこぼれる。二人とも慧によくなつた。毎日顔を合わせている姉の慧でさえ、見分けをつけるのは難しかった。顔も体型も髪型も同じ。服は違つ色のものを着せているので、それでかろうじて判別出来る。もう一つ見分け方があった。笑ったときにえくぼが出る方が弟の佑馬、出ない方が兄の祥吾である。慧は分け隔てることなく二人を可愛がっ



た。片方に「たかいたかい」をすると、もう一人にも必ずした。おもちゃの車にも代わる替わる乗せてあげた。外に遊びに連れていくのも一緒だった。二人用のベビーカーに並んで乗せ、押して近所を散歩する。公園へ行つて日向ぼっこをしていると、まるで慧自身が母親になつた気分になる。

高校二年も終わりに近付き、大学受験による勉強が忙しくなつてくると、あまり弟たちに構つていられなくなつた。その分、井川さんが彼らの面倒を見てくれていた。

「慧ちゃんは大変な時期なんだから、この子たちは私に任せといてよ」

彼女がそう言つてくれるので、ありがたく言葉に甘えることにした。井川さんは、自分を含め四人分の夕飯を毎日仕度すると、慧や弟たちと一緒に食べてから自宅に帰つた。彼女も昔、受験生を抱えていた母親で、『頭にいいメニュー』なるものを慧のためにたくさん作つてくれた。慧にはとてもありがたかつた。感謝してもし足りないくらいだ。この人のために頑張らなければ、と思つてしまふ。意欲を駆り立てるには、「勉強しろ」とうるさく言うよりも最適な方法に違いない。

以前は家に戻つたら、双子が寝るまで遊んであげていたのだが、受験生ともなるとそうはいかない。面倒を見るのはせいぜい一時間程度であつた。

慧の高校は進学校だった。周りの友達は、ついこの間まで遊び呆けていたのが考えられないくらい勉強に打ち込んでいる。漫画と週刊誌が愛読書だった者も、参考書を穴が空くほど読んでいた。慧も例外ではなく、勉強に勤しんでいた。食事と風呂の時間以外はいつも机に向かい、床に就くのも午前二時や三時は当たり前だった。

春休みに入つてしばらく過ぎたその日も、彼女は弟たちと留守番をしていた。外は快晴で、中に閉じ籠もっているには惜しい天気だ。その日の気温は四月下旬のものであつた。慧が家にいる日は、井川さんは休みになっている。二人の赤ん坊の面倒も一人で見なければ

ならないので、あまり勉強は渉らない。双子が眠っていればいいのだが、どうやらそんな気配はない。仕方なく、シャープペンシルを持つ手を休め、少し休憩することにした。

リビングへ降りると、彼らは暖かいカーペットの上で、奔放に積み木で遊んでいた。色とりどりの丸や三角のピースが散らばり、白の絨毯によく映えている。

「いいねえ。お前たちは気楽で」

慧は膝をついて座ると、二人を両手に抱きすくめた。奇声ともつかない歓声で、慧の袖を掴む。顔に触れる手は、紅葉の葉のように小さくとても愛らしい。ぷくぷくと血色のよい笑顔を見ると、勉強での疲れも吹っ飛ばす。

壁に掛けてある時計をちらり見た。午後二時十五分を指している。(今日はこのまま気分転換するのもいいかな)

どうせ勉強に集中出来ないのなら、彼らとたくさん遊んであげようと思った。

「天気もいいし、散歩に行くか」

弟たちと外に出るのは久しぶりだ。慧にとってもリフレッシュになるだろう。彼女はそう思い立って、すぐに身仕度を整えた。部屋着から外出用の服に着替え、後ろで一つにまとめた髪をほどく。彼女の髪はもう背中まで届くほどだった。二人乗りのベビーカーを玄関に用意し、順番に抱きかかえて乗せた。

「ほうら、乗った乗った。外に連れて行ってあげるからね」

人肌に暖めたミルクを、哺乳瓶いっぱいに入れ二人に持たせる。

ガラガラにおしゃぶり、鼻を押したらブーと鳴る豚のおもちやを一緒に入れてやる。

ドアを開けると暖かい陽射しが飛び込んできた。空は見事に晴れあがっている。とても三月とは思えない。慧は二人赤ん坊の乗ったベビーカーを軽々持ち上げ、道路までの段差を降りていった。

彼女の自宅は高級な住宅街の一角にある。車通りも滅多にない。時折見掛ける車は、専ら高級車だった。周りの住民も、社長や重役

などのお偉方ばかりだ。歩いていると、どこからともなくピアノやバイオリンの音が聞こえてくる。日曜日のその時間はとても優雅に流れていた。

慧はベビーカーを押しながら、緩やかな坂を下っていく。眩しさで目を細めた。目がまだ外に慣れていないせいかチカチカする。外はまだ肌寒いかと思われたが、もう少し薄着でもよかつたくらいだ。歩いていると、慧は初老の婦人と擦れ違った。日傘を差し、紫のサングラスをかけた人の好きそうな婦人だった。彼女はベビーカーの中に視線を向け、軽く微笑んだ。

「こんにちは」

婦人は会釈をしながら、ゆったりとした口調で言った。慧も挨拶を返す。

「双子さんですか。おいくつ?」

彼女はベビーカーの中を覗き込んで訊ねた。

「一歳と少しになります。家にいてもやんちゃばかりするから、外に連れてきたんですよ」

慧が応えると、婦人は声をたてて笑った。

「元気なのがなによりですよ。可愛い盛りね。うちの娘にもやっつ子供が生まれますの。初孫なのよ。私も六十を超えてるのに」

「とても六十過ぎには見えません。とてもお元気そうだし。お酒落なおばあちゃんが出て、きつとお孫さんも喜びますよ」

お世辞と取ったのかわからないが、婦人はまんざらでもない様子で礼を言った。

「それはありがとう。孫が生まれるのが楽しみになってきたわ。この子たちも、こんな若くて綺麗なお母さんがいて、さぞかし嬉しいことでしょうね」

慧は面食らった。まさか母親と思われるとは。しかし悪い気はしなかった。昔のように男と間違われるよりは数段マシだ。女として見られている証拠ではないか。自分は姉だと言うと、婦人は驚いて頭を下げた。

「まあ、ごめんなさいね。だって貴女、そんなに綺麗で大人っぽいんだもの。お母さんと間違えてしまうわ。それじゃかなり歳の離れた弟さんたちなのね」

それから二言三言話をして二人は別れ、お互いの方向に歩き出した。

(私がお母さんか。いつになることだろう)

慧は先程の余韻がまだ残っていた。弟たちくらいの子供が自分にも、珍しいかもしれないがおかしくはない。若い母親だ、くらいにしか思われないだろう。

ずっと歩いていると住宅街を抜け、車の音がかすかに聞こえ始めた。足を進めるにつれてその音はどんどん大きくなる。

目的地の児童公園は、県道を挟んだところにあつた。割と広く、一般的な公園と比べても綺麗な方だ。植木も丁寧に刈り込んでいるし、遊具は最近色を塗り直したらしく、新品の輝きであつた。芝生は一面グリーンでゴミ一つ見当たらない。所々でレジャーシートを敷いているのが目に付いた。

敷地内に入ると、穏やかな草木の香りが漂う。懐かしい匂いだつた。中には慧と同じく、赤子を連れた女性が何組かいた。幼稚園くらいの子供たちも砂場で遊んだり、そこら辺を駆け回ったりしている。

彼女も小さい頃はそこでよく遊んだ。小学校以来、ほとんど足を踏み入れなくなつてしまつた。弟たちが生まれて再び足を踏み入れるようになったのだが、前と比べて狭く感じる。よく登つたジャングルジムも、こんなに低かつたのかと驚いた。

彼女は中でもブランコが好きで、毎日乗っていた。どこまで強く高く漕げるか、挑戦することが楽しみだつたのだ。地面と水平になるほど、高く上がったブランコに乗る慧を、葉月は危ないと心配していたものだ。

懐かしそうに見回しながら、手頃なベンチに座つた。丸太を縦半分に分けて、切り口を上に向けて寝かせた造りだ。ベンチに座つて

上を見上げると、木材を格子状に組んだ平べったいポーチが設けられている。たくさんの蔦が絡まって、日除けの役目をしていた。だが完全には遮断出来ず、至る所から光が漏れている。

弟たちは大人しくしている。慧は哺乳瓶を取り出し、二人にそれぞれくわえさせた。美味しそうに飲んでいる。彼女は薄笑みを浮かべながら眺めていた。

目を上げると、いろいろな光景が見える。サッカーボールを追いかける子供たちは生き生きとして、見ている方も楽しくなりそうだ。また傍らには、野球のグラブをして、ボールを投げ合う親子もいた。父は時折、キャッチする仕草を何度も繰り返している。子供に球の取り方を教えているのだろう。ブランコには二人の女の子が乗っていた。さすがに昔の慧ほど高くまで上がっていないが、スカートが捲れるのもお構いなしに漕ぎ続けていた。少し離れた芝生には、ピニールシートを敷いて、まだ幼い子供とその母親がジュースを飲んでいた。子供の方は小さな自動車とスポーツカーの玩具でしきりに遊んでいる。母はそれを微笑ましそうに見守っていた。

のどかだ。

広場で遊ぶ子供たちの喚声が、心地よい響きをもたらす。毎日遅くまで机に向かっている慧は、日頃の疲れから眠くなってきた。急に睡魔が訪れ、慧は座ったままうつらうつらと船を漕ぎ出した。しばらくすると彼女は寢息をたて、浅い眠りに入ってしまった。

夢を見ていた。

慧はベビーカーを押しながら、広い芝生を走っている。ジェットコースターのようにくねくねと走らせたり、急カーブを切ったりしている。中には祥吾と佑馬が乗っていた。二人は嬉しそうにはしゃいでいる。慧も大声で笑いながら、疲れることなく駆け回っている。彼女はこの瞬間が永遠に続けばいいと思っていた。弟たちも歳をとらずに、ずっと赤子のままでいればいいのにと。

不意に足がもつれた。彼女は勢い余って派手に転んだ。プールに

飛び込んだように、芝生の上に突っ伏していた。ベビーカーは手から放れ、そのまま走り続ける。慧は俯せになったままそれを見つめる。ベビーカーは止まろうとしない。それどころか、どんどん加速がついて、彼女から遠ざかっていく。慧は叫ぶ。しかし声にならない。息が漏れる音が聞こえるだけだ。立ち上がるうにも、体が重くて出来なかった。地面に吸い付けられているようだ。ベビーカーは遙か遠くまで行ってしまった。彼女は為す術もなく、その様子を見ていた。必死に叫ぶが、やはり声は出なかった。土の味が口の中に広がっていく。何も出来ない彼女は、自分を歯痒く思っていた。そのとき遠くで

ドオオオン。

けたたましい音が轟いた。

慧はハッと目が覚めた。心臓が激しく鼓動している。今のは夢かと胸を撫で下ろす。

(さっきのも夢の中の音?) 彼女は顔を上げた。

視界の隅から何か大きな物体が飛び出した。慧の姿が飲み込まれそうなほど大きかった。

それは大型トラックだった。

慧の長い髪が風に逆立つ。トラックは彼女の鼻先すれすれを通り、隣に置いてあったベビーカーをまともに撥ね飛ばした。ベビーカーは水平に弾き飛ばされ、芝生を所々えぐりながら転がっていく。やっと止まったがいびつに歪んでしまっていた。さらにその上にトラックの前輪がのし掛かる。軋んだ不快な音が響き、ベビーカーはぐしゃりと潰れた。前輪が離れると次に重量のある後輪が巻き付く。金属を擦り合わせる音が響き渡り、ベビーカーは無惨に引き裂かれた。トラックが過ぎ去ったときにはもうスクラップ状態であった。

トラックはようやくベビーカーを解放したが、まだ蛇行運転を続けている。サッカーをしていた子供たちや、キャッチボールの親子

の方へ向かう。彼らは必死に逃げ惑っていた。楽しい喚声から一転、恐怖の叫びに変わった。芝生に座っていた母親は子供を抱き上げ、遠く離れた場所に避難している。

トラックは公園の端まで行くと、スピードを落とそうとせずUターンしようとした。急ハンドルを切ったため片輪が浮き上る。そこが花壇に乗り上げ、タイヤはさらに高く上がる。バランスを崩し、大きな音を立ててトラックは横転した。それでもまだエンジンは吹かされ、タイヤは土煙を上げながら回り続けていた。

慧は一瞬の出来事に、何があったのかすぐには理解できず、体はただ固まっていた。ベビーカーは原型を失い、あちこちから骨組みが突き出ていた。

慧が夢で聞いた大きな音は、出入口の防護柱をトラックがなぎ倒したものだのだ。

(どうしてこんなところにトラックが……?)

彼女はまだにわかには信じ切れず、これも夢の続きなのかと疑いさえ抱いていた。

(佑馬、祥吾……)

絶望の淵に立たされ、慧はただ安心してた。ふらつく足取りでベビーカーに近付く。

しかしそのとき、慧の横の方から赤子の泣き声が聞こえた。普段から聞き慣れた泣き声だ。慧は驚いて声のする方へ振り返る。少し離れた芝生の上に小さな青いものが見えた。

「祥吾？」

慧は慌てて駆け寄る。

「祥吾！ 大丈夫なの！」

少し汚れているが青い服に黄色いSの字が見える。間違いなく祥吾だ。外傷は全くない。慧は信じられない気持ちでいっぱいだった。

祥吾は最初の衝突の勢いでベビーカーから放り出され、運良く柔らかい芝生の上に着地したのだった。慧は彼の無事を喜び、しっかりと抱きしめた。

「よかった！ 祥吾……。よかった……」

しかしまだ喜ぶには早かった。

「佑馬は……」

慧は辺りを見回した。地面に落ちているものは何であろうと見逃すまいと躍起になって周辺を探した。もしいれば目立つはずの佑馬の白い服も全く見当たらなかった。

祥吾が助かった喜びも束の間、慧は目の前が真っ暗になった。

再び潰れたベビーカーに目をやる。

変わり果てたそれは、ほのぼのとしたデザインの見る影もなかった。どうやら直視出来そうにない。自然と目が逸れる。しかしあの中を確かめないわけにはいかない。

慧は祥吾を抱いたままベビーカーに歩み寄る。弟は腕の中で相変わらず泣いていた。

（佑馬……。お願いだから無事でいて）

どうか中に佑馬がいませんようにとかすかな希望を抱き、慧は片手でベビーカーの残骸を取り除いていった。絡まり合った金属の骨組みは片手ではなかなか思うように出来ない。それでも慧は骨組みを少しずつ解体して、日除けの部分だったところを剥がした。

下の布地に鮮やかな赤い染みが滲み出ている。血だった。それを見た途端、慧は涙が込み上げてきた。

尖った破片で手に傷が付くのも構わず一心不乱に残骸を掻き分ける。

（間違いだ。何かの間違いだ）

慧は必死にそう祈っていた。だがそこに見たものは、憐れな姿になつたもう一人の弟だった。完全に手遅れだとわかった。見るに耐えない無惨な有様であった。生前の可愛らしかった面影もない。側では慧が与えた哺乳瓶が割れ、血とミルクが混ざり合った。ピンク色の液体がしたたり落ちていた。

慧はぐるりと半回転し、二度と動くことのない佑馬に背を向けて一目散に走った。茂みの辺りまで辿り着くと、祥吾を芝生に置き、



抑えきれず吐いた。嘔吐物を目の前に、激しく咳き込む。涙が溢れ出した。吐いた所為ばかりではない。胃から何も出なくなっても、涙だけは止めどなく流れてくる。少しずつ声をあげ、次第に嗚咽へと変わる。地面にうずくまり、泣き続けた。祥吾も泣いている。慧は弟と共に大声でむせび泣いた。

祥吾はかすり傷程度しか負わなかった。念のため、精密検査を受けるべく病院に向かった。

やってきた警察や救急隊員、そこに居合わせた人の誰に言わせても「奇跡」としか表現しない。しかし佑馬にとっては奇跡でも何でもない。彼は死んだのだから。

祥吾と佑馬は隣り合わせに乗っていた。いつもはどっちがどっちに座るかなんて決まっていなかった。慧は気まぐれで二人の場所を決めていたのだが、それが彼らの運命を大きく分けようとは。

佑馬以外に犠牲者は出なかった。皆トラックに気付き、とっさに逃げたため、事故を免れることが出来た。慧だけが居眠りをしており、逃げ遅れたのだ。

トラックの運転手は昼間から酒を飲んでた。座席のドリンクホルダーに、カップ酒が置いてあった。車の中には他にも、空になった酒瓶やビールの缶がたくさん転がっていた。

横倒しになったトラックから保護されたとき、彼は酩酊状態であった。警察の激しい詰問が気に障ったのか、逆に怒り出す始末である。自分のやったことの重大さに全く気付いていない。そんな状態ならば、事故を起こさない方が無理だ。深酒で運転を誤り、公園に突っ込んだのである。トラックの運転手はそれでもブレーキを踏もうとはせず、暴走を続けた。彼は全く無傷であった。彼は飲酒運転と過失致死傷害の現行犯で逮捕された。

佑馬の訃報を仕事先で聞いた葉月と小宮が血相を変えて現場に駆けつけた。

変わり果てた我が子の姿を見て、母はその場で泣き崩れた。小宮

の方も悲しみが抑えきれない様子で、じつと体を震わせている。

葉月は慧の姿を認めると、早足で向かってきた。

「何があったの！ どうしてあなたがついていながらこんなことになったのよ！」

慧の胸元を掴んで前後に揺さぶる。信じられないほどの強い力で激しく体を振る。しかし慧の体はぼろきれのようになすがままだった。

「ごめんなさい。私が眠ってなんかいなければ……」

そう言った直後、葉月の平手打ちが飛んできた。風船を破裂させたような音が辺りに響く。だが一発では終わらず、何度も打ち据えられる。慧の左頬だけが真っ赤に染まった。それでも葉月は手を止めようとはせず、仕舞いには拳で慧の胸を思い切り殴りつけていた。周りの者は皆、その異様な光景に驚きの色を隠せない。小宮が後ろから羽交い絞めにして葉月を止める。いつも冷静でプライドの高い彼女の顔は、涙と鼻水でぐちゃぐちゃだった。それにも動じず叫ぶ。「私たちがいない間、あなたが子供の面倒をしつかり見ないでどうするの！ こんな軽率な行動をとって。佑馬はまだ一つなのよ。私の子供を返してちょうだい！ 佑馬！ 佑馬ああ！」

母がここまで取り乱すのを慧は初めて見た。子供を失った親というものは、恐らくほとんどが似たような反応であろう。しかし葉月は尋常ではなかった。慧を厳しく罰し、それを止めようとした小宮にもつかみかかった。警察には「佑馬を返せ」と食ってかかり、大声で息子の名前を呼び続ける始末である。慧は母の頭がおかしくなってしまうのではないかと心配した。将来を囑望した息子が死んだのだから無理もない。

しかし双子の片割れである祥吾は無事である。もし彼まで死んでいたら、葉月は本当に発狂していたかもしれない。

すでに白いシートが被され、肉片と化した佑馬が運び出されようとしている。母はそれを追いかけようとした。

「待って！ 連れて行かないで。私の子供なのよ！ その子を立派

に育てなければならぬの。お願いだから返して!」

慧は母を止める。

「母さん、やめて! あれはもう佑馬じゃない。どうしようもないんだ」

「お願いだから! 待つて! 行かないで!」

娘の言葉は全く届いていないらしい。存在すらないかのように、ただひたすら担架を追いかける。この世のものとは思えない力を抑え、母を何とか押し留めた。

もう二度と会えない弟を乗せた車が走っていく。

葉月は突然、魂が抜けたようにその場に崩れ落ちた。慧の腕の中からすっぽりと抜ける。その目には焦点が合っていない。小宮が彼女に近付き、肩に手を置いた。慧と目が合う。彼は何か言いたげだったが、かろうじて堪えたようだった。

弟の死による悲しみ、罪の意識と、母への心配が頭の中に渦巻いていた。

(これからどうなるんだろう……)

慧は言いしれぬ不安を抱えていた。

## 回想？

5

佑馬の葬儀は、身内だけでしめやかに行われた。親戚一同、身の回りの世話をいろいろと見てもらった友人などが出席していた。中には井川さんの姿も見えた。

「慧ちゃん、どうしてこんなことに……」

彼女は慧に会つと、開口一番に言った。

「みんな私が悪いの」と、事故の状況を説明する。天気がいいので、双子を連れて公園に出かけたこと、日頃の疲れから居眠りしたこと、その間にトラックが突っ込んできてベビーカーを巻き込み、佑馬だけが帰らぬ者となつてしまったこと……。記憶が嫌でも蘇る。後悔と自責の念が彼女に重くのしかかった。井川さんはときどき頷きながらじつと聞き入っていた。

「そう……、可哀想に。まだほんの子供だったのに。でも慧ちゃんが悪いわけじゃないわ。毎日勉強で頑張っていたんだもの。悪いのはトラックの方よ。佑ちゃんがいなくなったのは寂しいけど、元気出さなきゃダメよ。祥ちゃんはまだ生きているんだから」

声は震えていた。ハンカチを手に、ときどき目頭を押さえている。本当にシヨックで落ち込んでるのがよくわかった。しかし、彼女は慧をなんとか励まそうとしている。その優しさが心に染みだした。

井川さんに比べ、葉月は抜け殻のようになっていた。顔面蒼白ですっかりやつれてしまっている。喪服は着ているが、挨拶に来た知り合いにも反応を示さず、心を固く閉ざしている。見ている方が辛くなるほど憔悴しきっていた。小宮も隣で彼女の様子に心を痛めているようだ。事故現場の公園で葉月が狂ったように慧に詰め寄ったとき、彼は言った。

「やめなさい！ 慧ちゃんを責めても佑馬は戻ってこない。これが

運命だったんだ。慧ちゃんだって勉強で忙しい中、子守をしてくれてたんだぞ！ そんな彼女を悪者扱いするとはどう言うつもりだ！」  
慧は彼のその言葉が嬉しかった。自分は責められて当然だと思っていたが、それを庇ってくる人がいたことが、彼女にとって救いだっただ。

葬儀はあつけなく終わった。火葬場では母が再び取り乱さないものかと、不安になっていた慧だったが、それも無用な心配であった。葉月は、愛する息子が入った小さな棺桶を見つめ続け、火にくべられる直前まで目を離さなかった。燃やされている最中も、視線はずっと炉の入口に注がれている。まるでマネキン人形のようにだった。やがて炉から出てきた佑馬は、バラバラの骨と化していた。これが以前は笑って、歩いて、生きていたとは到底思えない。完全な無機物となってしまった。無表情のまま、一筋の涙が葉月の頬をつたっていた。周りのすすり泣く声もひときわ大きくなる。まだ骨の数も少なく、小さかった佑馬は、さらに小さくなって骨壺に納められた。佑馬の死は、慧の家庭に大きな暗い陰を落とした。母は塞ぎ込むことが多くなり、小宮も以前と比べて口数が減った。慧は少しでも元気付けようと、話し掛けたりしていたのだが、返ってくるのは心ない返事ばかりである。二人とも次第に慧とは疎遠な関係になっていった。

翌日から慧は普段通りの生活に戻った。彼女の辛い気持ち、針で胸の内側を手当たり次第に突き刺している。しかしそれを乗り越えなければ前に進めない。尖った針の先も、時間が経てば丸まって痛みを感じさせなくなるだろう。

学校の友人や先生たちも、慧を心配してくれた。彼女はその気持ちに感謝しながら、自分は大丈夫だと強がって見せた。こうして仲の良い友人と話をしている方が、家でじっとしているよりも気が紛れる。ふとした瞬間に涙ぐみそうにもなるが、それを誰にも悟られないように堪えた。

周りが受験で忙しくしているのを見ると、こう思わずにはいられ

なかった。

（勉強していなければ、公園で寝たりなんかしなかったのに）

もちろん弟が死んだのは、勉強で夜更かしをした所為ではない。それは慧にもわかっていた。様々な偶然が重なり合い、不幸な結果となっただけなのだ。しかし、その幾重の偶然が、どれか一つでも起こっていなければ、佑馬は死なずに済んだのかもしれない。しかし彼女には、自分が引き起こした居眠りという事実だけが大きな枷となった。

（私は何のために勉強しているんだろう……）

母のため？ 会社のため？ しかしその束縛からはもう解放されたはずだ。幼い頃より将来は母の会社を継ぐと決められ、自分の夢を持つことも許されなかった。そんな慧が弟たちの生まれたのを境に、突然自由の海に放り出された。しかし彼女は戸惑うばかりで、何に向かつて進んでゆけばよいのかわからなかったのだ。同級生たちに感化され、勉強していたにすぎない。それが原因で死んだのなら、佑馬も浮かばれないと思った。

残りの春休み 約二週間あったが、慧は毎日塞ぎ込んで過ごした。勉強など手に付くはずもない。学校が長期の休みでよかったとつくづく思った。こんな状態で学校へ行っても、耳に入らないのはわかりきっている。そんな状態で一日中机に束縛されるなんてとても耐えられない。

しかしそんな彼女でも、日に日に思い悩む時間は短くなっていく。春休みが終わる頃には、少し余裕を取り戻していた。

新学期が始まり、教室やクラスも一新された。せわしない日々が再び訪れる。学校へ行き始めて数日経つと、気持ちもかなり落ち着いていた。弟のことは忘れてはいけなかったが、忘れなければならぬ。そうすることで、人間は一步步成長していくのだ。辛く悲しい出来事があっても、立ち直る日は必ずやって来る。思い出すだけで涙が込み上げてくることでも、いつかは笑って思い出話<sup>はなむけ</sup>が出来るに違いない。慧は前向きな考えを持つと決心していた。弟への饒

として。

ある日、慧に元気を出してもらおうと、友達数人が遊びに行こうと持ちかけてきた。受験生で忙しい身であるのだが、彼女たちも息抜きも必要としていたのだ。計画を立てたのは、高梨飛鳥であった。弟が死んでまだ日が経っていないので少々不謹慎かと思われたが、慧はその提案に快く賛成した。さすが長年の友は慧の心中もよくわかっていた。

弟たちが生まれてから、世話などで忙しく友人との付き合いも希薄になっていった。佑馬は亡くなり、祥吾は検査のため入院している。慧にとっては一年前の状態に戻ったのだが、気持ちはあるのときに戻れない。どこかにぽっかりと穴が開いてしまったようだ。そこに冷たく荒んだ風が吹き抜けるたびに、彼女は激しい自己嫌悪に襲われていた。家にも何をしてもなく、暇な時間をただ持て余していたのだ。そんなとき飛鳥からの誘いがあり、慧は自らの気持ちを払拭させるべく、共に出掛けて行った。

数週後の日曜日、午後から街に出た彼女たちは、それまでと変わらず楽しいひとときを過ごした。慧にとって久しぶりだ。ショッピングやカラオケ、皆ふざけ合い、そして笑い合った。慧は余りはしゃぐ性格ではなかったのだが、その日は久しぶりに心から笑うことが出来た。

周りの友達も気遣ったりすることなく普段通りに慧に接してくれた。それが彼女にとっては却って有り難かった。

夕方近くなり、遊び疲れて空腹になってくる頃、飛鳥が「うちに夕食を食べに来ない？」と提案した。もちろん全員が大賛成だった。飛鳥の家は慧に負けず劣らない裕福な家庭で、友達が突然五、六人邪魔したところで何の問題もなかった。彼女の両親も娘の友達を快く招き入れた。

「ママ、今日は庭でバーベキューしてもいい？」

こんなことをいきなり言っても許されるのだ。

飛鳥と彼女の両親が準備を進める間、慧たちはリビングで寛いでいた。「手伝おうか」と言ったのだが、飛鳥は「いいからいいから」と、皆を家の中に押し込んだのだ。ホットカーペットの上でゆつくりしながら、慧はここに来るのは何年ぶりだろうかと考えていた。ほとんど変わっていない。小学校の頃にはよく遊びに来ていたものだ。懐かしさも交えて他愛のない話で盛り上がっていると、ポーチへの窓が不意に開けられた。

「準備出来たから外に出ておいでよ」

飛鳥は身を乗り出してそう告げると玄関に回った。作業したためだろう、長袖の腕を捲っている。額にも若干の汗が吹き出していた。皆が出ていくと、手招きして呼び寄せた。

高梨家の庭は、まさに富豪と呼ぶに相応しいものだった。玄関を出ると、石畳が敷き詰められた小道を向こうへ進んで行く。ベランダ近くのポーチには、花の文様があしらってあるアンティーク調の机と椅子が置かれており、すぐ近くに自家用プールが見えた。慧も昔何度か泳いだことがある。

「こつちよ」

飛鳥は皆の先頭に立って歩き出した。彼女の家初めて訪れた何人かは、驚きで挙動不審になっている。だが初めてではない者も毎回舌を巻くほどだ。少しずつバーベキューのいい匂いが漂ってくる。綺麗に刈り揃えられた植木を横目に進んでいくと、やがて緑の中にピンク色の光景が入り混じってきた。

「やっぱこの時期は花見でしょ」

飛鳥が言くと、そこにいた全員が感嘆の声を漏らした。

彼女たちの目の前には数え切れない桜の花が咲いていた。彼女の家には、なんと四季それぞれの庭があるのだ。例えばここにはソメイヨシノ、椿、パンジー、水仙、ヒナゲシ、アマリリス、チューリップなど春に開花する植物ばかりが植えられている。もう少し進むと夏の植物ばかりが植えられた庭、さらに進んで秋の植物の庭、そして最後に冬の庭と、邸宅の周りをぐるりと包むように季節の庭で



覆われていた。春に眩しく映える桜だが、花見の時期は終わりに近付き、絶え間なく花びらが散っていた。枝には葉桜が目立ち始めている。暮れなずむ春の日をバックに舞う桜は幻想的であり、また一種の侘びしさがあつた。綺麗だと思つ反面、失う悲しみも併せ持っている。はかなく散つていく姿は人間の死に似ていた。慧はふと弟を思い出す。幼くして命を絶たれた佑馬は、むしり取られた蕾つぼみのようだ。

庭園の中程にバーベキューセットが置かれており、その上には所狭しと肉や野菜が乗せられていた。炭火焼きだ。どれもほどよく焼けている。こんがりとした焼き色と匂いが食欲をそそつた。友人たちは喜び、さらに騒ぎ始める。誰かがゴクリと生唾を飲むのが聞こえてきそつた。隣のテーブルには生の食材が大量に切り分けられて串に刺してあつた。手際のよさといい、飛鳥は始めから計画していたのかもしれない。

「さあ、食べましょう。遠慮しないでね。たくさんあるから」

「いただきます」の合図と共に、彼女たちは一斉にかぶりついた。女の子とは思えないほどの食欲だつた。もし一人でも男がいれば、こつはならないだろう。口々にバーベキューに対する賛辞の言葉が溢れていた。

慧も気兼ねすることなく肉を頬張つた。自然と顔がほころぶ。大勢で食事をするのはやはり楽しい。食事は静かなものだと思つていた彼女には、こんな経験など滅多になかつた。

「おおい、誰か手伝つてよう」

と、飛鳥が大きな箱を持ってふらついている。衣装ケースほどの大きさがあるクーラーバッグだつた。よほど重たいのか、たまらずそれを地面に一度下ろす。慧ともう一人が走り寄つて手を貸した。「何これ？」と訊いても、彼女は不敵な笑いをするばかりだ。ようやく皆のいるところまで辿り着く。飛鳥は「じゃーん」とクーラーバッグの蓋を開けると、そこには缶ビールやカクテルがぎっしりと詰まっていた。周りから歓声が上がる。

「やっぱりコレがないとね」

飛鳥は小悪魔のような笑みを浮かべた。高校生が、しかも受験生が不謹慎極まりない。しかし誰も反対する者はいなかった。寧ろ待ってましたと言わんばかりだ。彼女の両親も咎めるそぶりも見せず、「足りなければまだまだあるよ」と非常に寛大だ。飛鳥はテキパキと皆にビールを回す。全員に行き渡ると、プシュツという破裂音があちこちで上がった。慧もならってプルトップを空ける。当然彼女は酒など初めてだった。だが後ろめたい気持ちはない。それどころか、初めてのことで心が弾んでいた。

「カンパニー」

ビールの缶を合わせる。飲み口を近づけた。初めての酒は少し苦かったが、それも最初だけだった。口の中にビールの味が広がってゆき、爽快感が増す。気付けば一気に半分近くまで飲み干していた。弾けた感覚が喉を通り過ぎる。液体が体の中の通過する軌跡がいつも簡単にわかった。

そして楽しい時間は瞬く間に過ぎ去っていく。日はすっかり沈み、空には星が輝き始めた。桜はいつの間にか下からのスポットライトに照らされ、一味違った美しさが浮かび上がっている。桜色というよりは白だった。

バーベキューは跡形もなくなっていた。テーブルの上に置かれていた食材も全て焼かれ、彼女たちの胃袋の中に消えた。全員満腹になったらしく、芝生の上に座り込んでいる。夜桜に見入ることに専念していた。アルコールも入って上機嫌だ。普段からお喋りな彼女たちは、いつもより更に大きな声で雑談に花を咲かせている。

慧は話に耳を傾け、ときどき笑っていた。

（やっぱり私には聞き手の方が性に合っているな）と思った。飲んだ量に見合うほど酒は回っていない。しかしほろ酔いで心地良かった。隣には飛鳥がいた。普段は話の中心にいる彼女も、今回は聞き役に徹している。あまり酔ってはいないようだ。

「飛鳥」

慧は彼女の方を向かずに呼びかけた。

「ん？ どうしたの？」

「今日はありがとう。元気が出たよ」

そこでようやく友の顔を見た。彼女は一瞬呆気にとられた表情をしたが、すぐに満面の笑みを取り戻し、

「本当に？ 本当は誘うのドキドキだったんだよ。あれからまだ日も浅いし。慧はまだ一人でいたいかなって。でも楽しんでたようだし、よかった」

「うん。楽しかった。飛鳥のおかげ」

「ありがとう。そう言ってくれるとあたしも嬉しい。やった甲斐があったってもんよ」

「私、こんなじゃダメだって思ってた。佑馬が死んで、落ち込んでばかりいても何も始まらないって。飛鳥から誘われたときは正直迷ったけど、『この選択が転機になるかも』って思ったんだ。これをきっかけに私も元気にならないと、ずっと立ち直れない気がして」

慧は素直に心の内を語った。飛鳥は頷きながら聞いてくれている。「そうね。身内を亡くしたんだから、落ち込まない方が無理だけど、やっぱりいつまでも引きずるのはよくないよ。明るかった佑馬くんだもの。あんたがくよくよしている姿なんか、見たくないと思うな。だけど元気にしていたら、きっと喜んでくれるわ。もしも自分が死んで、幽霊になったとしてもそう思うでしょ？ 愛する人には笑っていて欲しいってさ。あの子はお姉ちゃんが好きだったから絶対そう願っているはずよ。だからあんたを少しでも元気付けなきゃって思ったの。自暴自棄な気持ちから、早く救ってあげたかったし。なーんてね」

最後辺りの言葉は少しおどけていた。二人は顔を見合わせて笑う。「今日は忘れられない日になるよ」

慧がしみじみと言った。

「またいつでもおいで。その代わりに、食べ過ぎで太っても責任持てないけど」

二人は再び笑い合った。

時間は午後十時前だった。食事会もそろそろお開きである。楽しい時間は、あっという間だった。他の友人たちも惜しんでいる。

食べ散らかしたものを少し片付け、飛鳥の両親に感謝の言葉を述べた。

飛鳥は門の所まで見送りに来た。

「また学校でね」

高梨家の門の前で別れると、皆それぞれの家の方向へ歩いていった。

「あーあ、あんなにふらついちゃって。大丈夫かな」

慧は飛鳥と共に、友人たちの後ろ姿を見送りながら言った。飛鳥は全く気にも留めない様子で答える。

「家もすぐ近くだし大丈夫よ。お巡りに見付かるような馬鹿でもな  
いって」

その言葉に納得すると慧は思っていたことを口に出した。

「飛鳥の親があれほど寛大だとは思わなかった。昔からのびのび子  
育てしてるとは思ってたけど」

「そう？ あたしにとつては普通だからよくわかんない。でもうちの  
両親って、小さいときはすごく厳しく育てられたみたいよ。家の  
手伝いや勉強で遊ぶ時間なんてなかったし、友達との思い出もほと  
んどないって言ってた。確かに厳しくされたお陰で今の地位に  
いるんだろうけどさ。一番友達と遊びたかった時期に遊べなかった  
ことは、今でも悔やんでるんだってさ。たぶんその反動なんだよ」

「うん。おじさんとおばさん、私たちを見てとても楽しそうだった。  
普通じゃ有り得ないよ。受験生が酒盛りしてるのを微笑ましく見守  
る親なんて」

「ふふふ、言ってる。まあいいじゃない。楽しかったんだから」

飛鳥には兄が一人おり、彼はイギリスの有名な大学院に留学中だ。  
いずれは卒業して日本に帰ってくることになるだろう。その点で飛  
鳥の両親の将来は安泰だった。飛鳥は将来についてあまり口出しさ

れたことがないと言う。自分の好きなように振る舞い、好きな道を歩いて欲しいと言うのが両親の望みだそうだ。

このままだといつまでも話が出来そうな気がしたので、後ろ髪を引かれる思いだが慧は「そろそろ帰る」と切り出した。

「飲んでることお母さんにバレない？」

「今日は遅くなるみたいだから。帰ったらすぐ風呂に入って寝ることにする」

歩き出しながら慧が言った。

「うん、じゃあ気を付けて。バイバイ」

飛鳥が胸の前で小さく手を振ると、慧も「バイバイ」と振り返した。

しばらく歩くと後ろから不意に飛鳥が大声で呼び止めた。慧が振り返ると、飛鳥は口から何かをつまんで取り出した。

「見て！　とうもろこしが歯に挟まってた！」

飛鳥の声が春の夜に響いた。

「あははは、何よそれ！」

慧は嬉しく感じていた。私や飛鳥にはこんなのがお似合いだと。

そんな友人の心遣いに感謝しつつ家路についた。

6

楽しかった余韻に浸りながら、慧は家に向かっていった。アルコールの所為で体は温かく、気分も高揚していた。足取りも軽い。家がだんだん見えてくる。その日、葉月と小宮は仕事だった。二人とももう帰宅しているだろうか。ガレージの前を横切ると母の車はない。しかし小宮のはあった。すると、彼は家にいるはずなのだが、窓からは全く明かりが見えない。もう寝てしまったのだろうかと思は思った。

玄関扉のノブを回す。何の抵抗もなく開いた。

不用心だなと思いつながら鍵を閉め、電気を付ける。小宮のブラン

ド靴が見えた。彼はいるようだ。

慧も靴を脱ぎ、玄関の明かりを頼りにリビングへ向かう。中に入ると真つ暗なので手探りでスイッチを見付けなくてはならなかった。ようやく探り当て電灯を灯すと、そこには誰もいない。

小宮はもう寝室で休んでいるだろう。そう慧は決めつけ、一人で納得した。彼女は上着を脱いでソファに投げ置いた。何しろ初めての酒でやたらと喉が渇く。冷たい飲み物を求めてキッチンに向かった。

キッチンも薄暗い。何か酒臭かったが、わざわざ電気を付けるのも面倒だったので、慧はそのまま冷蔵庫に向かおうとした。

そのとき、人の気配がした。テーブルのところに誰かがいる！

慧は驚き、慌ててスイッチに向かう。電気を灯すと、そこには小宮がいた。椅子に座って、キッチンテーブルに突っ伏している。その上にはブランデーの瓶がいくつも転がっていた。よく見たら、手にはまだ半分ほど中身の残ったグラスが握られている。どうやら彼は酔い潰れているらしい。彼は酒は嗜む程度だが、飲まれることはなかった。息子を失った悲しさがまだ跡を引いているのだ。

室内が明るくなり、眩しさで彼は目を覚ました。顔は紅潮し、目は虚ろだ。辺りを見回し、慧の姿を認めた。彼女は小宮の初めて見る一面に言葉を失い、何を言っているのかわからなかった。

「こんな時間までどこに行っていた？」

彼はゆっくりと口を開く。慧はたじろぎながら答えた。

「……友達と遊びに行つて、ご飯食べたり」

「遊んでいただけと！」

小宮は突然、椅子をガタンと轟かせて立ち上がった。慧の言葉は途中で打ち切られた。彼は物凄い剣幕で慧に歩み寄る。

「佑馬が死んだって言うのに遊んでいただけと！ お前、よくそんなことが出来るな。誰の所為でこんなことになったと思ってる？ 子守の最中に居眠りなんか！」

小宮が慧のことを「お前」と呼んだことなど一度もなかった。酒

の勢いもあつたのだらう。彼は本音を洗いざらいぶちまけていた。慧は怯みながらも言い返す。

「だって、いつまでも悲しんでいたって佑馬は喜ばないじゃない」「お前に佑馬の気持ちかわかるのか！ まだ一歳だったのにどうして喜ぶと言える？ あの子はわけもわからないまま死んでしまった。お前があんなところに連れ出したりしなければ死なずに済んだのにお前が佑馬を殺したんだ！」

佑馬が死んだとき、葉月は狂うほど取り乱していたが、小宮は冷静だった。全てを受け入れていたかに見えた。慧に対しても決して責めることはなく、むしろ励ましてくれていたのだ。まさか彼が心の奥底でそんなことを思っていたとは。慧はショックを受けた。

小宮は言いたい放題言つて、だんだん怒りが込み上げてきたのだらう。慧の首に掴みかかってきた。あまりにも突然なことで、身構える暇はなかった。頸動脈に指が食い込む。何とか腕を押さえ、それ以上首が絞められるのを辛うじて防いでいた。

「な……何をするの」

慧はやつとのこととで声を絞り出す。

「佑馬の無念を晴らすんだよ」

酒臭い息が降りかかる。間近に見る彼の目は血走り、完全に正気を失っていた。彼女は恐怖に怯えた。小宮はさらに顔を近づけ、慧の回りで小鼻をひくひく動かせた。

「お前酒を飲んでいるな？ 高校生が酒なんか飲んでいいと思ってるのか。佑馬が死んでお前のような奴が生き残るとはな……」

マグマのように内側から沸き出す怒りを感じる。慧の首にかかる力が強くなっていく。彼女は苦痛に顔を歪めた。小宮の額に血管が浮き出してくる。怒りのため小刻みに震えていた。優しく接してくれた頃の彼の姿はまるでなかった。慧にとってはそれだけでも充分過ぎるほどの衝撃だったが、彼女の心は、次の一言によって完全に打ち砕かれた。

「お前が死ねばよかったんだ！ お前が！」

小宮の目が狂気に光る。口にこそ出さなかったが、常にそう思っていたに違いない。「慧ちゃんは悪くない」と庇っていたときも恐らく……。

もしかしたら葉月も思っていたかもしれないが、そんな彼女でも決して口に出さなかった言葉。禁句と呼ぶに相応しかった。それを信頼してきた人物にあからさまに突き付けられたのだ。慧は人の心の間に、得体の知れない恐ろしさを感じた。

「く……くつ……」

必死に手足を動かしてもがく。服が乱れるのも気にしていられなかった。このままでは本当に殺されかねない。

しかし小宮は、慧のばさらになった黒髪と悶える表情に、別の感情を抱いたようだ。彼の目に疚しい光が浮かぶ。不意に両手の力が一緩んだ。彼女は涙と共にむせた。しかしそれにお構いなしに、首にかかっていた手が徐々に下へと向かい、慧の体を撫で回す。

「高校生の分際でいい体しているじゃないか。葉月の弛んだ体とは大違いだ。前は男みたいで全然そそらなかったのに、最近急に色気付きやがって」

そう言いながら、小宮は彼女の首筋に顔を押し当ててきた。何か生暖かいぬるぬるしたものが肌に触れる。彼の舌だった。おぞましさに鳥肌が立った。アルコールの不愉快な臭いが鼻を突く。慧は顔を背け、力の限り抵抗した。いつの間にか彼に背中をがっちり抱きかかえられている。彼女は言いようのない不快感を覚えた。

「いやっ！」

抵抗するが、体の自由が効かない。そのままの体勢でリビングまで数歩よろめき、ソファになだれ込んだ。小宮は相変わらず覆い被さったままだ。

「お前が悪いんだぞ。ずっと男っぽくしていれば、こうはならなかったのに」



彼は鼻の穴を膨らませながら言った。慧の体のあちこちをまさぐっている。彼女は小宮の顔と肩に手を突っ張らせていた。彼の右手が服の裾から強引に入ってきた。手は背中に回り、ブラジャーのホックを外そうとしている。もう片方は慧のズボンのベルトを緩めていた。

「やめてっば！」

しかし大声を出しても、彼はやめようとしないうし、誰も助けは来ない。高級住宅街だが、家は庭に囲まれ、隣家との距離はかなりのものだ。

小宮は凄い力で彼女をねじ伏せている。もはや見境はなくなっていた。

必死の抵抗だったが、男には敵わない。彼はブラジャーに手間取っているようだ。しかし、下の方はそうではなかった。ベルトは抜き取られ、ズボンのボタンもあっけなく外された。彼の手が強引に入ってくる。下着の入り口に差し掛かった。

その瞬間、彼女の中で何かが弾けた。深紅の激情がいっぱいに広がった。あっさり抵抗するのをやめる。小宮は観念したと思いついた。だらしく、更に勢いよく体を押しつけた。

「いい加減に……しろッ！」

慧は自由になった右の拳で、小宮の横面を思い切り殴った。

「うっ」

彼はパンツの中に入れかけた手をぱつと引き離し、顔を押しさえる。脛が一文字にぱっくりと裂け、血が溢れ出した。さらに肘を頭頂部に振り落とすと、もう一発顔面に叩き込んだ。彼の赤ら顔は、思いもよらぬ反撃と流血により、一転、真っ青になった。慧は立て続けに手刀を首筋に叩き込んだ。彼はソファから転げ落ち、もんどりうった。もうとつくに辞めてしまった空手だったが、体が覚えていたのだ。

小宮は絨毯の上にうずくまっている。慧はおもむろに立ち上がり、ズボンを直す。そして彼に真正面から向き合った。その佇まいを見

ていた小宮は、無理やり作り笑いを浮かべた。しかし顔は引きつっている。弱々しい声で言った。

「冗談だよ、慧ちゃん。ちょっとふざけただけなんだ」

慧に小宮の声は届かない。懇願する彼を見下ろし、顔面を蹴った。血飛沫が宙を舞う。彼は後ろに倒れ、ガラス製のテールブルでしたたかに頭を打った。衝撃でガラスは粉々に割れ、全身に降り注いだ。体をすくめてそれをもろに浴びる。彼にさっきまでの威勢の良さはない。しばらく頭を抱えうずくまっていたが、慧がそれ以上攻撃しようとしないので、恐る恐る顔を上げた。顔には幾つか切り傷が出来、鼻からも血の筋が流れている。酔いは覚め、唇をわなわなとさせていた。

「か……勘弁してくれ。悪気はなかったんだ」

それまで小宮を慕っていたが、義理の娘を手込めにしようとする人間への愛情など、どこかに吹き飛んでしまった。彼の本性を見抜けなかった自分が情けなくなった。数年間一緒に生活してきたが、彼のしたことは許せなかった。

慧は戸棚に置いてあった花瓶を持った。水も入っていたのでかなりの重さがあったのだが、彼女は片手で軽々と持っていた。差してあつた花を抜き、そつと置く。

直接手を下す気はそれ以上なかった。彼の回りにはガラスの破片が散らばっていたので、近付こうにも近付けない。

「悪気はなくても、人は傷付くのよ」

彼女は花瓶を小宮めがけて思い切り投げた。水を撒き散らしながら一直線に向かっていく。避ける間もなく彼の顔に見事命中した。花瓶は派手な音を立てて割れ、彼は水と破片を頭から被った。大の字になってカーペットの上に倒れる。殺してしまったか一瞬思ったが、洗い流された傷口から、新たに血がじわりと滲んでいる。どうやら気絶しただけのようだった。

慧の後ろで軽い物が落ちる音がした。彼女は速やかに振り向く。

「な……何なの？」

葉月だった。たった今帰ってきたらしい。ハンドバッグを床に落とし、家の中の惨劇に呆然としている。

「あなた！」

リビングの中央で横たわる小宮を見付け、慌てて駆け寄ろうとした。だが、ガラスの破片に囲まれた彼に触れることはおるか、近づくことすら出来ない。

「慧！ どうしたの！ 何でこんなことになってるのよ！」

葉月はヒステリックに叫んだ。しかし慧は答えようとしない。自分に全く非はないのだが、他人に話すとなるとさすがに抵抗がある。「どうして何も言わないの！ 黙ってちゃわからないでしょ！」

彼女はガラスの前で二の足を踏んでいる。ときどき娘の方を振り返っては、その状況の説明を求めている。意地でも経緯を知るつもりだろう。母はそういう人だ。慧は観念した。

「私、その人に乱暴されかけたの……」

「乱暴されかけた？ どういうことなの。」

葉月はおうむ返しに尋ねる。

「だから襲われたのよ」

出来るだけ遠回しに言おうとするが、葉月はそんな説明では満足しない。慧には母がイライラしているのが手に取るようにわかった。「『襲われた』だけじゃ全然わからないわよ！ はつきり言いなさい！」

「無理やり体の関係を強要された。犯されそうになった。強姦未遂。レイプ未遂よ。これでわかった？」

慧は意識のない小宮を見やり、母には目もくれず淡々と語った。

「何ですって？」

葉月は目を白黒させている。娘の方に少しだけ歩み寄ったり、小宮へ足を向けたり、小刻みに何往復もしていた。

「あなたの勘違いじゃないの？ ただ誤解してしまっただけで」

慧は悲しさが込み上げてきた。実の娘である自分よりも、ほんの三、四年前に知り合った男の肩を持つのか、と。泣きたい衝動に駆

られたが、鼻の奥でジンと堪える。

「……違う。本気で私を襲う気だった」

「きつとふざけていただけよ」

母の先程までの勢いは削がれてしまっていた。慧は俯いたまま答える。

「ふざけてあんなことしない」

「まさか……」葉月は絶句していた。「もし本当だとしても、だからってこんな大怪我させなくてもいいでしょう！」

突然大声で怒り出した。彼女は自分が不利になると憤慨する傾向があった。

「ああでもない今頃私はどうなっていたと思う？ どうしてそこまであいつの味方をしたがるの！ 母さんの悪口だって言っていたのに」

「あの人があること言う訳ないじゃないの！」

「言ったわ。母さんは何もわかってない。自分の価値観を他人に押しつけて、満足しているだけよ！ 馬鹿みたい。人を見る目だって……」

言葉を遮り、葉月の平手打ちが飛んできた。しかし、慧はぶたれる寸前でその手首を掴み取った。力を込め、きつく握り締める。

信頼していた小宮に犯されかけた衝撃はまだ収まっていない。そこに母のその態度だ。慧の心配などしていなかった。もう少し彼女を気遣ってもいいのではないか。

慧は不満で溢れる言葉をそのまま吐き出した。

「どうしてわかるの！ るくに話も聞かないのに。私が理由を言っただけで！」

葉月は苦悶の表情を浮かべている。手を振り解こうとしているが、ビクともしなかった。慧は初めて母に真っ向から逆らった。葉月にしてみれば、こんなに大声を出した慧を見たのも初めてだったかもしれない。

「……なんて子なの。父親をこんな目に遭わせて開き直るなんて。どこであなたみたいになつてしまったのかしら」

葉月は手首を強引に引き離れた。指の形に痕が残っており、痛そうにさすっている。母は娘をキツと睨み据える。しかし、すぐに目を逸らし小宮の方へ向き直ると、消え入りそうな声でポツリと洩らした。

「……あの子の代わりに……」

その先は慧には聞き取れなかった。だが何を言っていたかはだいたい予想がつく。慧は必要以上に過敏になっていた。

「私が死ねばよかった？」

葉月は驚いて娘の方を見た。明らかに動揺している。

「何を馬鹿なことを……」

「そうなのね。あの人にもさつき言われた。『お前が死ねばよかった』って。どうせ信じてくれないんでしょう？ でも本当よ。嘘だと思ふなら勝手に思っていればいいじゃない」

慧は半ば諦めたように言った。最後に一言付け足す。

「それから言っておくけど……『父親』じゃない。二度とあの人をそんな呼び方しないで」

彼女の心は閉ざされ、二階の部屋に駆け出していた。

「慧！」

母の呼び止める声など聞こえなかった。

後ろ手にドアを閉め、そのまま暫く立ち尽くしていた。葉月の前では我慢していた涙が、堰を切ったように溢れ出す。自分は涙と全く縁がないと思っていた慧だが、佑馬の死といい、つい先程の出来事といい、最近の私は泣き過ぎだなど、泣き顔の中に自嘲の笑みを浮かべた。

（まったく。今までの私はこうじゃなかった。弱くなったもんだ）

顔は笑っているのに、涙は止まらなかった。慧にとって周りは皆敵に見えた。同年代の他の女性と比べ、遙かに強い精神力を持っていた彼女でさえ、つい先程身に起きた出来事は、重くのしかかって

いる。一体どこで歯車が狂ってしまったのだろうか？ 一段落して、大きく一度涙はなをすすると、袖で涙を拭った。

慧はこのとき、二つの決心を固めていた。高校を卒業したら家を出よう。そして……。

髪を切るう。

7

小宮はその日、救急車で運ばれたが、翌日には戻ってきた。生々しい傷が顔中に目立った。絆創膏が数ヶ所に貼られている。

彼は慧を襲った日のことは、臆気だが覚えていようだった。息子を失った悲しさに耐えきれず酒を呷っているうちに、度を過ぎてしまい、わからなくなってしまうのだ。葉月は彼を問い質したが、彼は言いがかりだと否定した。真実を知るものは、他に慧しかいない。彼が事実をねじ曲げると、慧に味方は誰もいなくなる。もともと小宮側についていた葉月も、彼をあつさり信じ、悪者は慧一人になって孤立してしまった。

小宮は外見以外、以前と何も変わらないが妙によそよそしくなった。彼にしても、本心を慧に知られてしまったのが気まづくなったのだらう。慧もそれまでと同じような接し方をしなくなった。口も一切きかなくなり、冷戦状態であった。

酔って彼女に言ったことはすべて本音に違いない。たとえ普段は優しく振る舞っていても、酒によって炙り出された言動に嘘はない。人間の腹の中に潜む悪意が、慧にはとてつもなく不気味だった。なぜ率直に気持ちを表せないのか。しかし、それは慧自身にも言えることであった。幼い頃から女らしくさせなかつた葉月に、不満がないはずがなかつた。だが、それを強く抑え込み、自分をひた隠しにしてきた彼女は、自分も似たようなものだと思えた。

とにかく一人になりたい。もうこの家にはいられない、いたくない。という思いが錯綜していた。

数日後、検査のために入院していた祥吾が退院することになった。どこにも異常は見受けられなかった。葉月と小宮は揃って病院へ迎えに行った。たった一人となった息子と対面したとき、葉月はこれまで失っていた感情が一度に吹き出るほど喜んだ。佑馬が死んだのはまるで悪夢だったかのように、彼を抱きしめていた。ましてや佑馬は祥吾と瓜二つだ。彼女が死んだ息子を重ね合わせるのは当然である。

祥吾が帰宅すると小宮もうつてかわって元気を取り戻した。痛々しい顔に笑みを漏らしている。佑馬を失った痛みはまだあるもの、それを祥吾で埋めているようだ。井川さんというベビシッターは解任された。あれだけ世話になった彼女なのだが、電話一本でその旨を伝えた母に不信感が募った。不信は猜疑に変わり、やがて毛嫌いするようになっていく。

慧は祥吾と接する気にはなれなかった。一步間違えれば、彼も佑馬のようにミンチにしていたかもしれないのに。どんな顔をして弟に触れ合えばよいのかわからなかった。そんな慧の気持ちを余所に彼は姉を慕っていた。慧を求めている風にも見えたが、そんな弟を彼女は敢えて避けていた。葉月と小宮が彼に話しかける声を遠くから聞くだけだった。

慧は長かった髪を切った。背中を中心辺りまでであった髪の毛だったが、伸ばし始める直前まで短くしたのだ。慧は女のように振る舞うことに抵抗を感じ始めていた。小宮に大怪我を負わせたとき、彼女の精神は男のそれだった。危害を及ぼす物は容赦なく排除する。そんな自分が女の格好をしたところで何だと言っただ、そう思ったのである。

理由はそれだけではなかった。小宮が変な気を起こしたのも、慧の外見に責任があると感じたのだ。女性らしくしたことが原因であるな目に遭うのならば、女でなくていい。

(私は女に相応しくない……)

そんな様々な思いが入り乱れ、女としての彼女に疑問を抱かざる

を得なくなってしまうた。

まずその第一歩として、女性の象徴である長い髪を手放す気になったのだ。

美容院に行き、髪を短く切ってくれと注文すると、美容師は驚き、躊躇していた。無理もないだろう。それほど慧の髪は艶やかで綺麗だった。鋏を入れる直前まで「本当にいいんですか？」と何度も訊かれた。

ようやく最初の一束が慧の元から離れると、美容師も吹っ切れたらしく、手際よく髪を切っていった。耳が出るまで短くなると「短いのもお似合いですよ」と付け加えてくれた。

嫌な思い出の染み付いた髪ともお別れだ。切った髪の毛と共に、重い気分も少しは晴れた。久しぶりに軽くなった頭を風が通り抜ける。懐かしい感触だ。やはり自分にはこの方が合っていると思った。憧れだったロングヘアも経験出来たし、思い残すことは何も無い。

あとは、受験で何としても志望校に合格しなければならぬ。少し前まで第一志望だった大学は、家から通えるところにあつた。慧はその大学を目指し、日々勉強に励んできた。しかしつい近頃、県外にある他の大学に進路を変更したのだ。理由は当然、家を出ていくためだ。それも合法的に。進学のために一人暮らしを始めるのであれば、誰も文句は言わない。

そのことを告げたとき、母は反対しなかった。では賛成したのかというと、そうでもなかった。もう興味などないと言わんばかりに無関心だったのだ。相変わらず祥吾を抱きながら、早く話を終わらせたいような態度だった。慧にとっては少々拍子抜けだったが、とやかく言われるよりはずっとマシだ。

葉月や小宮との生活は、慧にとって耐え難かったが、あと少しの辛抱だと自分に言い聞かせていた。彼女は確固たる信念と目標を持っていたので、その分勉強にも熱が入り、学力は大幅に上がっていた。慧の成績では第一志望校は合格圏内だった。担任の教師にもう一ランク上の学校を薦められた。その大学も遠く離れていたので、



軽い気持ちで了承した。要は家から出られればどこでもよかったのだ。

やがて年を越し、受験のシーズンが到来した。

受験生にとっては勝負の幕開けだ。センター試験に第二次試験。彼らにとっては心休まる暇もないだろう。慧も毎日部屋に閉じこもり、試験に臨んだ。

その甲斐あつて、彼女は受験した全ての学校に合格した。二年生の頃の成績では、とても考えられなかった大学でさえ見事受かったのだ。数校あるうち、彼女が行くと決めた大学は国立で、実家よりも七つほど県をまたがった所にあつた。校舎も綺麗だったし、周囲は学園都市として栄えている。

長かった受験も終わり、卒業まではただ平凡に過ごした。目標を達成し、その余韻に浸る毎日を送っていたのだ。高校の授業も全く無意味で、時間が過ぎるのはとても早く感じた。飛鳥たちや友人と過ごす機会も自然に増えていった。

飛鳥も県外の大学へ進学が決まっていたので、四月からは一人で生活することになっていた。お互い実家に帰ってきたら連絡を取って、一緒に遊ぼうと約束したが、慧は帰ってくるつもりは毛頭なかった。

卒業式を迎えると、あちこちで別れを惜しみ、また、友の新しい門出を祝福する姿が見える。慧も例外ではなかった。もう帰らないと決めていたので、高校時代のように、はしゃいだり遊んだりすることは再びないと判っていたのだ。彼女にとっては今生の別れと表現してもおかしくなかった。生涯の友になるであろう飛鳥たちとは、再会を誓い合つて別れた。もう二度と訪れることのない高校時代に別れを告げ、交差しない道をそれぞれ歩み出す。

慧は大学での住まい探しを一人でやつてのけた。さすがに現地まで行つて探すとすると時間と手間と金がかかるので、全国に支店が散らばっている大手不動産に依頼して決めた。早い時期から行動を起こしていたので、学校も近く、家賃も手頃な良い物件が見つかつ

た。

引越しは業者に頼んだ。引越し当日、慧は母とその夫に、形だけの別れの挨拶を済ませた。葉月は祥吾を抱きながら、相変わらず無関心であった。小宮に至ってはソファに座ったまま、慧の方を向こうともしない。酷く冷めた別れであったが、却って未練も残さず去って行けるものだ。

大学に入ってから、奨学金の援助を受けながら生活していた。人並みに勉強やバイトに精を出していたが、彼女はある部活に入らなかった。

キックボクシング部である。

精神的にすっかり弱くなってしまった自分を奮い立たせるため、また体力的にもさらに強くさせるべく始めたのだ。当初、部員として入部することに驚かれた。マネージャーで女性はいたのだが、実際にリングに上がる部員で女はいなかったのだ。しかし慧の強い要望で、一応入部は認められた。ただし、練習について行けなかったり、危険であると判断されたときには即、辞めるという条件付きだ。だがその気配りも無用に終わった。

幼少の頃から空手を習い、格闘技の基礎は充分出来ていた彼女は、初めて体験するキックボクシングにもすんなり馴染んでいた。強さへの渴望を心の奥底に秘めた慧は、人一倍練習熱心で、やがて男の上級生も手に余るほどの恐るべき腕前に成長した。

彼女はプロテストを勧められたが、全く興味を示さなかった。プロになってもならなくても、強さを追い求めることに変わりはないと考えていたからだ。方々ではプロにならないことが惜しまれていた。しかし、彼女はそんな声を脇に、ただひたすら練習に没頭した。しなやかでバネのある体はますます磨きがかかり、屈強な筋肉に覆われた体は非の打ち所がない。

大学四年にもなると、誰も彼女に敵う者はいなかった。部の監督やコーチですら、慧に試合で勝てるという保証はなかった。他校との交流試合でも、世界チャンプを狙えるほどの相手を一ラウンドで

KOさせ、周囲の度肝を抜いた。

慧はそれでも満足せず、強さを磨いた。強くなることが自分の存在意義だと思ったからだ。しかしそれは、心の弱さを肉体的な強くなることで誤魔化していただけなのかもしれない。もう二度と弱みを見せたりしないと慧は心に誓っていた。

その気持ちを胸にしまいつつ、二十七歳になる今日までいま過ごしてきたのだ。

## Open The Door ?

1

夏海<sup>なつみ</sup>・レイチエル・深山<sup>みやま</sup>は、わたしほどタイミングの悪い人間なんていないと思っていた。

彼女の心は海より深く、闇より暗く沈んでいた。

「一緒に日本へ行こう」

父の言葉はまさに青天の霹靂であった。夏海にとっては、突然の死刑宣告を受けたに等しい。それから日本へ行くまでの数週間は、さながら刑の執行を待つ服役囚の心境だった。

夏海は何かアメリカに留まろうと手を尽くしたが、その願いも虚しく、結果的にこの日本の地に降り立った。しばらくの間、彼女はここで暮らすのだ。憂鬱さで体重が四キロも減った。

夏海は雑踏の中を当てもなく歩いていた。時間は午後十時過ぎ。しかし辺りは昼間のように明るい。

(あの人はどこかにいるのかしら)

夏海が歩くと、擦れ違う人が次々に振り返る。そのほとんどが男性だが、中には女性でうっとり見とれている者もいる。夏海の外見がそうさせていたのだ。腰辺りまである真っ直ぐな髪の毛は、最近の日本人ですら珍しいほどの黒だ。まさに『碧の黒髪』と呼ぶに相応しい。しかし肌は透き通るように白く、張り艶がある。目鼻立ちはいくつきりと彫りが深く、どれも整っている。大きなグリーンの瞳に高い鼻、ぷつくらと張りがある唇に尖った顎。アメリカ人の血も立派に受け継いでいる。ミニスカートからすらりと伸びた足を惜し気もなく晒していた。

欧米人のような顔立ちに、日本人らしい髪の毛。両方の魅力を兼ね揃えた、一見ミスマツチな容姿が、彼女の美しさをより引き立てている。十七歳だと言っても、誰も信じはしないだろう。

男たちは夏海に興味津々だったが、誰も声をかけようとしなかった。美し過ぎて逆に恐れ多いのかもしれない。それに日本語がわかるのかどうかも不安のようだ。ただ指をくわえて、夏海が過ぎ去るのを見守っている。そのほどの高貴さと畏怖があった。

(つまらない国……)

夏海が日本に来てまだ十日ほどしか経っていない。その些細な間に彼女が目当たりにしたものは、愛想笑いと社交辞令、自己をなべく抑えた『生きているのに死んだ人間』の世界だった。

夏海が歩いているといつの間にか、その歩調に合わせて誰かがピツタリと横に並んでいた。彼女が振り向くと、髪をぴっちりセンター分けした、スーツ姿の若い男が満面の笑みを浮かべていた。いかにも水商売といった感じだ。しかし、顔はお世辞にもいいとは言えない。縦に長く、ほお骨が飛び出ている。『馬面』と呼ぶに相応しい。

「ドライブ行こうよ」

男はそれまでずっと一緒だったかのような口調で話しかけてきた。女の子を引っかける手口も様々あるものだ。勇気があるのか、ただの無鉄砲か、はたまた自分によっぽどの自信があるのかわからない。夏海は無視して前を向き直るが、男は離れようとしなかった。

歩道の1/3は、違法駐輪の自転車やバイクによって陣取られていた。その狭い歩道を大勢の人間が行き交っている。夏海は人混みに紛れて男を捲こうとした。しかし彼は人の間を器用にすり抜けてなおも夏海にまわりついてくる。

「その前に腹ごしらえもいいね。ちょっと早いけど、晩飯でも食ってからにしない？ 俺この近くでいい店知ってた。何でも好きなもの奢るからさ。寄って行こうよ」

勝手に行く決めてしまっている。図々しいこと甚だしいが、夏海は意に介さず歩を進める。

「君、ハーフ？ 何だかそんな感じがする。日本語わかる？ えっと、レッツゴートウディナーアンドドライブ」

彼は文法も発音も全くなっていない日本語英語で言った。夏海は相手に聞き取れない溜め息をついた。この国はろくでもない連中がやたらと目立つ。いや、こんな時間にこんなところにいる自分が悪いのか、そう思った。

男は何とか気を引こうと様々な話題を持ちかける。しかし夏海は日本語など通じないフリをしていた。やがて彼は、色白な肌にそぐわぬ夏海の黒髪に目を付けた。

「この髪黒く染めてんの？　きれいだね」

男の手が彼女の髪に触れた。

夏海は途端に足を止め、勢いよく振り返る。クワツと猛獣のように目を見開き、その手を激しく振り払った。男は後ろに数歩よろめいた。間髪入れず、持っていたショルダーバッグを大きく振り回す。バッグは男の顔面に直撃した。思いがけない攻撃を受けた彼は数歩よろめき、尻餅をついた。

男の鼻から一筋の血が流れ始める。彼はそれに気付かず、呆気にとられた表情をしていた。通行人たちが一斉に男を見下ろす。立ち止まって眺めている者、含み笑いを洩らす者など、共通していたのは彼が笑いものになっていただけだった。醜態を晒した男は慌てて立ち上がり、夏海に詰め寄った。

「何すんだこのアマ！」

先程までの猫撫で声はどこへやら、男は態度を豹変させて怒鳴り散らしている。鼻血が流れていることによくやく気付き、服の袖で拭った。鼻の頭は真っ赤になっている。フェミニズムは崩壊し、女であろうと容赦しない勢いだ。

男は夏海の前に立ちほだかった。身長は百六十五センチの夏海とほぼ同じか、夏海の方が少し高いくらいであった。

しかし、夏海はすぐにくるりと前を向き直り、元の方向へと歩き出そうとした。男がそれを黙って見過ごすはずがない。

「おい！　待てよ！」

彼の手が夏海の肩を掴んだ。

強引に自分の方へ向かせようとしたが、そうするまでもなく彼女は再び振り返った。行き場のなくなつた手が宙を舞い、男は体勢を崩している。夏海はすかさず、その上半身を思いつきり両手で突き飛ばす。文字通りの肩すかしを食らっていた彼は、再び地面に倒れた。運悪くそこにはバイクが停められており、大きなエンジンで後頭部をしたたかに打った。

彼は頭の後ろを両手で押さえ、少し前屈みになつた姿勢で動こうとしなかつた。

夏海は男の方へと向かつていく。傍らまで到達すると、無言で見下ろした。

何にも覆われていない彼女の足が、男のすぐ隣にあつた。男は痛さに耐えながらも突如視界に現れたなめらかな足に釘付けになつてゐる。

しかし男にとって、その光景を楽しむのはほんの些細な間だけであつた。

夏海は男が頭をぶつけたバイクに手をかけ、それを彼に向かつて容赦なく突き倒した。250CCの大きな車体だったが、スタンドの反対側へ力を掛ければ造作もなく倒すことが出来る。

男は自分に倒れかかるバイクに気付き、逃げようとしたが下半身が逃げ切れず、左足が下敷きになつてしまった。苦痛の雄叫びをあげる。精一杯バイクを押し退けようとするが、一度倒れてしまったバイクは簡単には持ち上げられない。そのうえ誰も手を貸そうとはしない。周りの人間は見て見ぬふりだ。美しい少女につきまとつた拳げ句、痛い目に遭つてしまった惨めな男。誰の目にもそう映つてゐるだろう。

彼は少しずつ車体を浮かせて体を引き抜こうとしている。憎悪と羞恥心の入り混じつた眼差しをときどき夏海に向けた。それを受けながら、夏海はゆっくりとその場を立ち去つた。

少し歩いた頃、

「覚えてやがれ！」

と遠くの方から聞こえてきた。

しばらく歩いて完全に一人きりになったとき、ふうつと一つ大きな溜め息をつく。

(やっぱりダメね)

父の母国とはいえ、こんな国に来たくはなかった。日本語は一応話せるが、行くと聞いた当初は嫌で堪らなかった。この時期の日本は春休みの少し手前だ。四月の新学期からは日本の学校に編入することが決まっている。

どうすれば行かずに済むかばかり考えていた。観光を楽しむ気など微塵もない。それほど夏海は日本人に強い嫌悪感を抱いていたのだ。

夏海にも日本人の血が半分流れているのだが、どうして日本人を毛嫌いするのか。

その理由は、彼女の幼少時代まで遡る。

2

夏海・レイチェル・深山。

その名前から推測できる通り、彼女は混血だ。日本人の父とアメリカ人の母を持つ。父は仕事の関係で十数年前よりアメリカに滞在しており、そこで看護師をしている母と出会い、結婚までに至ったのである。

父は仕事が軌道に乗るまで、アメリカと日本を何度か行き来しなければならなかった。もちろん家族も一緒であった。母は夏海を妊娠してから仕事を退職していた。夏海が一番古い日本の記憶は九歳のときのものだ。それより以前にも日本で過ごしたことはあるのだが、幼すぎて覚えていない。小学校四年から卒業するまで日本の学校に通っていた。

街を歩けば周囲の注目を集める、現在の姿からはとても想像出来ないが、夏海は以前ひどい肥満児であった。同じ年代の子の倍以上



は体重があつた。生まれてから数年、常に大量の贅肉と生活を共にしてきたのだ。おまけに当時夏海は歯に矯正器を付けていた。

日本の小学校にたった一人のハーフの子、超肥満児でさらには口ポットのような銀色の歯をしている。そんな夏海はクラスメートたちの格好の餌食となつた。友達も出来ず、毎日ひどく虐められていた。

悪口や仲間外れは日常茶飯事。物を隠されることもよくあつた。ひどいときには、机や教科書、彼女の洋服までに落書きをされた。下校途中には石をぶつけられたりもした。夏海を庇うものなど誰もいなかった。教師でさえ夏海には無関心だつたのだ。

アメリカの学校では友達もいたし、みんなとうまくやっていた。それなのに日本で学校に通い始めた途端にこの有様である。頼る人間は周りにおらず、夏海はたった一人で無人島に取り残された気分だつた。まだ無人島の方がよかつたかもしれない。夏海はいつも思つていた。どうしてわたしがこんな目に遭わなければいけないの？ 見た目が少し違うだけでこんなに迫害されるなんて。わたしだつて半分は日本人なのに。他の子と何が違つて言うの。

朝、登校途中に石を投げられるところから一日は始まり、夕方には靴を隠される。日本の子供は陰湿で容赦なかつた。日本人の習性とも言つべきであろうか、他人と大きく異なつた外見や行動は彼らの攻撃対象となる。そんな生活が約三年間、ほぼ毎日続いたのだ。

それだけではない。さらに夏海の日本嫌いに拍車を掛けた決定的な出来事が、彼女が十二歳、小学六年生のときに起こつたのである。その事件は彼女の心を谷底深くに突き落とした。二度と這い上がれないほど深く……。

幼い頃のトラウマが、彼女の反日感情を築き上げた。自分の中にも奴らと同じ民族の血が流れているかと思つと、体中の血液を絞り出したくなるほどだつた。

日本に行かずに済むなら手段は選ばない。そんな彼女がアメリカに留まるべく立てたある計画も、運悪く失敗に終わってしまった。

夏海にはユマという三つ下の妹がいる。彼女も姉に劣らない美しさだった。健康的な夏海とは対照的に、冷静で儂く、神々しい雰囲気を持った少女だった。しかし、彼女は外見からは想像もつかないほどしたたかな性格をしていた。ときどき突拍子のない行動をとって周りを驚かせる。姉である夏海さえも度肝を抜かれるほどであった。

ある夏の日、ユマは半袖を肩まで捲り、左の二の腕を得意げに見せた。

「ナツミ。どう、これ？ 格好いいでしょ」

そこには鮮やかなタトゥが彫られていた。黒い稲妻が何本も入り乱れ、それに混ざって茨の茎が混ざっていた。真ん中には太陽の炎が妖しげに揺らめいている。夏海は驚き、まじまじと見つめた。

「それ本物？ どうしたのよ。そんなもの入れちゃって」

「前からいいなって思ってたんだ。ジョンがしてるのと同じなんだよ」

ユマが熱狂してやまない、CALEケイルというバンドのヴォーカリスト兼ギタリストのジョン・マドセン。ユマはメンバーの中でも特に好きな彼と同じタトゥを自分にも施したのだ。彼女が十一歳の時だった。

昔から何かしでかす妹だと思っていたが、予想を遙かに上回っている。

「ふうん。なかなかいいじゃないの。そういうデザインはわたしも好きだな」

それを訊くとユマは胸を張って嬉しそうにしていた。

夏海は特に咎めたり叱ったりはしなかった。そんな妹だったが、別に不良でもなければ、ひねくれているわけでもない。ただ好奇心が旺盛で、思いついたら一直線に突き進んでしまうだけなのだ。

夏海は妹にこう訊いてみた。

「もしCALEがあんまり好きになくなっちゃったらどうするの？」

「そんなことあるわけないわ。解散しようが死んじゃおうが、彼ら

が存在して、あたしと同じ時間を過ごしてたことに変わりはないじやない。あたしは一生CALEを愛し続けるんだもの。これと共に人生歩いて行くのよ」

とユマはタトウを優しくさすっていた。

あれから三年、CALEは健在でユマも相変わらずファンを続けている。

手を焼かせる妹だったが、疎ましく思ったり不気味さを感じたこととはなかった。むしろ手の掛からない妹よりも愛おしいと思っていた。次はどんなことをしでかすのか楽しみになっていたくらいだ。

そんな妹の無鉄砲さが夏海にも影響したのかはわからない。先ほど述べた『ある計画』というのは、夏海が半ば自暴自棄になった末に行われたものだった。

日本に行くこと決定したとき、夏海は何とかしてアメリカに留まらないかと頭をひねった。これまで家族にあまり手を焼かせないようにしてきたつもりだったが、今度ばかりはそうはいかない。

ある日、夏海の頭に一つのアイデアが閃いた。テレビを見ていたときにヒントを思い付いたのだ。他にもっといい考えがあったのかもしれないが、そのときの彼女は、これしかない信じ込んでいた。

夏海の祖父母は、アメリカ大陸の中央から少し北西に位置するネブラスカ州の大地主である。クリフ・マツゴーエンと言えば名の知れた富豪だ。八万エーカーを超える土地を持ち、豪華な暮らしを送っている。彼の娘である夏海の母や、孫の夏海たちは何一つ不自由なく育ってきた。

一緒に住んではいなかったが、家もさほど離れていなかった。週末にはよく遊びに行ったものだった。祖父母はいつも夏海たちを優しくもてなしてくれた。行ったときは必ずと言っていいほど祖母お手製のローストビーフを振る舞ってくれる。これがまた絶品なのだ。表面が絶妙な程度で焼かれ、内側のジューシーな肉汁を余すところなく封じ込めている。さらにこんがり網の目に付いた焼き

色が食欲をそそった。そして自家製ソースは肉の味を最大限に引き立ててくれる。祖母自慢のローストビーフは夏海とユマにとって何よりも大好物だった。しかし、それは数年前までの話だ。夏海はある事件がきっかけで、ローストビーフはおろか、全ての肉類という肉類が食べられなくなってしまった。それでも夏海のために新しいメニューを考えて御馳走してくれたり、祖父母は夏海たち姉妹にとっても優しくかった。

日本に行く直前に祖父母の家を訊ねたとき、夏海は祖父の書斎にこっそり忍び込んだ。

目的はその部屋にあるものを手に入れるためだ。

祖父クリフ・マツゴーエンはガンコレクターでもあった。古今東西あらゆるピストルを収集している。小型小銃から対戦車用マグナムまで種類は様々だ。ピストル専用の書斎まで持っているほどの懲りようだった。彼は時々その銃たちを取り出し、眺めながらの手入れを趣味としていた。

約40?の部屋の中央には大きなガラスのショーケースがあり、四方の壁は何十丁もの銃が飾られていた。夏海は壁に掛かっている手頃な一つを取ってみた。ずっしりと重く手にのしかかる。

彼女は幼い頃から祖父の趣味を見ていた。彼の膝の上で手入れの様子に目を注いでいると、光沢を放ったピストルたちはとても魅力的で、祖父が惹かれる気持ちもわかった気がした。弾は全て抜いてあったので危険はない。夏海も何度か触ったことがあるが、祖父はあまりいい顔はしなかった。目に入れても痛くない孫が銃に慣れ親しむのは忍びなかったのだろう。祖父は夏海に銃の恐ろしさも共に説き聞かせた。

興味はあるのだが踏み込んでほしくない領域だと、そのときから夏海は感じていたのだ。

手に取った銃を元あった場所へ戻す。

よく出入りしていた書斎だが、どこにどんな銃があるのか把握していない。

試しに角に置かれた引き出しを空けてみる。夏海が両手をいっばいに広げたよりも大きな幅の引き出しだ。相当重たかったが、一度動き出すとするすると難なく全開した。中には赤い布が敷かれ、上にはたくさんのピストルが同じ向きで等間隔に並べてあった。祖父の几帳面な性格が滲み出ているようだ。

夏海は引き出しを閉じた。一つ拝借するなら、やはり目立たない場所に置いてある方がよい。

他にどこかいい場所がないかと部屋を見渡す。

一番下の引き出しを空けた。そこにも多くのピストルが規則正しく並べてある。しかし黒光りする銃の中に一つ、銃身にシリンダー、グリップまでもが全て汚れのない真っ白のリボルバーが目に入った。それはまるで、鳥の群れの中を優雅に羽ばたく一羽の白鳥のようであった。純白のピストルは夏海を魅了した。自然に手が向かっていく。二十二口径でかなり小型の銃だった。夏海の手にもぴつたりとフィットする。先程手にした銃よりはずっと軽く感じられた。しかしやはりピストルには変わらない。

これだ。

運命的な出会いを果たした気がした。

他にも何十何百というピストルがあったが、その白いリボルバー以外は考えられなかったのだ。

(ごめんね。グランパ)

夏海は心の中で一言告げ、それをズボンの間に挟んだ。

数日後、夏海とユマを乗せた車は空港へと向かっていた。

二人は後部座席に並んで座っている。会話はない。

運転しているのは彼女たちの父親、深山敬三だ。

マツゴーエン夫妻の愛娘であるローレンを見事に射止め、妻として迎えた。世間から見れば逆玉だと思われがちだがそうではない。

マツゴーエンは以前から深山の才能に一目置いていたため、当時まだ資金繰りに頭を悩めていた彼に援助を申し出た。しかし深山はそ

の話を下重に断った。自分の力だけでその逆境を乗り越えたいと強く主張したのだ。それによってマツゴーエンは気分を害するどころか、彼のストイックな態度にますます好感を持った。彼は深山の意志を尊重し、ただ見守るだけに徹した。努力の甲斐があつて深山は順調に業績を伸ばし、その勢いは目を見張るものがあつた。その功績はマツゴーエンにとつても喜ばしかつた。彼は喜んで娘をその日本人に嫁がせたのだ。

夏海とユマの母親でもあるローレンは看護師だつた。結婚当初もしばらくは看護師の仕事をしていたのだが、夏海を妊娠したのをきっかけを退職した。アメリカと日本を行き来する夫の希望でもあり、またローレン自身も子育てに専念したいという気持ちもあつたのとだつた。

しかし夏海が十二歳のときに事件があり、一家はアメリカに戻つた。夏海の状態はひどいものであり、元看護師のローレンでさえ手に余つた。完治するのに約二年かかつた。そんな夏海の様子を目の当たりにしていた彼女は、再び看護師の道を歩もうと決意したのだ。夏海が病から立ち直る頃にはユマももう中学生になり、二人も手の掛かる心配はない。ローレンは看護師に復帰した。十数年のブランクがあつたが、とてもそうは思えないほど見事に仕事をこなしていった。

そんな母のローレンが半年前、災害復興の支援として南アジアのある国に派遣されていった。期間は一年間。その二ヶ月後、今度は父の深山敬三が仕事の関係で日本に飛ぶことになつたのだ。

夏海は父の知らせを聞いたとき絶望した。どうしてよりによって二人が同時期にアメリカを離れなければならないんだ、何てタイミングが悪いんだろうと。もし父と母のどちらかに付いて行くと言つても、支援のために南アジアにいる母に、さらに自分の子供たちの世話までさせるわけにはいかない。残つた選択肢はただ一つ、父と共に日本へ行くことだ。アメリカの祖父母の元で生活するという案もあつたが、子供のことで祖父母に迷惑はかけられないという深山

の考えでそれは却下された。

夏海はいつも心の中で思っていた。

(神様、どうしてわたしにだけいつもこんな意地悪をするんですか)

二人を乗せた車は順調に空港までの道のりを進んでいく。

「パパ。わたし日本なんかに行きたくない」

夏海が重い口を開いた。

「それについてはもう何度も話したろう。たった半年かそこらの辛抱だ。何も心配はいらない。日本は治安も人もいいところだから」

深山はバツクミラー越しに娘の顔をときどき見ながら言った。

「嘘。日本なんて心ない奴らの集まりよ」

「おや、それじゃパパもその一人なのかい？」

「パパは違うわ。もうずっとアメリカに住んで生活してるんだもの。汚れた日本の臭いなんかとつくに薄れて消えちゃってるわ」

夏海は大儀そうに言葉を吐き出す。父は少し苦笑いをした。

「お前が辛い思いをして日本を嫌う気持ちはよくわかるが、そんな悪い人たちばかりじゃないよ」

「辛いなんて生やさしいわ。わたしがどれだけ苦痛の毎日を送っていたか。あのクソ頭にくるクソどものお陰で」

「夏海。汚い言葉は慎みなさい」夏海がそれまで幾度となく父に注意されたことだった。「とにかく、お前もあの頃とは変わったんだからもう虐められることはないさ。それどころか、あっちじゃ人気者になるぞ。日本人はアメリカに特に関心があるんだからな」

何度も繰り返し返された押し問答だ。こんな討論が続けていたところで何も変わりはない。夏海は諦め、口をつぐんだ。

「グランパやグランマと一緒に住んだらいけないの？」

ユマがバツクシートからちょこんと身を乗り出して父に話し掛ける。

彼女は夏海のように日本に対する嫌悪感はないのだが、姉思いが高じて同じように日本行きに理由もなく躊躇していた。

「ユマ。グランパたちも忙しい身なんだよ。いきなり何ヶ月もおまえたちの面倒を見てくださいって言われても、そう簡単にはいかないんだ。彼らにも彼らの生活があるんだから。わかってくれるね」  
父は穏やかに説き伏せた。

「日本に着いたらパパの妹が迎えに来てくれるから心配はいらないよ」

「妹って富美代ふみよ叔母さんのこと？」ユマが記憶をたぐりながら言った。

「そうだ。彼女も二人に会えるのを楽しみにしてたぞ」

再び沈黙を乗せ車は走る。彼は仕事の整理が残っているので、夏海たちより少し遅れて日本へ発つことになっていた。その日は彼女たちの見送りのためにこうして車を走らせているのだ。

やがて空港の目の前に停車し、三人はトランクに入っていた荷物を運び出す。

二人の手荷物はさほど大きくない。スーツケースとショルダーバッグが一つずつある程度だ。

人はあまり多くなかった。この時期で平日ということもあってか、チエックインもスムーズに終わった。

手続きを終え、夏海たちは搭乗券と荷物の引換証を受け取った。

出発まであと一時間ほどある。

父とはここでお別れだ。彼は二人の頭に手を乗せ、優しく撫でた。  
「パパも来週には行くから。叔母さんに迷惑掛けないように、いい子にして待っているんだよ」

「うん。わかった」

「さあ。それじゃ行きなさい」

彼は娘たちの背中を軽く押した。

夏海たちの先には、意外と小ぢんまりした金属探知器のゲートと、数人の屈強な警備員たちが並んでいた。

……もう後戻りは出来ない。



夏海は思った。成功すれば日本に行かなくても済むだろうが、いつも優しい父にはかつてないほど大目玉を喰らうに違いない。と言うのも、夏海の上着の内ポケットには祖父の書斎から失敬したピストルが入っていたからなのだ。小さい銃なので、胸の膨らみと大して相違ない。

そのままの状態で空港のセキュリティチェックを受けたらどうなるか。結果は目に見えている。

逮捕とはいかないまでも、夏海の搭乗はもちろん取り消しになるはずだ。その結果、夏海たちの日本行きは白紙に戻され、それまで通りアメリカでの生活を続ける。彼女の筋書きはそうだった。

リスクは大きいが、日本に行くことに比べたらなんでもない。どうせなら皆を困らせてやれと、夏海が切羽詰まった拳げ句に考えついた苦肉の策だったのだ。

自分の順番が次第に近付いてくる。判りきっているが、やはり心臓の高鳴りは止められない。

あと三人。

ロビーへ振り向くと、父がポケットに手をつ込んで立っている。彼は娘の視線に気付くと微笑んで手を挙げた。ユマがそれに応えて手を振り返す。しかし夏海にとってはそれどころでない。

あと二人。

背の高い髭もじやの白人男性がゲートを通る。

甲高い音が辺りに響いた。夏海の体がビクツと震える。

警備員たちがその男性に駆け寄り、服の中を隅々までチェックしている。

ズボンのポケットから鉄製のシガレットケースとライターが出てきた。警備員の一人がそれを預かる。男性は促されてもう一度探知機をくぐるが、今度は何の反応もない。

(あんな小さなものでも引っかかるのね)

夏海は少し感心していた。しかし後ほんの僅かで、自分もあの男

と同じ運命を辿ることになるのだ。

男性はシガレットケースとライターを受け取ると、元あった場所に収めた。そして何事もなかったかのように行ってしまった。

あと一人。

目の前にいた初老の男性も滞りなく金属探知器をくぐり抜ける。

次は夏海の番だ。

手に持っていたバッグをベルトコンベアに乗せる。その先はX線検査機だ。彼女は重い足を踏み出した。一歩進んでしまえば、あとは自然に足が前に出てくる。

探知機に差し掛かった。

心臓の鼓動が最高潮に達する。自分でも知らないうちに息を止めていた。

夏海の体が探知機を通り抜ける。

しかし、何の音も鳴らない。

(……！)

彼女は驚き、振り返った。

すぐ後ろにユマがいた。彼女も無事に通過し、姉の後を付いてきていたのだ。

「どうしたの？」

ユマは夏海の計画について何も知らない。突然立ち止まり振り向いた姉を、大きな瞳で不思議そうに見つめている。

「え……いや、ううん、何でもない」

平静を装い、夏海は再び歩き出した。X線検査機を抜けて流れてきたバッグを受け取り、先へ進んだ。胸ポケットに収まっている銃を服の上から確かめる。彼女は狐につままれたようだった。

(確かに入っている……。どうして通れたの)

信じられない思いが彼女の頭の中をぐるぐる回っている。あらゆる可能性を考えてみた。

(どうなってるのよ。探知機が壊れていたのかしら。でもさっきの男の人のときはちゃんと動いていた。だったらこの銃に問題が……)。

もしかしてニセモノ？ いや、だとするとなぜグランパのコレクションの中にあっただんだろ。本物と一緒に。彼がニセモノなんか集めているわけないし……)

「ナツミ。パパが手を振っているわよ」

そこで不意に夏海の考えは打ち切られた。ユマが袖を引っ張っている。物思いにふけりながら歩いていたので気付かなかったが、出国審査カウンターは目の前である。

遙か向こうに両手を大きく仰いでいる父の姿があった。妹は背伸びをしながら手を振り返している。夏海も思い出したように高々と手を挙げた。

しばらくの間、二人は立ち止まって手を振り続けた。夏海はまさか無事に飛行機に乗れるとは思っていなかったので戸惑っている。手を下ろし、荷物を再び持ち上げると

「行こうか」

夏海は半ば諦めた調子で言った。

3

飛行機は予定通りに出航した。二人はビジネスクラスのシートに並んで座っている。

水平飛行に移り、シートベルト着用のサインが消えた。

大きな息をつくとき、夏海は再び胸に手をやった。銃を直接確かめたかったが、飛行機の中で出すわけにもいかず、空港で起きた出来事にただ頭を悩めているだけだった。

ユマは隣で、持ってきたノートパソコンに熱中していた。CALL Eのサイトでも覗いているのである。タッチパッドを這う指が器用に動いている。

反対側には窓がある。飛行機はもう既に雲の遙か上で、果てしない青空が広がっていた。

(もう日本行きの飛行機に乗っているのね。はあ。こんなおって信

じられない。どうしてわたしたちが日本になんて行かなきゃいけないのよ。グランパのピストルだって役に立たなかったし。みんなしてわたしたちを騙してるんじゃないでしょうね？ パパもママも、空港の人たちも……）」

有り得ない考えが頭をよぎるがすぐに打ち消す。

（そんなわけないわね……。夢でも見てるみたい。本当に夢ならどんなにいいか……）」

窓の外に目をやり、自分の真横に流れる雲を眺めていると次第に睡魔が襲い始める。隣を見るとユマは静かな寝息をたてていた。キーボードの上に両手が乗せられたままになっている。夏海は彼女の手をそっと下ろしてやる。パソコンのディスプレイも閉じた。前を向き直りしばらくすると、緊張がほどけたのか夏海もいつの間にか眠ってしまった。

アメリカを出発したのが午前十一時半、飛行機は約十二時間で目的地に到着した。日本時間だと午後三時前だ。長い旅だったはずなのだが、あまり時間が経っていないような感覚だ。

二人は飛行機を降り、入国審査もすんなり通過した。出迎えの人が大勢いた。名前の書いてある大きな紙を降りた客に向けているのがあちこちで見えた。きつと出迎えの人だ。夏海が見るともなしに歩いていると、自分たちの名前を見付けた。一度通り過ぎた目が後戻りする。

間違いない。『NATSUMI & YUMMA』の文字が見える。誰が持っているのかと思い、視線を上げると、四十代くらいの人のよさそうな女性がいた。

父の妹、つまり夏海たちの叔母にあたるその女性は、夏海たちの姿を認めると、持っていた紙を高く掲げて見せた。

「富美代叔母さん」

彼女と会うのは数年ぶりだ。

「夏海ちゃん、ユマちゃん。よく来たわね。疲れたでしょう」

「うっん。ずっと寝てたから。わざわざ来てくれたんだ」

会うまでは忘れていた彼女の記憶が波のように押し寄せた。

「兄さんが来るまでにあなたたちの面倒を見させてって頼んだの。やっぱりいろいろ上手が違うでしょうから」

「叔母さんの家に住むの？」

ユマが嬉しそうに話している。夏海と違って嫌な思い出のない彼女は、やはり日本の地を踏んで心が弾んでいるようだ。

「そうよ。部屋も余っているし。女の一人暮らしはいろいろと寂しいから大歓迎よ」

富美代は若くして結婚したのだが、すぐに離婚してしまった。まだ四十そこそこの彼女だが、成人した一人息子がいる。彼はすでに独立して生活している。叔母にしてみれば二十数年ぶりに結婚前の独身生活に戻ったわけだ。寂しい気持ちも当然かもしれない。

「それにしても大きくなったわね。私なんて超しちゃってるじゃない」

確かに叔母は前より小さくなったと夏海は思った。しかも前にはなかった皺が笑うと目立つ。

「夏海ちゃんも綺麗になつて。昔の面影なんて全然ないわね」

太っていた頃の彼女を知る叔母は驚きを隠せずに言った。

「さあ、それじゃ行きましようか。外に車を停めているから。私の家まで送るわ」

富美代はユマの鞆を持ちながら言った。

空港を一步出ると、少し弱まった寒気が体を吹き抜けた。夏海とユマは揃って身震いすると上着の前を覆い隠して閉める。三月中旬とは言え、まだ日本の寒さは続いているようだ。

排気ガスとアスファルトの入り混じった異国の匂い。それは夏海の思いとはうらはらにどこか懐かしい気持ちすら思い起こさせた。

見渡せば多くのビルディングが並んでいるが、アメリカと違って無機質に見えた。道行く人々も小さく感じられた。アメリカ人とは体格が違い過ぎるので無理もない。日本人がこうして集団で歩いて

いるのを見るだけで嫌悪感に襲われた夏海だったが、もう少ししたら慣れると自分に言い聞かせた。

富美代の車がやってきた。国産でなかなかの高級車である。荷物を積み込むと、助手席にユマが座り、後部座席には夏海が一人で座った。

シートベルトを締めたことを確認してから富美代は右にウインカーを出し、車の流れに加わった。

「前に日本に来たこと覚えてる？」

富美代が訊いた。しかしその瞬間夏海の表情が曇る。富美代はそれをバツクミラー越しに感じ取ったのか、すぐさま話題をすり替えた。

「この辺りもここ三、四年で大分変わったのよ。住んでる私ですらついて行けないくらい目まぐるしく発展してるの」

「へえ、そうなんだ。何が出来るのか楽しみになってくるね」

「女の子向けのショップとかもいっぱいあるから、ユマちゃんたちも行ってみたら？」

「わあ、楽しみ。ね、ナツミ」

アメリカを発つ前の懸念はどこへやら、ユマは日本での生活への希望を見出している。夏海はそんな妹に腹を立てたり、不快感を抱くこともなく「そうね」と軽く微笑んだ。ユマも自分と同じ気持ちである必要はない。

夏海は背もたれに深く体を預け、窓の外を眺める。

茶色の髪をした人が大幅に増えたようだが、ときどき見掛ける日本語の看板や、パチンコ屋の毒々しいネオンを目の当たりにすると、やっぱり日本に来てしまったんだなと思う。

妹のユマとは正反対に、沈んだ気分は募るばかりであった。

都心を抜け、静かな住宅街を数分進むと、富美代の住むマンションに到着した。

十五階建ての豪華なマンションだ。

「私はまだ仕事があるから行くけど、部屋で適当に寛いでいいわよ。八〇一号だから」

富美代は車のキーと一緒に束ねてあったキーホルダーから部屋の鍵だけを取り外すと夏海に持たせた。

「うん、ありがとう」

夏海は礼を言つと、車を降りた。

「七時過ぎくらいには帰れると思うから。そしたら一緒にご飯を食べに行きましょう」

富美代は腕時計を確認し、外の二人に向かって声を張った。

「また後でね」

夏海は軽く手を振る。隣ではユマが両手を振っていた。

車が走り去ると二人は荷物を持って中に向かった。

玄関を入ると右手にポストが、その奥にもう一つガラス張りの両開きドアがある。ポストの横にはテレビ付きインターホンと、電話と同じ並びのプッシュボタンがあった。マンションに客が来ると、まずここで部屋番号を入力してコールし、住民の確認が取れば玄関のロックを外してもらえするというシステムだ。これだと不審人物が中に入る危険もない。さらに、ドアの左斜め上からは監視カメラが見張っている。

玄関は部屋の鍵で開けられる。夏海は富美代から受け取ったキーを差し込んだ。鍵は電子キーとなっており、差し込むだけで解錠可能だ。モーターの回る音が聞こえ、カチャリと鍵が外れた。

ドアを開いて中に入る。再び閉まったドアは自動的に施錠された。少し進むとエレベーターに行き当たる。夏海はボタンを押した。エレベーターは九階にあり、降りてくるのにしばらく時間がかかりそうだ。

二人は周囲を見回した。外観は見かけ倒しではなく、内部も豪華な造りだ。バロック調で、アイボリーに統一された壁と柱は、シンブルながら格調高い。床のタイルは、大理石柄の市松模様で、鏡のようにぴかぴかに磨かれている。歩くのに気を遣うほどだ。他に人

の気配はない。

「すごいね。何だか美術館みたい」

ユマが率直な感想を洩らす。アメリカの家も人並み以上に裕福だったが、そんな彼女でさえこの驚きようだ。

「ナツミ、見て見て」

そう言ってユマはエレベーターの反対側を指差した。そこにはソファとテーブルが置かれ、ロビーの役割を果たしている。彼女は小走りでソファの方に駆け寄り、どかっと勢いよく座った。反動で宙に足が浮く。

「へえ。こんなのもあるんだ。普通のホテルよりいいじゃない」

両手でソファの柔らかさを確かめていた。夏海もそちらに向かう。スカートを片手で押さえながらユマの隣に並んで腰掛けた。

「叔母さん、かなりいいところに住んでるんだ」

「さすがパパの妹。仕事もかなりうまくいってるようね」

一階に住居スペースはなく、ロビーと管理人室、壁を挟んで駐車場があるだけだ。彼女たちの話し声はさほど大きくないのに一階全体に響いていた。

そのとき、エレベーターの到着を告げるチャイムが鳴った。

「あつ。ユマ、来たよ」

夏海は言うより早く立ち上がり、ユマの手を引いた。

加速は緩やかだが高速で上ったエレベーターを後に、部屋番号を順番に辿っていく。八〇一号室は一番奥で非常口の手前であった。

電子キーを差し込んで鍵を外し、ドアを開くと、中からふわつとやさしい花の香りが溢れてきた。玄関に花が飾られているのだ。靴箱の上にプランターがあり、黄色の花が生い茂っている。

靴は綺麗に揃えてあった。ハイヒールにパンプスがところ狭しと並べられ、靴箱にもいっぱいになっている。電気のスイッチを入れるとオレンジのライトに照らされた。

「ナツミ、靴を脱がなきゃ。ここは日本なんだから」

後ろからユマが呼び止める。いつもの調子で部屋に上がり込んで



いたが、ここは日本なのをすっかり忘れていた。土足は厳禁だった。スニーカーを脱いできちんと揃えようと、二人は物珍しそうに見回しながら部屋を順に覗いていった。

玄関の隣にあるのはバスルームだ。戸を開けて風通りをよくしてある。少し中を見たが、奥行きも広くかなり大きな造りだった。

隣には清潔感溢れるトイレがあり、その正面には収納スペースがあった。

格子状にガラスが嵌められたドアを開くと、そこはリビング兼ダイニングであった。

対面式のキッチンからは部屋の隅まで見渡せる。調理器具や調味料は充分過ぎる一式が揃えられていた。

リビングにはソファとテーブルが置かれ、その空間に相応しく、四十二型プラズマテレビが主役のように部屋に据え付けられていた。

カーテンを開けると、街が一望できた。

アメリカと比べ、何と貧相な色彩だろうと夏海は思った。所々に違った色が見えるけれども、ほとんどが曖昧な日本人に相応しいグレーである。『コンクリートジャングル』という通り名もあながち大袈裟な言い回しでもない。

カーテンを閉じ、二人は踵を返す。

寝室を覗いてみると、大きなセミダブルベッドが置いてあった。

その日は急いでいたはずなのにベッドメーカーキングは完璧にしてある。

夏海とユマは揃って豪華なベッドにダイブした。

二人の体が一度大きく羽毛布団に飲み込まれ、トランポリンのように弾き返される。

「Ouchh! (痛っ!)」

夏海はそのままの体勢で体を屈めた。スプリングによってまだ若干揺れている。ユマは布団に埋めた顔を上げた。「どうしたの?」と起きあがり夏海の様子をうかがう。

しかし夏海は「痛たたた……」と呟いたままで、反応しない。

「ナツミったら、ねえって」

ユマは姉の肩を揺さぶった。そして心配そうに顔をのぞき込む。やがて夏海は胸を押さえながら体を起こした。目にはうっすら涙が浮かんでいる。

「ああ、痛かった。もう、すっかり忘れてたわよ」

上着の内ポケットから純白の二十二口径リボルバーを取り出し、ベッドの上に放り投げた。

「グランパのピストルじゃない！ どうしたの、コレ？」

ユマはその銃を知っているようだった。驚きながらもワクワクした声で、目を丸くして訊いてくる。

「それがもう訳わかんなくてさ」

夏海は自分が立てたプランを話した。

一歩間違えれば警察の厄介になりかねない計画の全貌を、ユマは目を白黒させて聞き入っていた。

話が終わると、ユマは大きく「へえ」と洩らし、ベッドに無造作に放られたピストルに目をやった。

「そんなことしてたんだ。捕まっちゃったらどうするの」

「捕まってもいいから日本なんかに来たくなかったのよ」

ユマは日本ではしゃいでいたことに少し後ろめたさを感じたのか、

「そっか……」と呟いた。

「ナツミにはいろいろあったからね。その気持ちわからなくはないけど、もし捕まったら、あたし一人で日本まで来ることになったかもしれないじゃない。そんなの心細くって耐えられないよ」

「……そっかもね。自分ばかりでユマのことは考えてなかった。ごめんね」

そう言いながら夏海は妹の髪を撫でた。

「ううん、いいよ。でも今度何かするときは秘密にしないでよね」

「よく言っわよ。いつもユマは自分勝手に何でもしちゃうくせに」

「あーっ、ひどーい」

ユマは頬を膨らませて抗議した。夏海は笑いながら、

「わかってるわよ。これからはちゃんと言うから」

と妹を抱きしめた。細くて華奢な体は少し力を加えると折れてしまいそうだ。体を離すと、ユマは突然目を輝かせ始めた。

「でもさ、運良くピストルを持ってこられてラッキーじゃない。日本って最近すごく物騒らしいよ。ちよつとモメたくらいですぐに刺されちゃうんだって。護身用にピストル持つてるくらいどうってことないよ。日本で言う『禍を転じて福となす』ってやつ。使い方違ったっけ」

「そんなの知らないわよ。でもコレ、弾がないの。探したんだけど、グランパがどこかに隠してるみたいでさ」

「そっか、残念だね。だけど、持つてるだけで威嚇出来るんじゃない？ 弾が入ってるかどうか相手はわかんないんだし」

「ダメよ。普段から全然銃に面識ない生活してるんだもの、日本人は。おもちゃだと思われるに決まってるわ。そうでなくてもこの見た目でしょ」

確かに手の平サイズで純白のリボルバーは、見た目に関しては到底ピストルと呼べる代物ではない。

「あーあ、これが日本で言う『宝の持ち腐れ』ってやつかあ」

「何よ。さつきから コトワザ なんか使っちゃって」

「へへ、飛行機の中で覚えたんだ。やっぱりこれから住むにはコトワザの一つや二つ知つとかないと。『郷に入つては郷に従え』ってね」

「ちよつとやめてよ。もうすぐにアメリカに帰るんだからどうでもいいじゃない」

「長くいるかもしれないってパパ言ってたよ。もしかしたら一年かそれくらい」

「冗談じゃない。そんなにいたら頭がどうにかなっちゃうわ」

「もう来ちゃったんだから仕方がないじゃない。それよりこれからどう過ごすかを考えた方がもつと楽しめると思うよ。『住めば都』って言うしね」

もう夏海には返す言葉もなかった。「あー、わかったわかった」

と適当に相槌を打って話を切り替えることにした。

「それにしても、どうして金属探知機にひっかからなかったんだろ  
う」

夏海は再びピストルに目を戻し、数時間前からずっと気に掛かっ  
ていたことを口にする。

「だって金属じゃないもん」

「えっ？」

いとも簡単に、ユマはその疑問に対する答えを導いた。

「どっいうことよ。やっぱりおもちゃなの？」

「違うわよ。ちゃんと弾も出るし、もちろん人だって殺せる。でも  
銃自体に金属は全然使われてないんだ。……えっと、硬質プラステ  
ィックだったかな、ビリヤードの玉なんかによく似た素材で出来て  
るんだって」

ユマは天井を見上げ、記憶を探りながら言った。

「何でそんなこと知ってるのよ」

「あたしもグランパの部屋にはよく行ってたもん。そのピストルも  
見たことあるわ。密輸したり、殺し屋が厳重警備の場に持ち込める  
ように作ったものを、グランパが特別に手に入れたみたいだよ」

犯罪者や殺し屋が御用達のピストルを 特別に 手に入れられる  
なんて、一体祖父にはどんなコネクションがあるのだろうか。

「そうだったの……」

夏海は謎が解けてスッキリしたような、だが自分の詰め甘さに  
落胆したような複雑な気持ちを抱いた。

前からベッドに倒れ込み、大きな溜め息を一つ漏らす。

「なんか疲れちゃった」

そんな言葉が夏海の口をついて出た。長旅に加え、アメリカを出  
発する直前には極度の緊張に縛られ、飛行機に乗ってからは日本で  
生活することへの不安に囚われていた。

ユマもベッドに身体を預ける。二人が並んで寝転がってもまだ余  
裕があるほど大きなベッドだ。

「あたしも疲れた。お風呂にでも入る？」  
体と気持ちをリフレッシュさせようとユマが提案した。

バスルームはマンションのものとは思えぬ豪華なものであった。大理石模様の大きな浴槽の周りには、濃い赤茶色のタイルがグラデーション模様敷き詰められていた。片隅にきちんと整頓されているシャンプーや石鹸は高級品ばかりだ。残り香がほのかに鼻をかすめる。室内には湯垢の一つ、髪の毛の一本も見当たらない。

湯気が立ち籠める浴室の中で、夏海はユマの背中を流していた。ユマの細く柔らかな体に少し膨らみ始めた胸、透き通るような肌にしたたる水滴は、蓮の葉に落ちた朝露のように玉となって流れた。未成熟な美しい体だが、左の二の腕には鮮やかなタトゥーが彫られている。そこだけが異質なものに感じられた。

「ありがと。今度はナツミの番よ」  
入れ替わって椅子に座り、ユマに背中を向ける。普段手が届かない背中をがしごし洗ってもらうのはとても心地よかった。

夏海の身体はもはや成熟した女性のものだった。豊満な胸の膨らみに引き締まったウエスト、そこからヒップにかけて丸みを帯びた美しいラインが魅惑的だ。

「久しぶりね、こうして二人でお風呂に入るのは」  
妹に背中を流されながら夏海は呟いた。

「そうね。でも何か信じられない」  
「何が？」

「ナツミ自身のこと。痩せたらこんなに綺麗になるとは想像出来なかったもの。おっぱいだって大きいし。あたしなんかペタンコなのに」

彼女は自分の胸と夏海の見比べながら不満そうに言った。

「ユマはまだ十四でしょ。これからもっと大きくなるわよ」

夏海は呆れて笑った。

「本当に綺麗。激太りから突然激ヤセだもんね。あの頃はナツミが

こんなになるなんて

ユマは昔を思い出しながら一人で盛り上がっている。夏海もあの頃のことを思い浮かべる。

小学生の頃に飼っていた愛犬がふと頭に浮かんだ。

(……マイキー。おまえが死んでからもう五年も経つんだね。あのとき、わたしがすっかりしていればあんな目に遭わずにすんだのに)

夏海が一歳、ユマはまだ生まれてもいないころから、家では一匹の犬が飼われていた。ジャック・ラッセル・テリアという犬種のオスだ。名前は「マイキー」といった。毛並みはベージュがかった白で、顔と、首まわりから背中にかけて大きな茶色の斑がある。口の周りいっぱいに髭が生えているような顔が印象的で愛くるしい。家によつてきたときはまだ子犬だったが、追いつけ追い越せの勢いで夏海やユマと共に成長していった。二人にとっては物心つくころからの友達であり、家族の一員だった。

どこへ行くにもマイキーと一緒に、もちろん日本に行くときも連れて行った。夏海にとっては小学校四年から続いた学校での虐めなども、家に帰ってマイキーに会えることを思えば我慢出来た。様々な意味でマイキーは夏海の心の支えとなってくれたのだ。嫌な気分が帰ったときも、マイキーは夏海の手をすりつけてきた。心地よい毛の感触が掌いっぱいに広がる。犬は指の間をしきりに舐め始めた。くすぐったくて夏海は頬を緩めた。

父は夏海とユマの二人で面倒を見るように言ったが、夏海はほとんど一人でマイキーの世話をした。本来子供とは飽きっぽいもので生き物の世話など長続きはしないものだが、夏海は飽きることなくむしろ楽しんでマイキーを可愛がった。

毎日子供のようににはしゃぎ回るマイキーだったが、そんな彼も寄る年波には勝てなかった。

夏海が小学校六年のとき、マイキーは大病を患った。ある日突然

何も口にしなくなり、それどころか嘔吐するばかりであった。

夏海とユマは泣きながら獣医に訴えた。詳しいことはよくわからなかったが、マイキーは腎臓の病気がしかった。それからというもの、マイキーは自宅で療養しながらも、週に三度病院に通うという生活になっていった。夏海たち姉妹も気が気ではなく、学校が終わると毎日飛んで家まで帰って看病をしていた。

痩せ細った体なのにもかかわらず、夏海が帰るとマイキーは無理やり体を起こし、あどけない瞳で懐いてきた。そんな元気などないだろうに、いじらしい姿が余計に夏海の胸を押し潰していた。

夏海たちの願いと行動が天に通じたのか、マイキーも回復の兆しを見せていた。かなり痩せ細ってしまったが次第に食欲も出始め、医者からも大丈夫だとお墨付きをもらった。

ある冬の日、夏海はマイキーを久々に散歩に連れ出すことにした。マイキーにとっては病後初めての散歩だ。夏海は嬉しくて仕方なかった。マイキーも嬉しそうだった。

その散歩の途中でマイキーは車に轢かれて死んだ。

交通ルールを無視したタクシーだった。夏海はすっかり青信号で横断歩道を渡っていた。

タクシーの運転手は一旦止まったが、夏海に罵声を浴びせて去っていった。

黒い排気ガスを噴き出しながらタクシーは走っていく。残されたのは放心状態の夏海とマイキーの死骸だけだった。

夏海には自らを責めることしか出来なかった。来る日も来る日もそのことばかり考え、さらに落ち込んでいった。心身共に憔悴しきった夏海は、目も当てられない状況になっていた。見かねた父は夏海のために何とか仕事に折り合いをつけ、彼女の小学校卒業と同時にアメリカに帰ることになったのだ。

その事件以来、夏海は肉が全く食べられなくなった。ステーキはもちろん、ハンバーグやチキン、好物だったローストビーフなどもつてのほかだ。どんな肉類でさえ、見るだけでマイキーの無惨に

轢き潰された』姿が頭の中に蘇って体が受け付けなかった。それから極度のストレスも手伝って、夏海は拒食症に陥ってしまった。口にするもの全てを吐き出してしまう日々を送り、ついには入院するまでに至った。元看護師の母の手だけには負えなかったのだ。

あれほど太っていた夏海の体が、日に日に痩せ衰えていった。無理もない、食事を全く受け付けない夏海は、鼻の穴からチューブで高カロリー栄養剤を注入されていただけなのだから。

病院では通常の治療に加え、サイコセラピーを行うことで夏海の状態を改善させていこうという手法を行った。その甲斐もあつてか、次第に医師やセラピストに打ち解けていき、それに伴って心の傷も癒されていった。病院には誰も夏海を虐める者はいない。看護師たちは妹のように夏海を可愛がった。

入退院を繰り返すこと約二年、マイキーを亡くした悲しみもほとんど乗り越えた。体調は全快とはいかないまでも、夏海は笑顔で医師や看護師へ別れを告げた。

その時の夏海は太っていた頃とはまるで別人であった。体重は三分の一まで減少していた。それもただ痩せているではなく、病的な薄弱ぶりであった。

病院での環境に馴染んだ夏海は、入院する前よりも少し明るくなったと言っても過言ではない。退院する直前まで、看護師や他の入院患者と他愛のない話で盛り上がるほどであった。

無事に治療を終えられたが、次に避けて通れない問題があった。勉強のことである。夏海は十五歳で本来ならば中学三年生だ。一年の途中から休学していたので、中学へはほとんど行っていない。しかし病院で教育プログラムを受けていたので学力には全く問題はなかった。しかもアメリカには飛び級という制度もある。学校へ通っていないくとも、それなりの学力があれば学年など関係ないのだ。問題はむしろ夏海自身の中にあつた。

日本の小学校で酷い虐めを受け、心の深くに傷を負った夏海だが、果たしてそれも克服できたのか懸念される状況であった。



しかしアメリカの中学に復学してみると、それはいらぬ心配であることがわかった。

太っているときにはわからなかったが、夏海は稀に見る美貌の持ち主だ。脂肪で埋もれていた鼻や顎は美しくシャープなラインを浮き彫りにし、分厚く覆われていた両瞼はくつきりとした二重の双眸を顕わにした。

高校へ入学してもそれは変わらなかった。夏海はしっかりと食事でも摂るようになったが、相変わらず肉だけは食べられなかった。食事の量も少なくなり、以前のように太ってしまう様子はなかった。病的な痩せ型から健康的な美少女へと姿を変えた。クラスメートたちは夏海をもてはやした。彼女にしてみれば生まれて初めてのことだった。周りが変わると自分も変わっていく。最初は戸惑っていた夏海だが次第に受け入れていった。日本での生活など忘れてしまったかのように夏海は元気を取り戻していった。

もう二度と日本へ行くことはないだろう。もし行くことになってもわたしは絶対アメリカに留まろう。そう思いながら。

「ナツミ？」

昔のことを思い出してぼんやりしていた夏海をユマが後ろから覗き込んだ。身体の泡はすっかり流れ落ちてしている。

「ユマ、体冷えちゃうよ。早く入ろう」

と、夏海は気を紛らすように先立って湯船に入った。後からユマも続けて入り、二人は並んで肩まで湯に浸かった。

「昔だったら、こうやってナツミと入るとほとんどお湯がなくなってたのにな」

実際、昔の夏海がユマと入浴すると、その巨体ゆえにお湯が半分以上溢れ出てしまうので、母によく小言を言われていたものだった。ユマは夏海の身体にぴったりとくっついている。きめ細かい妹の肌はそれだけで心地よかった。夏海は肩より少し下まである妹の髪を片手で整えてやった。

「いつまでいなきゃいけないんだろう」

濡れた髪を後ろに撫でつけながら、夏海がそつと呟いた。

「わからない。パパはこっちでの予定がまだハッキリしてないみたい。もし長くいることになったら、あたしたちの勉強が追いつかなくなるから、こっちで学校行くことは決まってるんだって」

「何でも自分で決めちゃってさ。わたしたちには自分の考えがあるのに」

夏海は父に悪態を付く。

「だって勉強がわかんなくなったら困るのはあたしたちだよ。パパもちゃんと考えてくれてるんだよ」

それも尤もな意見だ。ときどきユマは大人びた発言をする。

「日本の学校か……。行きたくないな」

「いいじゃない。あたしたち日本語も話せるし」

「そういう問題じゃないの。気持ちの問題よ。陰険な日本人たちに囲まれて一日中過ごすのよ。うまくやっていけるの？」

「パパも言ってたじゃない。こっちに來たらあたしたち人気者になるって。ハーフなんてあんまりいないからね」

「クソ憂鬱だよ」

そう言つて夏海は不意に立ち上がった。支えを急に失つたユマは一瞬よろける。顔に水飛沫がかけ、彼女は「もう」と不平をこぼした。

「そんなこと言つてると、またパパに叱られるんだから」

ユマの目の前で、夏海の形のいい尻から伸びた足が、一本ずつ浴槽から抜け出していく。彼女は壁に掛けてあつたハンドタオルで軽く身体を拭きながら、

「CALEのジョンだつて、『クソ』とか『マザーファッカー』とかよく言つてるじゃない。先にあがるわよ」

「そうだけど、あれは激情や不満が内から滲み出たものよ。そうやって全て吐き出すことで、逆に気持ちが穏やかになるんだから」

ユマが反論をしている間に、夏海はさっさとドアを開けて出てし

まった。脱衣場の方で、  
「わたしだつて不満だらけよ。だけどいくら言ってもすすきりしないわ」と一人呟いた。

二人は風呂から上がり身支度を調べ、いつでも出られる準備をしていた。テレビを見て日本の文化に触れたり、他愛のない話をしてりしていると、インターホンが鳴った。七時を三十分ほど過ぎた頃だ。

富美代だった。

「遅くなつてごめん。待つてるから下りてらっしゃい。御飯食べに行きましょう」

「うん、わかった」

準備万端だった夏海たちはすぐに部屋を出ることが出来た。

マンションの玄関を出ると、富美代が車から降りて待つていた。

二人の姿を認めると、颯爽と手を挙げて見せた。

「お腹空いたでしょう？ 美味しいところに連れて行ってあげるから」彼女はそう言つて、夏海たちを日本料亭に案内した。

ちり鍋や天ぷら、焼き魚にお吸い物と、高級な日本食ばかりが並べられた。

しかしどれも夏海の口には合わなかった。御馳走してくれた富美代の手前そんなことは言える筈もなく、日本初の食事は非常に味気ないもので終わった。

ユマはと言えば、使い慣れない箸に悪戦苦闘しつつも、「美味しい美味しい」と全てをペロリと平らげてしまった。

食事中、そして食後も、長い間無沙汰だった富美代との話に華が咲いた。

昔の話、父の話、アメリカでの生活の話、そして夏海の話である。富美代は彼女の変わりように心底驚いていた。話には聞いていたらしいが、これほどとは思わなかったようだ。しかしそのことに触れるということとは、夏海にとって古傷を掻きむしるに等しい。叔母も

その辺は承知しているらしく、核心は避けるように、差し障りのない程度でいろいろ会話を交わした。

二人にとって、叔母のマンションでの生活は快適なものであった。夏海とユマは富美代が起きる前に起床し、三人分の朝食を作った。朝食と言っても、トーストを焼いてハムエッグを作り、在り合わせの野菜を盛りつけるといったごく簡単なものだ。夏海は当然、自分のはハムを抜いた。富美代は「気を遣わなくていいのよ」と言ってくれたが、しばらく世話になる叔母に対し、夏海たちなりの感謝の気持ちであった。朝食も二人は自分たちで作り、夕食も富美代が帰ってから一緒に作っていた。

富美代が仕事に行っている間、二人は暇を持って余すわけでもなかった。興味本位でテレビを見たりしていたのだが、これがなかなか面白い。ニュースやワイドショーで世間の流れを把握することはとても新鮮であり、日本語を理解出来る彼女たちにとっては、異世界のガイドマップを見ているようだった。

日本が好きではない夏海にとっても、テレビからは目が離せなかった。情報番組ばかりではなく、ドラマやバラエティーも興味深く見入っていた。

ユマはリビングでパソコンをよくやっていた。チャットをしたり、好きなバンドのサイトを見たりと、アメリカでの生活とあまり変わらなかった。夏海は機械オンチだったので、妹が何をしているのかわからなかった。ときどきディスプレイを覗き込んでみたが、何やら文字の多いページとか日本語ばかりのサイトとかで、見ていると目がチカチカしてきた。

基本的には買い物以外で外出することはなかった。ユマはもともとあまり外へ出ない性格なのだが、アメリカにいるときはアウトドア派だった夏海ですら外に出ることを躊躇っていた。

夏海たちが到着した四日後に、父から「明後日に着く予定だ」という連絡が入った。

富美代は最後の晩には早く仕事を切り上げ、夏海とユマにいつもより手の込んだ夕食を振る舞ってくれた。夏海たちも、手伝おうかと持ちかけたが、

「いいの。夏海ちゃんたちが来てから、久しぶりに誰かのために御飯が作れて楽しかったわ。明日からまた前と同じ生活続けなくちゃならないんだから、私に作らせてちょうだい」

富美代はそう言うと、エプロンを身に着けキッチンに向かった。

夏海の肉嫌いのことを富美代も知っていたので、肉類を全く使わないように工夫して腕によりを掛けたものを作ってくれた。

美味しい料理と楽しい話に囲まれ、三人にとって最後の夜は更けていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6019z/>

---

NOT DEAD LUNA

2011年12月23日00時53分発行